川柳塔

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
平成二年八月二十五日 印刷
平成二年九月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通巻七六〇号

日川協加盟

No. 760

九月号

平成二年度　同人総会と二賞表彰　本社十月句会

日　時　10月7日（日）午後1時開場

会　場　大阪市立労働会館

JR環状線または地下鉄中央線「森ノ宮」下車すぐ（日生球場東側）

電話〇六（九四一）六三三一（代表）

同人総会　午後2時から（二〇七号室）

〔議事〕①会計報告②会計監査報告③事業経過報告④同人規約改正案⑤役員改選⑥その他

本社句会　午後5時半から（二〇五号室）

同人総会会場略図

「川柳塔」碑参拝
10月6日(土)午後1時
高野山大霊園

川　柳　塔　社

第4回 NHK学園川柳全国大会

日　時　10月14日(日)　午後1時

会　場　銀座ガスホール

宿題（事前投句）と**選者**（各2句）

①「恵」　橘高　薫風選
②「目」　斎藤　大雄選
③「宿」　仲川たけし選
④「上」　山崎　涼史選
⑤「橋」　渡邊　蓮夫選

席　題　当日出句　2題

選者　白井　花戦　竹本瓢太郎

記念講演　NHK学園川柳友の会会長　坂本一胡

事前投句　9月20日締切

投句料　2000円（書留または小為替）

投句先　〒186-01　国立市富士見台2—36

NHK学園全国川柳大会事務局

御案内

西尾　栞

連日三十六度を越す酷しい酷しい、とても酷しい暑さと連夜の熱帯夜に、皆さん如何お過しでございますか。暑中御見舞を頂いたお方にも、いちいちお返事も差し上げず、失礼致して居ります。夏バテでございます。この時、思い浮べるのがこの一句

「心頭を滅却すれば火も亦涼し」

です。この句は、禅の偈として伝えられてきたものですが、唐末の詩人杜荀鶴に次のような詩があります。

三伏に門を閉ざして一衲を披る
兼ねて松竹の房廊を蔭う無し
安禅必ずしも山水を須いず
心中を滅し得れば火自ら涼し

「三伏」は夏至のあとのひと月余りをいい、一年のうちで一番暑い時期とされています。その暑いさかりに、衲を着て木陰すらない僧院にこもっている。座禅するには静かな山奥でなければなどということはない。そして「心中を滅し得れば火自ら涼し」と結んでいる。

日本の戦国時代、甲斐の武田信玄に招かれて恵林寺の住持となった快川和尚という人は、天正十年、織田信長の軍勢の焼き打ちに逢うたが、火焔が身を焦がしても「心頭を滅却すれば火も亦涼し」と唱えて平然端座したまま遷化したという。我々はこの快川和尚の話の方をよく知っているようだ。

この暑いさかりの八月十二日(日)、平地より十度低いという高野山から恒例の盂蘭盆会を前管長稲葉大僧正ご親修のもとに追善法要を営むという通知を頂いた。高野山なら涼しかろうと、西田柳宏子さんと参詣した。一の橋で雨に遭い、食堂に避難して、天気を見すかして、大霊園萬霊供養塔の前のテントの中に入った。

一時かっきりに大僧正は十人程の僧侶を随えて、読経が始まった。始まると待ってたように雷が鳴り、篠つく雨となった。読経が終ると嘘のように夕立が止んだ、変り易い山の天気であった。三百余人の参詣者のお焼香がすんで、二人は昨秋建立した「川柳塔」へ参詣して下山した。

来たる十月六日(土)の同人総会前夜の「川柳塔」参詣行事には、是非一人でも多くご参詣の程お願い申し上げる。

毎年七月七日の路郎忌を境にして、物故川柳家の柳号と没年月日を過去帳に記すことに決定している。

今年度は二十一名の御霊を合祀させて戴きました。お誘い合せてご参拝をお待ちしています。

なお、八月十二日の参詣には、本年度物故者の追記を済ませたことを申し添えておきます。

座右の句

新年や男も竜も玉を抱く　（薫風）

私の句

保護色になれと哀しきアドバイス　野村静雄

川柳塔　九月号　目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

■巻頭言　御案内……西尾　栞…(1)
埴輪ばか……東野大八…(2)
川柳塔（同人吟）……西尾　栞選…(4)
自選集……(32)
■川柳太平記(148)　川柳の群像　垂井葵水……東野大八…(36)
■連載　柳籠裏三篇研究（四丁～五丁）……(38)
水煙抄……黒川紫香選…(40)
秀句鑑賞「同人吟……吐田公一…(63)
　　「水煙抄……河内月子…(74)
平成二年度　路郎賞・川柳塔賞中間発表……(60)
銀河系……河内天笑選…(64)
■女性コーナー　茴香の花……八木千代選…(68)

埴輪（はにわ）ばか

東野大八

皇祖十一代垂仁天皇の母の弟倭彦命が死んで大和の陵に葬られた。この時、近習の人々を集めて陵のまわりに全部生き埋めにした。このため数日間は、土中で泣き叫ぶ声が昼も夜もつづき、ついに死ぬと何万とも知れぬカラスや犬が群がり集まった。

天皇はこの悲惨な有様を見て、群臣に対し殉死をしてはいけないと訓された。ところがお后が亡くなられた。天皇はまたも殉死者が出るのではないかと気づかわれ、重臣に相談されたところ。野見宿禰（のみのすくね）が畏まって言上した。

「君臣の間は殊のほかのものがありまするが、生きたままの人間を葬ることは感心いたしません。まずは私にお任せ下さい」

と言った。はてどうするのかとみんなが注目していると、出雲の国から百人の土師（はじ）を集め自ら指揮して粘土で人や馬の形を作り、これを焼いて天皇に献じ、「これをもって人間の代用にされませ」と言った。天皇は大いに喜ばれ「後代までこの代用品をあてるように…」

「曲」……丁坪サワ子選…(70)
一路集「防ぐ」……桝本蕗児選…(70)
「世界」……工藤甲吉選…(71)
初歩教室「緊張」……辻白渓子…(72)
■川柳こぼれ話　川柳と用字用語……田中正坊…(75)
郡上八幡・鳩ヶ湯の旅―翠柳吟社創立15周年記念川柳大会……(76)
丸山よし津・宮園射月芳・千原理瑛
■句集鑑賞
漂う優しい男の感触……東野大八…(80)
波多野五楽庵句集……橘高薫風…(81)
本社八月句会……(82)
各地柳壇（佳句地十選／片上英一）……(86)
■各地句会だより　川柳塔わかやま吟社……若宮武雄…(98)
柳界展望……(99)
九月各地句会案内……(101)
■編集後記……(102)

座右の句

痛そうな顔で傷口見てあげる　（紫香）

私の句

種子袋振れば生命の音がする　西口忠雄

と宣われた。名付けてこれを埴輪という。宿禰はこの功により土師頭に任命され、この一党の土師連は、皇家の喪葬を司るようになった。

以上の日本書紀の説に対し、後世の学者連は、埴輪は三世紀の初期から行われており、信じ難いことだとし、また一説には、葬祭の卑民への賤民観を正すため、土師連が生れたのだという説話を持ち出したりした。

ともあれこの埴輪案は、宿禰のアイデアではなかった。中国ではすでに太古の昔から、埴輪の風習がレッキとして存在していたのである。宿禰はそれを知っていたのだ。とにかく当世の人間の埴輪好きは大変なもので、文化・文芸面でもそのコワモテぶりは周知のとおり。

さてその埴輪といえば、戦前の中国では、日本の観光客の超目玉商品だった。あまりのバカ景気に、私は北京の東安市場の埴輪商人を通じ、中国人の友人を総動員しての苦心調査の結果、やっとその正体をつきとめた。北京郊外の某所に、壮大な釣り堀然とした生産工場があって、そこには糞尿が充満しておりその中に馬や人間の土偶人形がギッシリだった。要するに日本の観光客の好き者が争って大金を払ってつかまされたのが、このくそ漬けのハニワだったのである。まさに彼らにすれば「くそくらえ」を地でいったものだ。

川柳塔

西尾栞選

王様の素足　家来を駈けさせる
裏口を開けております血の絆
五寸釘を打ったつもりでおりました
戦列で肌身離さぬ胃のくすり
疑いの目に見送られおぼろ月
この街の川には流れてこない桃

富山市　舟渡杏花

遠い汽笛わが脈搏の底で鳴る
七月の陽の下で咲く楽天家
画廊出て絵描きの真似がしたくなる
空振りに終った今日の帽子掛け
道化めく尺取り虫を野に還す
ペルシャ猫亡母の気性にどこか似る

米子市　林瑞枝

九十五の母のノルマに庭箒
暇少しほしいと息子のゴルフ焼け

下関市　石川侃流洞

都市砂漠　隣も知らぬ孤老の死
ライバルの句集へじっとして居れぬ
百年後の地球をロダン考える
敗者復活聊か年をとりすぎた

廿日市市　林野甦光

嘱託と言う名で足踏みしています
プラカード只前進の雨を衝く
満月に送らせている酔うている
近頃はママが一番風呂に入る
階段を転んで落ちる忙しさ
広告の笑顔に疑問少しある

尼崎市　春城武庫坊

道草をした人間で幅がある
道草が出来ない齢である焦慮
開き直ると風も涼しくなってくる
盆が近づき皆善人の顔をする
七色の乳房の群れが海闊歩

秋篠宮家創立

伎芸天のまわりが急に騒がしい　竹原市　小島蘭幸

目刺し焼く妻いつまでも若くあれ
風格という美しい貌をもつ
惜敗をした友達と握手する
むすんでひらいて恋は沢山することだ
ヒロシマの夏ヒロシマの蟬が鳴く
トロフィーの数でもすでに子に負ける

鳥取県　新家完司

星の降る下にんげんは烏賊を釣る
雨雨雨　仲間に逢える店へ行く
梅雨寒が好き珈琲はブラックで
じゃがいももじゃがいもに似た人が好き
田畑荒れ光り輝くパチンコ屋
火炎瓶ごときで歴史かえられず

米子市　菅井とも子

無くしてからオメガの温み恋う手首
名文で忌明けの礼が届く梅雨
交叉点で話すと青にすぐかわる
鍵のないくらしで友が寄って来る
あの世でも大山見える墓掃除
肩よせて祝杯あげる古希傘寿

和歌山市　堀端三男

許す気になると痼が消えてゆく
塔に登ってこころが晴れる話聞く
背中丸めて老母の祈りがまだ続く
花道を踏まず幕引く覚悟でき
八十まで運転する気呆け除けに
細い目でこけし見ている痴話喧嘩

熊本市　永田俊子

うしろの正面にいつも母が居てくれる
同情の線から誰も踏み込まぬ
はやされて角は出すなよカタツムリ
身の回り忌日がふえて蟬が鳴く
平成になじめぬ老父が竹を伐る
礼智信にひかれる父の古帽子

岡山県　嘉数兆代賀

一人旅　雨はこころの中に降る
野の花を心に咲かせている余生
照る日曇る日一途に生きた花の芯
浮雲よお前も独りぼっちかい
莫迦になろうバカになろうと手を洗う
情けの糸を紡ぎつづけてたそがれる

豊中市　安藤寿美子

紀子さまよいじめられたら笑みなはれ
東京で作るアルプスの土産物
死に方を忘れてぼけたらどうしよう
父のくせ真似て父のように耐え
婆さまが焼香ファッションを競う
入院や点滴やて犬のことでした

伊丹市　樫谷寿馬

だんだんと皇族顔となるお方
雲の上にも姑の道があるらしく
怪我の子の血を吸い親をたしかめる
間違った恋だと知ったクラス会
山門の額を悟った顔で出る
洗濯機　父の下着を箸で入れ

和歌山市　牛尾緑良

女には女の年期　茄子漬ける
父の座を出ると何にも出来ぬ父
父の座で父の型に朽ちる父
出稼ぎを忘れ異郷へ根を下ろす
お互いを許した酒がよくまわる
しんがりを歩くつらさを知っている

米子市　政岡日枝子

雨が続いて言い出すチャンスつかめない
言い訳は絶対しない浜の風
十字架に頼る私の敗けごころ
換気扇洗ったことまで書く手紙
郵便受けに彼岸の人の風がくる
誓い守って馬鹿を貫くことにしよう

米子市　林荒介

傷口に届かぬ雨に濡れている
炎天を咥えて清し沙羅双樹
新盆の長い手紙よ迎え火よ
レクイエム　母音ただよう壺の蓋
寝袋の中で再び雨に邂う
産み立て卵に授かった微熱

八尾市　宮西弥生

ほしいものばかりで女盛りです
分が悪くなって仕事に生きてます
青信号に進む犬見て安堵する
十年の芦屋勤めのハイヒール
姑の座も妻の座もなしハハノンキだね
六甲は夕立だっせお客様

和歌山市　西山幸

敗けた日の夾竹桃が今も咲く
屑籠がすぐいっぱいになる自嘲
泡ばかり見ながらひとり飲むビール
実直に生きた西瓜に種がある
溜息を吐き出す窓が見つからぬ
蚊遣香ゆらゆら語りかけてくる

大阪市　西出楓楽

口肥えて目刺しの味がわかりだす
雨で狂う専業主婦の予定表
わびさびがわかる月謝にまだ足りぬ
大決心たった十分早起きに
満腹へ楽観的になってくる
人不足どこの話かターミナル

尼崎市　春城年代

くちなしの花　木暮実千代は咲いて散る
たった一人が笑わないので笑えない

水晶体が濁って澄んだ空がない
うかつな人を笑う資格はない私
三個夜の餅の儀式の刻とふと思い
昭和十年図書室で知る青春の風

羽曳野市　吉川寿美

何時の日か父標的に太郎の樹
歳月が流してくれた免罪符
海ほおずき母はこの世の人でなし
真実を曲げた良心が重い
爪かんで独り芝居がまだ続く
自分史に縁の糸を染め上げる

寝屋川市　稲葉冬葉

気楽さを装っているハイヒール
残額はよろしいように下三桁
十三回忌と申しましても若き亡夫
もう少し鼻が高いと嫁き遅れ
家政婦の顔色を見るベッド
あの手この手で気の毒になってくる

豊中市　吉田あずき

自動ドアばかりで進む子の行方
降水確率　傘を持つ子と持たぬ子と
影法師先へ先へと行きたがり
堅パンが一人入ってややこしい
女　今　恋をしている周波数
薄紅のほんのりがいい生姜漬

広島県　藤解静風

好みにも馴らされ妻の頭が高い
断りの妻の口上あざやかで
他人から聞くあなたならすばらしい
追いつめるから言い訳をつくらせる
年金のなる木と知って水をくれ
米五升酒三升で足るくらし

吹田市　栗谷春子

予報外れ明石海峡夕映えす
デザートにやさしい姿　淡路島
百か日降らずやまずの三部経
気にしない気にしないとは独り言
義弟の遺品のろくろ梅雨の部屋（追悼句）

今治市　矢野佳雲

門限をさきに気にしたのは女
金の無いドラマを笑う黄金虫
ネックレス昔奴隷の鎖かも
仕事しているうち風邪の熱もひき
仕事の虫ですと夫をよう言わぬ

柳井市　弘津柳慶

蚊帳などの昔話の老人会
待合室週刊誌も読みあきる
定退へやっと自由の深呼吸
孫が生れて風向きが変って来
十連休　自由を家族にしばられる

奈良市　宮口笛生

早いけど夕飯にする雨続く

老齢化生き抜く病院待合所
車の免許取りに行こかと驚かせ
すぐに手を合わす年寄りくさくなる
ボケル暇なかなか僕にくれません

島根県　堀江正朗

僕なりにとけこむ闇に幸を知る
夏バテをするなするなと総入れ歯
文明に迷わず庭にくるトンボ
花散って桜は蟬の宿になり
その裏は聞かぬふりして酌ぎこぼし

島根県　堀江芳子

いつまでも二人三脚星まつり
ダンダンを覚え大阪電話切る
ひょっこりと来てかき回す友でよし
合掌で届かぬ千手観音さまの御手
キンピラを刻むまだまだ若い音

大阪市　津守柳伸

五時からの男が避けてゆく氷雨
水槽はナマズのための応接間
ストレスを消す饒舌は程ほどに
冷凍の松茸がある不意の客
幽幻のしじま詩人にするホタル

羽曳野市　塩満敏

大安に月下美人も咲きました
女と男　愛するために生きている
逃げ道もあけて二人は逢っている
ワープロに愛の言葉を記憶させ
定年が妻に報いるパスポート

松原市　玉置重人

子離れをスカッとしたいベレー帽
足るを知る暮らしでリズム崩さない
貧乏性で長靴を離さない
大ジョッキ取り越し苦労せぬように
ややこしい男が六法を齧り

堺市　中川滋雀

雲の峰こころ残りが多くなる
諦めと欲とが可笑しいほど溜り
剪っとけばよかった枝の狂い咲き
三の矢も覚悟の上で嘘を抱く
雨宿りさてそれからがプロローグ

大阪市　江城修史

いつの日か妻との旅を腎不全
支え合う手の温もりも夫婦です
生きる日のペダル追い風ばかりない
出稼ぎの旅いつ果てるちぎれ雲
血の事を言えば淋しい腎不全

西宮市　林はつ絵

歯車の中の一つにいた笑顔
鉢巻を静かに外す雨やどり
ゼッケンを着けた朝に出る笑顔
うつむくと見えるとはまだ気がつかぬ
目には目を歯には歯をとは貧しい日

岡山市　川端柳子

思慕の人ちらちら通行人に化け
居合わせてほころびを縫う羽目となり
粋なおしえ女は花になりましょう
挨拶として受け止める不整脈
吠えられて作り笑いを知りました

大阪市　河井庸佑

節約とけちをまともに取り違え
口程に責任持たず孤立する
不合理と矛盾許せぬのも若さ
雑音はどうあろうともマイペース
かくすればかくなるものと知り尽くす

鳥取県　林露杖

紫陽花の彩の遍歴果つる雨
それなりの気品誇らず額の花
高齢化真只中に僕も居た
指の怪我その役割の重さ識る
子にやるにしても肝臓古過ぎる

有田市　松井かなめ

消しようのない心の火事がつづきます
息子 嫁 消費を美徳と思てるの
下級武士士族の末裔貧守る
退院した夫とリズムぎくしゃくす
食前食後薬だ水だ振り回す

西宮市　門谷たず子

火祭りの炎に映す祖先の血
子が揃うだけが嬉しい祭寿司
義理という言葉が好きな熨斗袋
住吉さんのひと形が来る夏さかり
これからは書く事にする待合せ

松江市　恒松叮紅

大ジョッキ気炎をあげる均等法
今どきの自由気になる化石人
いい雨に僕もトマトも背伸びする
大学を出してのれんへソッポ向き
日の丸を汚したドラマ負けいくさ

松江市　柳楽鶴丸

帯には短い妻だったけど
知らぬ間に結婚していた花菖蒲
紀子さんが丙午のイメージ変え
大好きな数字は9　ヘソ曲り
鰯の空揚げ消費税も一緒に

松江市　舟木与根一

欲しいものなんでも食えと医者がいう
妻のボケには本気であわてだす
整形などは釣書へ伏せておく
禍のもとの口紅濃ゆかった
百姓に戻れて終りよしとする

豊中市　田中正坊

人妻が美しすぎるので困る
金棒を忘れる鬼もいる平和
裸婦よりも肌あらわなり夏衣

サルビアは情熱の花　夏の彩
文人の忌日が多し月見月

京都市　都倉求芽

煎餅が湿るまで待つ母の老い
三十六峰　背のびをしてもビルの陰
ストレスはみんな燃やそう曼珠沙華
それぞれに自分を見つめる三面鏡
嘘ひとつ時効になった酒の味

松原市　小池しげお

しあわせな風が入ってくる網戸
ペッタンコの音が出したい餅搗機
二次会の中にも敵がいたらしい
喉元を過ぎればもとの暮し向き
釣針を咥えた鯛に睨まれる

鳥取県　松下たつみ

やわらかい空気　主役はみな女
目標があるから義理を義理とする
患って冬咲く花がほしくなり
生活の脇役となる胃の薬
起きること知らぬグルマの目が白い

西条市　片上明水

そうめんの箸　不器用なひとと知る
春の恩返して夏の恩を着る
善人の脚に合わすと踏まれそう
嘱託の鍵は束ねたままで吊り
本堂で聞く住職の別の声

仙台市　川村映輝

値を上げろ輸入ゆるすな筵旗
年相応の健康ですと医者が言う
銀行強盗　偽札束も平成二年
取柄ない男　将棋の強いこと
曲ったキュウリもキュウリの味確か

倉吉市　渡辺独歩

ヒラヒラと掌からこぼれる一円貨
備忘録にも右脳のはたらき書いておく
校則がギロチン秘めた教育史
台風の爪あと梨の柔肌に
上野着東京行は殺人車

竹原市　森井菁居

旗上げの日をサルビアの朱が燃える
抜くほどの牙をライバル持たざりし
プロセスの違い交わる日を信ず
そつが無さすぎて少しも絵にならぬ
娘でもやっぱり恐い新免許（二女）

呉市　槇田英詩

脳みそを入れかえたくて本を読み
威張るのへしばし開かない自動扉
すぐ効いて欲しい胃薬飲んでます
へそくりがアメリカさんに暴かれる
食前の合掌温い汁が待ち

鳥取県　土橋螢

墨をすりすり書くことを考えている

数珠の輪に両掌を入れるときがくる
カーテンを開けると夏がまる見えだ
羅の尼僧　漫画を読んでいる
お天気がよろしいようで水不足

名古屋市　越村枯梢

ギャラのない喜劇役者で生き通す
銀行も余命も底をつきました
無精髭撫でると愛しくなってくる
初盆だ一周忌だ娑婆は忙しい
楢山にリゾートマンション建てるとか

藤井寺市　吉岡美房

敗戦忌未だ生かされている懺悔
八月の祈りへ蟻の列つづく
十六で死ねと命じた口拭う
戦友の分まで生きている暑さ
西瓜切る近い未練も真二つ

京都市　山本規不風

退院はせず外泊の夏の旅
整骨師の妻は治療に他所へ行き
訴える声が激しい小鳥籠
反対を嫌がる夫の手術論
決断の勇気へ朝の鬼薊

倉吉市　奥谷弘朗

人間が生きる小さな灯を守り
心配なことがたまって居る無口
いい線に居ると気休め言うてやり
まだ若い声にも艶があると言う
潮時を心得ている苦労人

今治市　越智一水

長寿国だよ恋の二、三度して死ぬぞ
おしぼりで情炎のベニふいてくれ
老いらくの恋を理性が邪魔をする
恋のマッチでお先祖さまに線香立て
苦労した男無駄口たたかない

高知県　赤川菊野

花博でもまれるよりも庭の花
仏壇へ聞えるように独り言
ワープロの葉書お義理の顔でくる
ネムの花　亡母の匂いをつれてくる
六十路坂　生命を賭けてみたとても

笠岡市　松本忠三

この雨は所によったものですか
片時も忘れぬとありほんとかな
訂正の二文字に胸をえぐられる
ご都合は女房に聞いてから返事
碌すっぽ聞いてないのに決をとり

東大阪市　森下愛論

年でんなまたドッコイショ言うてます
後先を考えながらホラも吹き
神仏横向く程の老いの愚痴
寝そびれた夜よ哀れな老いの私語
束の間の恋もしまっせ孤老生き

美祢市　安平次　弘道

蟻の列その一匹は僕だろう
例えばの話に夢をこわされる
善悪にふれてはならぬ自動ドア
臓器移植　医者は部品として眺め
ブランドで飾り知性をカバーする

米子市　小西雄々

もう会えぬ別れ静かなブラームス
感情を包む真綿をもつピエロ
民宿のドラマをカモメ覗きに来
雄しべ雌しべに機会あたえる温い風
血と汗の父の履歴を読みなおす

堺市　高橋千万子

埋み火に点火しそうな人と酌む
昨日も今日もそのまま私の過去となる
夏の虫　人間様を近う見る
蚊取線香焚いて住んでる文化都市
花博にべからずのない世の移り

奈良市　天正千梢

水の中で字を書く暮らし今日も暮れ
幕張りて何たくらむかビルの骨組
愚痴言えばふるい虫歯がうずき出し
はからずも旗振る役を受ける破目
神の島ロマンの出逢いにときめいて

寝屋川市　江口度

くちなしの香り死に様気にしない
無神論スッパナだけが仏壇に
幸せを得られる悟りなら欲しい
くさっても鯛と余生を狭く生き
あの日からナマズに敬意はらう釣り

倉敷市　稲田豊作

農の父に酸素の薄い街住まい
休養日　孫が背へ来る膝に来る
ダーリンと呼んでいそうな嫁の顔
遭難の写真を飾る登山口
難聴の指はあんなに話し合う

鳥取市　両川洋々

ありったけの夢泥舟にのせて発つ
指紋まで押さねば住めぬ国がある
嘘一つ澄んだ仏の目が痛い
死刑執行　神も一日泣きじゃくる
ロボットが産気づく日がきっと来る

和歌山市　若宮武雄

腹が立つ腹に生気がある証
かき捨てた恥を覚えていた枕
ステテコがざっくばらんに願います
大吉が出るまで引いてみる若気
その裏を見抜いてみたい眼をつぶる

和歌山市　福本英子

昨日と違う場所でついてる同じ嘘
悲劇のヒロインらしく振舞う謀りごと
お借りした生命惚けては返されぬ

子を生まぬ女も好きなカーネーション
花博で並びラーメン屋で並び

和歌山市　内芝登志代

父と子で日曜大工へうまい飯
好きな句へどんなお方か逢いたくて
赤白ピンク蒼い海原花の夏
生かされて今朝もきれいに顔洗う
唯一の数字　人生右左

和歌山市　松原寿子

逃げ切れぬ一途さがあり歩む道
乾く過去かわかぬ過去よ生きている
帯は無地ぬくい情けを知っている
右左折禁止どんなに惹かれ合うたとて
脳天へ答を持って打ちにくる

和歌山市　桜井千秀

金槌も女は女の音で打ち
はてんぼが見れば私はけちんぼう
とぼけ切る舞台衣装は派手にする
旬の味思い出せない台所
ゴミ収集車待って鴉とにらみあい

和歌山県　寺田裕美

少年は風を迎えに走りだす
太陽に恥じない汗のありったけ
先生と呼ばれてあとがつかえてる
夢の卵が枕いっぱい棲んでいる
ズッキーニ程よく肉がやけている

和歌山市　田中輝子

初恋をオープンにしてクラス会
日溜りをきらう独立独歩とか
別れた理由さらりと聞かす髪ハサミ
酸欠が続いてながいめの電話
まんまんと水をたたえている不仲

米子市　石垣花子

男曾孫誕生（三句）

産むまでに男の名前決めてある
たのもしくまだ張りもせぬ乳房吸い
この小さい者へ合せて回り出し
猿よりも少しかしこい猿回し
長くても黙っていよう生命線

米子市　青戸田鶴

うるわしのウィーン　シャッター間に合わぬ
中世の青春今もハイデルベルグに
ロマンチック街道　花花花に包まれて
東西を問わぬ権力者の驕り
再訪へセーヌ流れを変えてない

米子市　小村てい子

元戦地へ夫の旅

戦車置いたここだ記憶がよみがえる
友好の碑に温もりの巡り逢い
ひろがる海よ土産交換いい話
島民とミサの祈りの鎮魂歌
じいちゃんの命すくった椰子の実よ

米子市　田中亜弥

労働歌うたえば梨は実らない
バラ色の夢を咲かせて病んでいる
花鉢の呼吸にあわせ水をやる
湖に佇てばみんな美人に見えてくる
エプロンを白く晒して嫁にゆく

米子市　野坂なみ

交わってその懐にとび込んだ
持ち時間　山を登ってゆくんだよ
文明に慣れて人間失格す
ほとけさま　今日は息子の誕生日
踊り場の裏の不平をききもらす

米子市　寺沢みど里

壺撫でて遠い文化に触れて置く
その日まで両眼無事でいて欲しい
持ち味で語り明かそう花畑
劇薬は承知で髪を染め続け
戸主となった息子見直す時が来た

米子市　沢田千春

しばらくは白紙になって眠りたい
月の浜開けたまんまの玉手箱
桜貝拾った浜が遠くなる
撫でられた記憶が残るおさげ髪
笑い話積んだ舟なら迎えよう

米子市　川上より子

七夕につるせば恥じ入ることばかり
人を待つ駅の時計の大きさよ
物干し竿買い足す訳を言いましょか
祖父に似た次郎がきっと家おこす
美文にはあきて情けの字を拾う

米子市　光井玲子

太陽に起こされまいとネジを巻く
朝顔にまっ先あいさつしてあげる
人嫌い過疎にこだわる鬼やんま
まっ白い豆腐にだまされてはならぬ
不器用で直線ばかり描いている

米子市　茂理高代

貫いた穴から朝日射してくる
主婦の座を譲る雑巾縫っている
割符もつ伴侶を探す母子草
騙されやすい顔だと易者さんも言う
一味徒党　風がこぼした裏話

大和高田市　岸本豊平次

晴れてきて雨の漏るのをもう忘れ
旅鞄　梅雨前線動きだし
無農薬の証　虫食いの菜が売れる
参道に草餅の香の長谷詣
兄弟の意見も嫁で揃わない

松原市　佐藤奏月

紙一枚　娘の戸籍離れゆく
限り無く夢が広がる娘の新居
ロマン追う男　季節を先取りする

置引にあって私が叱られる
打明け話どこかで誰かくしゃみする

加古川市　吐田公一

新住所迎えてくれる街の風
七年の殻を脱皮の蟬しぐれ
長生きの影に患者の薬づけ
肝移植父の資格をとりもどす
大人のすることを見ている小さな瞳

高石市　浅野房子

島巡り帰りのバスは皆寡黙
島からの便りスケッチ添えてある
機上からの日本列島他国めき
朝顔のつるに巻かれている私
肝移植　美談だけでは済まされぬ

宝塚市　丸山よし津

修飾語などは要らない日記帳
明日ばかり追い掛けきょうを見失う
義理のある葬いへ出る戻り梅雨
控え目の人の意外な面を見る
窓際でみんなに優し生き字引

大阪市　大塚節子

口許が思わずとがる夏氷
言いおいたとろ火気になる豆の出来
汁の香やねぎきざむ音きげんらし
もう二日あると思えば昨日まで
ぬくもりも一緒に衣桁へ花衣

古い服捨てても着物捨てられず
すぐもめる友と出かけたバスの旅
向い島今も飲み水運ぶ船
雨つづき犬も食欲ないらしい
あれこれと用事がたまる雨つづき

箕面市　坪田紅葉

渡し船エンジン快調島の朝
円で買う島を下見に行きました
嫁の愚痴聞いて貰うて気が咎め
昨日も今日もお金儲けの電話鳴る
いでゆ旅終えてくつろぐ内の風呂

寝屋川市　岸野あやめ

有るように見えて無いのも意地と欲
駅前のパチンコ　ホルモン匂うとこ
土用丑　気温　鰻も最高値
だんじりに外人さんも浴衣がけ
ペダル踏むグラフ日盛り何のその

大阪市　藤田頂留子

もう八十まだ八十の腕まくり
雨宿り大樹の下にある油断
まだ効き目ない漢方薬にある焦り
煎じ薬土瓶の空焚きするも齢
七夕の願いへアトピー孫の文字

大阪市　北勝美

保護色で雑沓うまく切りぬける

姫路市　大原葉香

里の川コンクリートで固められ
くさめした拍子に思案また忘れ
文明とは砂利道かくすアスファルト
勇み足それでよしそれでよしいつか勝つ

高槻市　川島　諷云児

ふる里に愚痴を流せる川がある
つまずいた石にはなんの罪もない
親の敷くレールに遠い不肖の子
頷いたばかりに火傷してしまう
言いすぎた悔いが一日つきまとう

唐津市　田口　虹汀

日替りの唄が飛び出す台所
吉か凶か今出陣の帯締める
選ぶのに時間はかけぬ妻はB
寄せ書きへ今大胆な筆おろす
足跡を残すにゃ齢がいき過ぎた

唐津市　久保　正敏

父の日のバラには嫁の棘がない
鏡見ず選ぶ権利を主張する
責任を終えた賢母の羽繕い
博多帯　馬賊芸者を姉に持ち
老衰死したとは見えぬマルチーズ

唐津市　仁部　四郎

世界地図鯨喰う国とらぬ国
世界地図コロンブスから複雑に
少年の夢を育てた世界地図
いつまでも終らぬぬり絵世界地図
民族の旗がまた立つ世界地図

唐津市　浜本　義美

老醜にあぐらをかいた爪の伸び
梅雨最中今年しゃ蛙の声聴かぬ
臥てばかりいては五体が傷む梅雨
病む夫婦十薬軒にゆれる秋
氾濫の水が政治の愚を洗う

唐津市　浜本　ちよ

螢見に子に狩り出され児に還る
愚痴小言反芻ばかりで暮れる日々
かまきりの足が無くとも鎌を振り
七夕は近所にこよりお分けして
心友を賞めるに言葉貧し過ぎ

唐津市　筒井　朴竜

日射病防ぐ立哨の木陰下
サングラス疲れ目防ぐ夜警明け
七覚への精進交差点に立つ
鉢金を割る事故防ぐヘルメット
渋滞車いらだち防ぐ曲を聴く

岸和田市　原　さよ子

ひとときの安らぎ貰う法話聞く
亡母からの教えそのまま昆布煮る
見られてる指の動きに手が震え

大阪刑務所見学

四人部屋へやにテレビも置いてあり

申訳ないよな気持で見て回り

岸和田市　島崎冨志子

紀子さんを紀子様と呼ぶニュース見る
夏もいや冬もいやでも四季の花
朝食は味噌汁という夫と居る
生も死も神のきままと腹をきめ
御自分の定規で計った答です

岸和田市　古野ひで

紀子様の夫唱婦随の初々し
秋篠寺　技芸天もおすこやか
温もりは受話器の向うの孫の声
産むという感激とうとう知らず老い
夏の海　金波銀波の私語を聞く

島根県　西村早苗

気心が合うお姑もお花好き
付出しとお酒とことん聞いてやる
うまかったとは谷水を手にすくう
うなどんがめっぽうまい疲労感
秋ですよ峠の茶屋もうどん玉

島根県　小砂白汀

生命線しかと握って病みつづけ
ぬりたての畔を走った弾の中
うぬぼれの一つふたつは持つがよい
自転車の墓場にされた駅通り
医師団をきりきりまいさせ裕弥くん

島根県　榊原秀子

ゴクゴクと元気でいたい朝の水
人情の支えの厚いとなり組
招かれて私の好きな麻の服
友だちが立派になって遠くなる
どうしても好きになれない夾竹桃

島根県　栂みどり

花言葉そえて墨絵の暑気見舞
一枚の絵だけ残して夏おわる
倒産の噂残したままの家
夏茶わんかけひの音にくつろいで
竹ふんで頑張る一人の留守舞台

島根県　石田清泉

出尽くした書作のあとの虚脱感
衣装着て満足そうな書作群
それぞれの衣装が似合う書作群
大器とはいえぬ晩成書に生きる
老いの字がやたら目につくこの頁

岡山県　小林妻子

返信で声が聴けないから電話
蛞蝓の動き程でも善を積む
ボーナスに免じて暑いなぞ言わぬ
平成へ入浴序列なぞ変る
花博は背中ばっかり見るところ

岡山県　矢内寿恵子

一オクターブ音符を上げて動く朝
亀も私も昼寝がすぎている平和

花手桶　一基一基に深い恩
挽歌しみじみ胸のホタルが点滅す
普段着が一番似合うくらしむき

岡山県　山本玉恵

鬼の面つけてもやっぱり三枚目
血の音をうつろな母を抱いてきく
切り株でなくても今日の待ちぼうけ
赦し合う掌に脈々と血の温み
鬼の住むあの木の下の回り椅子

八尾市　内海幸生

晴天や昨夜の嵐は何なのさ
マンションの夕立土の香をくれぬ
製卵機　陽の目見た日にブロイラー
酔うほどにカロリー表など用は無い
何も彼も忘れて一献酌みますか

八尾市　宮崎シマ子

手洗いもついでに借りた雨宿り
祭り囃子島の隅々までとどく
台風のそれた島々烏賊を干す
見上げれば秋の名乗りをすでに雲
ほっとしたろう柩の主もご家族も

八尾市　鷲見章

満点の夫を語る忌の巡り
夏みかん故郷産を選って買い
あなたとのデートは妻に許されて
待合室目を病む人の文庫本

華やいで旅のパートは夏帽子

和泉市　西岡洛酔

一筆啓上こんなえにしも有りました
相席の美人の温もり不倫かも
食器乾燥機浄土の母に贈りたし
皮財布万札ぬくぬく生きてます
デパートに女ストレス置いて来る

香川県　松村迷観子

因縁の重い荷物を背負わされ
我がままを言えば病気のせいにする
ローンまだあるとは白蟻知らぬこと
老の字が目立ち過保護にならぬよう
肝移植　親子の絆動き出し

守口市　羽原静歩

七月の子五百羅漢の水しぶき（幼稚園）
物があふれて心がやせて演歌が冴える
金婚のガイドブックに仁王門
再会の価ほろ苦くほろ甘く
権力を握ると神に遠くなる

姫路市　中塚遊峰

亡父を偲んで

片肺で亡父あればこそ今日を生き
夏は鮎　冬は山どり捕った亡父
冷で良し燗でなお良し「さあ上れ」
お土産に自慢の剝製下げて行き
酒席から亡父の小唄を聞いた夜

鳥取県　土橋　はるお

金賞のリボン案山子がつけて戻る
口が裂けても夫の古傷には触れぬ
指切りに星のしずくが乗っている
寝室にほおずきほどの灯をともす
公用で女を助手席に乗せる

松山市　谷　真風

ひまわりの真正面が大好きで
子はみんな巣立って遠しほてい草
蒔かぬ種　垣根にたんぽぽ咲いてくれ
霧霽れて安心岬も島も見え
今度は花持って来ますと見舞去に

神戸市　仲　どんたく

トーストの焦げめにそれぞれある個性
油絵で描く風景の夏の雲
修理して寝ぐせがついた仁王尊
肝臓と対峙す杜甫の頃よりも
税金を飲みに出かけるエレベーター

黒石市　相馬　一花

ゆっくりと食べてボーイに追い出され
喪主の妻今日は私がスターです
生唾をいつも飲み込むコマーシャル
サッポロでキリンを飲んで嫌がられ
耳栓を持って団体ツアー行き

姫路市　丁坪　サワ子

モナリザも紀子さまの笑みに適わない
子福者と羨まれつつ独り住む
娘の電話楽しく生きる潤滑油
料理本の味には馴染めぬ老いの舌
花生けた床も孫らの遊び場に

羽曳野市　榎本　吐来

母の訃を聞く六月の流れ星
地に還る母　白菊の目に痛く
母逝って鏡の奥が深くなる
小人の欲も俠気も持ち合わせ
喉元で停める初老の知恵は持ち

岸和田市　岩佐　ダン吉

またひき下げ田んぼの怒り聞こえます
ウメ地下から人情コール湧いてます
お漏らしまで話題となったクラス会
搭乗の名簿を追っている刑事
剃りのこし無し好調な朝である

寝屋川市　柴田　英壬子

思惑がすこし外れた鬼の咳
心持ち直して早暁のペン握る
夏木立蟬もあらかた昇華して
妹をなじると老母がホロロ泣き
不言実行　老母には笑顔だけで好い

大阪市　本間　満津子

大きな受け皿で安心してこぼし
母さんが笑っているなら大丈夫
日が暮れるこころ置きなく日が暮れる

囲いから抜け出し白い目に囲まれる
雨天順延だんだん手ぬきのお弁当　大阪市　神夏磯典子

雨上り紫陽花の艶に負けられぬ
紫陽花の彩へ宿った雨の精
あじさいの心変りは雨のせい
あじさいのひと彩着たい人が居る
デザートの皿あじさいの会話聞く　京都市　松川芳子

一粒の驕りを知っているダイヤ
忙しい時が華だと気がつかず
葬列の一人になって物思い
電話口佗しい嘘で慰める
濡れ落葉納得してる老夫婦　神戸市　山口美穂

阿呆になりきれずイライラ持っている
かつお削って夕餉を老母と冷奴
老眼鏡かけて値札をたしかめる
クーラーをつけたり消したり夏の風邪
苦労話すれば惨めが戻って来　兵庫県　辻文平

半音を下げたジョークが胸を裂く
花活けて胸の小鬼がまだ踊る
またもとの処へ戻ってしまう愚痴
お互いの落度をつつく夫婦箸
あるだけの涙流して無にかえる

外濠も内濠も孫埋めてくれ
週休が二日になった妻の愚痴
水道が埋めたらガスが掘り返し
裏を見せ表を見せてクラス会
心まで染めてくれない白髪染め　宇部市　平田実男

人を指す指が病んでる梅雨の鬱
立ち葵　幼児とび出し注意書き
未だ生きる希望を棄てぬ甘茶蔓
女偏ばかりにこだわる愚を嗤う
野大根の花が民話を聞きたがる　出雲市　園山多賀子

遠花火はかない恋のまつりごと
老体にむち打ち今日もスイッチオン
無理言いに来ました西瓜一つ提げ
健康な汗は惜しまぬ素顔です
母星と一年振りを語ります（七月七日母の忌）　出雲市　吉岡きみえ

忠実に生きて時計に褒められる
わたくしのトゲも立派だと思う
雨四日オーデコロンを撒きちらす
二十四時間上手に料理してやろう
手紙書き終ると不整脈になる　島根県　松本文子

梵天の衣の裾にもぐりこむ　鳥取県　江原とみお

懐の次第でかわる雨の味
ご期待にそむき長生きしています
逃げそうな男にゼッケンつけておく
地主さんがでっかい杭を打ってゆく

岡山県　荻野　鮫虎狼

遍路道　仏の愛にけつまずき
目をつむり聞けば尺八らしい音
気に入らぬ事はとぼける祖母の術
好きな物だけ選って夫婦箸
首括る縄を部下から教えられ

富田林市　片岡　智恵子

忙しさ自他有能と思い込み
沈黙も言葉か空気ゆれてくる
ライバルも衰え見せる丸い背な
立て板にたっぷり水をかけて聞く
衰えを隠せぬ今日のもの忘れ

西宮市　西口　いわゑ

クラシックに酔うて一人の雨の午後
傘の中　内緒ばなしを弾ませる
父親になった息子がまぶしい日
何を見ているのだろうか金魚の目
四季の花咲かせ互いに丸くなる

弘前市　真喜内　實

ふんだんに笑う勉強しています
父の日に父の涙を見てしまう
なにごとも俺の心が呼んだこと
草刈機　蛙逃がしてよい調子
生きている人の命も花なのね

奈良県　長谷川　春蘭

魚屋の声で魚がピンと跳ね
こんな世にこんなきれいな茄子の色
老いらくの買う香水は恋ならず
園児待つ母の群像街の角
七夕のこよりに老いの得意顔

十和田市　斉藤　劦

千本を伐り一本の植樹祭
今日だけは政争抜きの村祭り
お祭りの花火気になる授業中
登校拒否児訪ねる梅雨がまだ続き
父の日や津軽りんごの摘果中

西宮市　奥田　みつ子

その時の笑顔は大事にとってある
森の美女の眠りを覚ます酸性雨
少年は魚眼レンズを持っている
からい水飲んだ螢がよく光る
桔梗咲くうすむらさきは思慕の色

尼崎市　奥山　美智子

じゃんけんのあいこ続いて雨が止む
画廊でて少し昂ぶる風と会う
戯れ言を交わして本音とも思い
医者ぎらい薬ぎらいで旅が好き
好きという言葉を森においてくる

哀しさを流してくれぬ天の川　竹原市　岩本笑子

すべて無に返らん告別式の客

行く先があるらしゆっくり蝸牛

勝つことにこだわり夫の若白髪

王手飛車　夫が一番大事です　岡山市　井上柳五郎

深夜でも間違い電話遠慮なし

助言にも先輩面で押しつける

注連縄で異形の岩も祀られる

無為徒食うまい米飯食べてます

フィナーレ　タクトは酔わす如意棒か　岡山県　二宗吟平

一言の重い魔力を持つお医者

やれやれとすぐ息抜きの腰を掛け

ジョギングのいつものとこで逢う夫婦

胃カメラの返事は嫁がしてくれる

この年でまだむきになり残る悔い　大阪市　黒田真砂

真実へ頬かむりする老いの智恵

俎の音に心の起伏知れ

ためらわず進む道あり古稀の坂

雨一日こもりてショパン聞くゆとり

一日を感謝で終るお燈明　七尾市　松高秀峰

赤い灯がついて赤鬼する化粧

運もなくチャンスも逃がし幕となり

息抜きのパチンコ血圧上げている

駄馬なりにベストをつくす棒グラフ

お隣の中元あずかる判を押す　和歌山市　山田高夫

目を瞑るまでは迷路のあみだくじ

貧乏くじ引いた同士の夫婦箸

口惜しさを明日に持ち越す熱帯夜

面会に妻が不倫のように来る

裏町の小路にやさしい四季がある　守口市　森川まさお

どこからか出して旅行に参加する

涙もろい母にはあとで手紙見せ

きつね雨　職場に電球ぶら下り

病気癒え一番星を見付けだす

まあ様子見ようと診察終るなり　守口市　結城君子

どんな世も主義は変らぬ蟻の道

神域の蟻は安心して遊ぶ

時間外手当は計算しない蟻

身障の蟻をみつけた事がない

雨の日は蟻も作句をしてるだろ　大阪市　桝本蕗児

縫いぐるみ好きな母娘でよく笑う

植木棚通天閣が屋根越しに

老眼鏡はずして女の顔を見る

チャンネルをかえても同じコマーシャル
巡礼の鈴を聞いてる蟻地獄

川西市　松本ただし

人妻に螢手渡す川の闇
花言葉気障だが辞書を繰ってみる
付き合ってくれる人あり砂丘ゆく
かまきりの雄々しさくらい残しとく
返り血を洗う戦士の縄のれん

大阪市　井上白峰

窓際に座って過去の夢を追う
閑中忙　麻雀パチンコ囲碁将棋
家計簿に妥協している冷奴
嬉しくて啼いた鴉をなぜ嫌う
中道を歩めば左右に敵がいる

静岡県　薗田獏沓

区画整理向う三軒遠くなる
梅雨のうち日時計ちょっと狂いがち
別れ雲旅の出逢いをさわやかに
旅もよし家で裸がもっといい
のうぜんは善悪美醜見て落ちる

大阪市　北山悟郎

女は口の闘い紅忘れ
領分を超えてはならぬ宮仕え
反共の敵をこれから何所にする
曲り道知識求めて嬉し汗
義足に歩け歩けと無理な医師

和泉市　岡井やすお

背もたれに両の声聞く裁判官
公団が車も置けぬ家を建て
ちちははになったら肝臓ご用心
英字紙の隣は漫画見てるギャル
敬老日ありがたいけど疲れます

海南市　三宅保州

灰皿を叩いて値打ち下げている
贖罪のように激しい咳をする
正義派に銃を握った悔いがある
あまりにも余生の地図が白すぎる
自分史を見せたい父はもう居ない

和歌山市　木本朱夏

あげ底のわたしをさらす手術台
静止した時間が溶けてゆく夜明け
逢うた日の余情抱いて病床記
美しい刑思い出に縛られる
秘めごとの答えを託す花言葉

羽咋市　三宅ろ亭

人前で人を下げてはならぬもの
究極は己ひとりと思えども
女房の友から電話応待褒められる
緑陰の読書は眠りつきまとう
幼児の不満奇声をあげて表現

諫早市　原田メイシュン

女房の斡になれて安堵する

世間の歩み蛞蝓から教えられ
交通事故露よりもろく命散る
緊張して新郎新婦の名を忘れ　大阪市　中西兼治郎

年金にお互い触れぬ老夫婦
非常階段使う不幸に見舞われる
信じてる空から怖い酸性雨
港町迷いクジラに温かい　西宮市　瀬尾六郎太

仕事場の父ちゃんペコペコ可哀相

中之島バラ園にて（二句）

豆画伯バラと競演　中之島
アルティシモ一重朱色で目だちがり
鵯の攻撃はげし万両樹　広島県　田村新造

津和野紀行

うじゃうじゃと湧くほど鯉の泳ぐ川
辛党も試食してみた源氏巻
鯉料理　看板のない鯉の町
窓開けてローカル線の風さやか　豊中市　辻川慶子

打ち返すテニスいつしか恋になり
凜として米寿のおはん翁舞う
庭に来る二羽の雀も夫婦らし
ヨットの帆二人の恋をはらませる　倉敷市　田辺灸六

反対もしないが味方にもならず
独裁の依怙地ばかりに尾は振れぬ
負け犬の縄目にきついきつい枷
出来心積んだ苦労を棒に振る　玉野市　小谷仙山

尾に鰭が付いてうわさがよく泳ぐ
げんこつのやり場頭がかゆくなる
それから先知ったか振りはしなさんな
来年はここから伸びる枝を切る　藤井寺市　福元みのる

益税で車を買った旅もした
国際化　閉鎖性　日本では同居
これからの日本に頑張れは利かぬ
今日果す夢はあしたの夢のため　茨木市　堀良江

すぐ喋る人だと知って囁いた
新仏へそっと蒲焼き土用丑
こんな日は香水の口ゆるめたく
お国料理珍しいのも味のうち　奈良県　中原比呂志

ジョギングのリズム狂わす信号機
ぬか味噌の臭いは知らぬ新世帯
力抜く遊びを知らぬ週二日
無理難題言うて力を試される　大阪市　渡部さと美

真夏日に負けんぞレモン養命酒

ステテコの昭和一桁老いはじめ
少し大胆に極彩色の夏だから
顔が大事で太陽神戸三井まで

松江市　竹内すみこ

夢ためて螢ぶくろが白く咲く
賛成も反対もせず座っている
私と同じ深さの水たまり
新らっきょう姉にもたせる梅雨の入り

和歌山市　青枝鉄治

灰皿が聞いてしまった社の秘密
年金へ又まかり出る冷や奴
水着ショー人もレンズも汗をかき
嘘言えぬ男に来ない回り椅子

岡山市　花田たけ志

早乙女にリズムが取れぬ田植歌
一思案済んで暇出す妻楊子
悪を斬るドラマに老いの血がたぎる
自由にはさせぬしがらみついて来る

箕面市　椎江清芳

どん底に落ちても影はまだ残る
ダム出来て桃が流れて来ない川
人間の愚かさ真似る猿の知恵
母に似た婦長が苦手若い医師

西宮市　秋元てる

雨宿り絵になる人はもう居ない
勿忘草　藍微塵とは達治の詩
外人も並んで見てる俄雨
懸命の笑顔気付かぬ風をする

米子市　白根ふみ

月光に晒して今日のまつりごと
目覚しもラジオも味方して眠る
ひかえ目な君を慕うて夏桔梗
こだわって咲く紫陽花に絹糸雨

大阪府　坂口公子

神さまに貰うたヒントで生きのびる
日の目には一寸はばかる火種です
汗引いてそれから人間らしくなり
そっくりの亡母の笑顔で立つ鏡

和歌山市　山川克子

激励の酒に本音は出せぬまま
わたくしを守る私に舌がある
それからの僕も隣も低姿勢
生いたちのばれる写真は抜いてある

出雲市　板垣夢酔

成功をポストに祈る愛の使者
老臭を消すジャスミンでナウくいる
家計簿の黒字は主婦の力瘤
宝刀は竹光でした亡父の見栄

出雲市　小玉満江

父さんの出番は棚が落ちた時
残り物集めて母のちらし寿し
母さんの苦労はおしゃれとPTA

風鈴と涼しい話をしています　島根県　藤原鈴江

酔いましたグラスの氷解けぬまま
忘れよう忘れたくないこともあり
人形も老いて来ました五十歳
貝になりやっと自分を取り戻し　島根県　北川民子

病院の孤独に埋もれて退院す
運命とや品ある老女しゃくりあげ
ワンカップやさしい言葉かけてくれ
おぼろ月アバンチュールをしてみたし　鳥取県　羽津川公乃

落書きの傘に儚い恋がある
暑くって物欲みんな捨てました
冷凍にすれば化けそう人面魚
キャンプファイヤー夜明けのコーヒー欲しくなる　大阪市　板東倫子

生真面目が悪徳となる宮仕え
価値観が違うと言えば事は済む
究極の話は金が惜しいだけ
七夕や若きプリンス　プリンセス　岡山県　岩道博友

冗談じゃないと逆流理解せず
世辞一つすれば嫌味を二つされ
秋篠寺伎芸天が好き懐古する
返り討ちする人　墓標の下にいた　守口市　野呂右近

四ヶ月危機を逃れてする欠伸
病んでから婦唱夫随に甘んじる
ステッキも体の一部血も通う
ほしい物聞いて届ける御中元　豊中市　一瀬福一

女一人生きる覚悟の白い足袋
王様も手の鳴る方へ解けてくる
鼻づらの差で人生の賭終る
聞いてすぐ忘れる癖にききたがる　境港市　細木歳栄

手入れせぬ庭で小鳥が来てくれる
丈夫で留守それでも男大好きで
碧かった地球の色が変りだし
咲き誇る向日葵の涙見てしまい　大阪市　塩田新一郎

鏡の中に老醜が居てハッとする
醜男だからなお美しく老いたくて
諦めた理解となって吾が夫婦
寒い暑い雨だ風だと家を出ず　大阪市　寺井東雲

酸性雨地球も小言言い始め
すいた席何んで私の横にくる
シンクロの美人に鼻の栓むごい
お母さん酒の肴にする小言

彼岸花近くて遠き故郷よ　岸和田市　高須賀　金太
わらべ唄故郷の家は朽ち果てた
貧乏な頃は情けを持っていた
ホーム立哨電車の悲鳴聞いている　岸和田市　清野　こう
修学旅行孫が土産の肩叩き
そんな人おったかしらと繰る名薄
収穫のよろこび分け合う畑仲間
歓声を上げて飛び込む海開き　弘前市　小寺花峯
秋刀魚さんま秋刀魚の小骨喉をさす
聞こえない振りの耳から漏れる声
薬びんに酒入れておく健康法
20ワットの明かりで影が恋をする　岸和田市　芳地狸村
山百合を追って登った女人道
万灯の明りに祈る大師廟
豪農の誇り残している土塀
畳屋もマシンで縁を縫っている　和歌山市　福井桂香
さくらんぼ　いっそ離してくれますか
灰皿に消せない愚痴を溜めている
女王の気分マニキュアしてもらい
さて誰と行こうかチケットが二枚　寝屋川市　平松かすみ

父命日　大きな丸をしておこう（八月二十六日）
○×の旗を持ちたい対話下手
市駅までごいっしょしましょう白い杖
晩年へ今日一日を真善美　倉吉市　渡辺菩句
胃袋に名水の味憶えさす
日本列島にやど借り族が多すぎる
七月の森で眠れる美女さがす
人魚の泪で出来た貝としておく　岡山県　千原理瑛
幸せを逃がさないよにこぶし抱く
遭難船磁石は北を指したまま
熱帯魚　小猫　鈴虫　日々多忙
オホーツク海私の目裏から消えず　豊中市　上田登志実
吾老えり挨拶の辞も吃りがち
酒のめば不思議なきずな語り出す
口ずさむ歌に重なる過ぎた日よ
子の帰省すんで疲れて夏終わる　米子市　木村富美子
浜風で育った松でへこたれぬ
コーヒーを呑んでおしゃべりして帰る
久しぶり野良犬にあやしまれ
手抜きなど微塵もしない母の味　貝塚市　行天千代
紀子さまの御成婚についうきうきし

就職して女らしくなった孫
老人会　月に一度をたのしみに
身の回りそこはかとなく薬瓶

高知市　北川竹萌

寸借と承知で薬価出してやる
孤独感楽しいものへ目を移す
吊りしのぶの窓　風鈴はどこへ吊る
開け放ち風振り分ける熱帯夜

静岡市　渥美弧秀

拗ねる子に回り気にする市場籠
マイ古典ホロビィッツの音沁みる朝
マイ古典ピアノの唸り炎天下
乾杯の指名に老いを知る齢

堺市　柿花紀美女

車窓いっぱい開けて故里通過する
銀行で様付けされて面はゆい
母逝って生家の兄も共に老い
故里で同じ訛りで話し合い

和歌山市　天満三千代

独りよがりの大海しらぬ雑魚でいる
それなりに苦労背負って玉の輿
蠅一匹美味い食事の邪魔をする
子にだけは立派な親でいたい汗

寝屋川市　堀江光子

明日ひらく蕾かぞえる雨宿り
コーヒーのうまい店知る雨やどり
台所から主婦の目の一家言
快復のわが食欲にはげまされ

岸和田市　福浦勝晴

妻病んで飯釜の水に浮かぶ箸
初物の鮎を賞め合う老い二人
予期ほどは反応のないボランティア
タコ焼きを二人がかりで突つき合い

大阪市　冨上光代

大役へ白紙で挑む若さ買う
金魚死ぬ家族総出の埋葬を
新刊書　帯にも著者の意気を読む
行き処ない鬱の日は銭湯へ

鳥取県　谷口次男

呼ばぬのに貧乏神が来て困る
長生きをしたばっかりに嫌われる
この暑さ借金取りもよう来まい
非難浴び藁にすがって肝移植

唐津市　山口高明

トコロテン嫌とも言えず押し出され
アンケートぐらいで分かるはずもない
甚六の美点やさしい妥協癖
半熟の玉子がきらい人嫌い

町田市　竹内紫錆

日課定まりワープロと万歩計
万歩計　大迂回にも悔いはない
行軍と叉銃の跡を万歩計

腰痛に勝つ先達と呑んでいる　出雲市　金村青湖

梅雨螢ひとり暮らしも慣れて住む
風鈴が殊更夏にする夜店
深入りをしただけ悔いが多くなる
潮仏へ潮が満ち来る志摩の海　出雲市　久谷まこと

妥協して我慢の限度矯めなおす
半々の確率針が動き出す
信じてるそれだけでよい花言葉
逆境を切り抜けたらし声はずむ　河内長野市　井上喜酔

年金のパチンコ族は上得意
ひとりだけ笑わず抵抗するつもり
正直で知らずに喋るありのまま
気がもめる邪魔な女の好奇心　東大阪市　崎山美子

何気なく置かれた好意へただすがる
弱いのに過信している力コブ
大勢に勝てずしぶしぶサインする
医者めぐりしか行くあてのないオシャレ　十和田市　阿部進

古里を変身させたブルドーザー
ひと時の安らぎくれるティータイム
急ぐのに仲々電話通じない
冷凍魚鋭い目してにらみつけ　鳥取県　乾喜与志

備州路の旅（二句）

お稲荷さんの煩悩は赤色だ
バス旅行精進の良い夫婦だな
神さまは私の耳にゴーと言う
終戦日の暑さは胸の奥のおく　伊丹市　山崎君子

夏の池めだかの恋も実りそう
愚痴言わぬひまわり草のたくましさ
喋りたい花は今夜もそっぽ向く
母逝って里の祭りも遠くなる　福岡県　横地正好

みの虫は武装のままに焼却炉
ごきぶりはこん畜生と殺される
農に来る嫁は三国一の彩
プールには楽しい砂が見当らず　出雲市　園山良子

短冊にミサイルいらぬとクレヨン字
紫授褒章　母の鍋にもやっとくれ
緑海にふと秋想う恐ろしさ
木の香り畳の青さよ日本人　大阪市　町田達子

激辛のカレーで脳の目を醒ます
美しく老けたい夢は誰も持ち
梅雨晴間ゆったり古代へ延ばす足
風鈴の静止に赤い月昇る

風を得て花は散り
学成って郷を捨て
児を抱いて里を訪い

岡山県　直原七面山

歩くこと苦もなく友と京の寺
今日こそは豆を煮ましょう外は雨
楽しさと煩わしさは娘と母と

吹田市　茂見よ志子

噂など聴かないでおくヤジロベー
赤いカンナ貧しい日本を忘れない
金の要る話日本を招じ入れ

竹原市　石原淑子

大切な人と逢う日は紫を
紫の花はサタンの胸に咲き
紫へ昔も歌人酔わされる

竹原市　信本博子

とんとんと昇ってここがわがお城
肩の荷が降りたら肩に乗っていた
塩加減私を生かす粥を炊く

富田林市　松本今日子

高い河豚食べて取り越し苦労する
村の川澄んでメダカのお宿です
孫たちと遊び十年若返る

鳥取県　津村八重子

考えも口調も母に生き写し

大阪市　冨岡温子

野鳥来る夢をつないでパンを置く
融通に見合った株で勝負する

出雲市　小白金房子

子の寝顔あしたへ母の勇気わく
笹まきを今年も貰う里の味
小銭だけ残る財布の旅つかれ

島根県　松本はるみ

たんぽぽの綿毛は飛んだ夢買いに
あらいやだ天気予報と宝くじ
自分史に生命保険掛け忘れ

鳥取市　小谷美っ千

声変りした太郎がとてもたのもしい
ハンドルを持つと魔性の女になる
生きている十指に星を摑ませる

和歌山県　西口忠雄

肝異変母が気づかうしじみ汁
ネクタイを締めると招き猫になる
愚痴すこし減った夫に白髪ふえ

河内長野市　植村喜代

車祈願合せた両手が事故おこし
こんな日もあったと思う古日記
通り抜け出来ぬ張り紙皆通り

吹田市　井上照子

鶴折って枕にひとつ置いて寝る
肉体美言うておられぬ足謀反
雑草になるまじ花が咲こうとも

ナイターの不入りへ淋しいお月さん　大阪市　神保拓生

冷たくてお世辞も言わぬバーコード

花博で化石のような花に逢う　和歌山市　岩崎瑞穂

聞き上手聞かせ上手で丸く生き

一線を越えぬけじめはしかと引き

合格で親は新規の荷を背負う　岡山県　池田半仙

手をふれず見れば可憐な鬼あざみ

気にいった品には財布不平言う

免許証　孫の若さがちと不安　岸和田市　三輪通彦

健康のためにと守る腹八分

過去の傷触れずいたわる再婚者

夏休み終り安らぐ甲虫　和歌山市　内田結実

正夢になってほしくて喋らない

還暦のそろそろ穴を掘る支度

女にも戦う朝の貌があり　静岡市　安本晃授

年金で義理の果せる有難さ

裏を読む話が弾む終電車

軽い目まい気付く夫婦の曲り角　岡山県　松本元江

泣きたくて渡った橋の闇ぼたる

ぬるま湯につかったような午後のうさ

野に山に輝く夏の躍動美　鳥取県　さえきやえ

夏休みフリーサイズの孫かえる

熱い物食べて暑さをよけている

たかが百姓されど百姓雨を待ち　大阪市　松尾柳右子

花博に親子三代大集合

盛装をすれば隣のシロが吠え

ゴキブリを叩くスリッパ置いてある　島根県　小田川智重子

紀子さまにアナウンサーの舌もつれ

夕立ちに格子戸とても似合ってる

夫婦とや理屈に合わぬこと多き　出雲市　石倉芙佐子

落葉樹いまさら運命口にせぬ

誕生石研き疲れた指にはめ　大阪市　松永すすむ

手にも馴れ足にも馴れた松葉杖

雨宿りのつもりが高い買物に　奈良市　米田恭昌

花博の老母にこっそり迷子札

別々に寝てもやっぱりフルムーン

▼お願い　同人で「座右の句」「私の句」をまだ掲載されていない方は、本社編集部あてに原稿をお送りください。

自選集

キャタピラの傷みを道は知っていた
牽引車　迂回してゆく道均す
条理尽して自分を殺し喧嘩する
曲がり道振り向くことが多くなる
差しあげた袋は大き過ぎたのか

野村太茂津

箱根七湯　山浅からず深からず
お訪ねいただいて嬉しいですという玄関
旅人を寡黙に迎えているみどり
風のみどりが悠遠の時をはこんで来
あふれ湯に映えて流れる樹のみどり

正本水客

秋の野に似合う遊びを考える
火の山の裾野で今日もおままごと
二合目で遊んで峰の絵を逃がす
銀の毬ころがす芒野の中で
たましいを揺らす遊びが癖になる

八木千代

夏の夜の便りを書いて旅ごころ
川に足浸すと淡い恋に似る
大切なことを忘れている鏡
あれから三年　鳥籠を捨ててやる
茄子　胡瓜　味方につけて夏籠り

小出智子

腕組んで膝に降る降る雨に濡れ
富嶽厳然としてわがふるさととする
手を伸ばす届くみんなとして愛す
涼しさを溜めた笑顔として出会い
これしきのことの重々しさを知る

水粉千翁

身籠らぬ猫を二匹も留守に置き
珈琲の匂いが好きな燕尾服
まばたきができて脳死をあきらめず
歳時記にのせてもらえぬ花のうつ
旅に出て旅の石榴を見ています

波多野五楽庵

マンションに住んで家紋を忘れかけ
紫陽花の雨　三本の線で足る
庫裡を見た森の鴉がよく喋る
雑兵の汗が止まらぬ半夏生
止り木へずらりストレス並ばされ

月原宵明

くそまじめ妻が幸せひとりじめ
こざっぱり突っ張りもする歩を速め
自問してうっかり自分に聞き直す
訃報ふと聞き漏らしていたそのまんま
太陽のぬくみをしみじみ影と居る

児島与呂志

歯が痛む欠伸をしても歯が痛い
傘斜めに嫌な上司を遣り過ごし
軍歌斉唱から同期会幕が開き
舌足らずの言葉が増える後遺症
南無阿弥陀仏　梅雨もしとしと貫い泣き（嗚呼武士義兄）

野田素身郎

落鮎の便りが届く女文字
空気の快感　山をまた愛す
大和路の野仏うずめる曼珠沙華
欲捨てた心に四季の星が降る
あだし野の仏は人を恋う姿

藤村〆女

子に継げと言えぬ家業の先細り
道草もこやしになった人生譜
階段を侮りません登り下り
古新聞の整理に折目まで戻す
二人三脚の邪魔しに病魔やってくる

金井文秋

先生の責任　情が欠けている
父が弱くなって世の中がきしむ音
一病をもって元気に医者通い
人間の強さの中に空元気
五十年目の休養　入院をしたものの

藤井明朗

水すまし水の不平をなで回し
エンゲージリングへ指は目を瞑り
布団の上で死ねる幸せ
ゆっくりと潮が干いてる倦怠期
校門を出ると先生　肩が落ち

有働芳仙

水瓶に満たす言葉を溜めている
墓石の彫り字に宿る雨蛙
大根蒔く畦に添うてる足の跡
献血をせよと藪蚊が耳元で
右肩に担ぐと左ばかり見え

久家代仕男

法律に触れて好意を叱られる
台風が去った大人の顔になる
タラップを降りる笑顔を用意する
社員みな家族と社長だけ思い
男の汗　男はきっと先に死ぬ

遠山可住

老い二人　雀も近頃来てくれぬ
メロドラマ鉢の金魚と見ています
暑いけど三度の飯は美味しくて
ぶらぶらと一日が長い二十四時
余生とは所詮孤独との戦いか

松川杜的

惜しみなく咲いてひらひら地に還る
冷房を女課長が嫌い抜く
もてなしのつもり冷房ききすぎる
熱心に聞けば聞くほど眠くなる
海の家暑さに感謝して稼ぐ

小林由多香

若者の街でニホンかなと思い
ありがたやオランダ坂で雨に逢い
渡り賃まあ強欲な瀬戸の橋
商人の裏も覗いてアルバイト
宝石の話に強い二カラット

大矢十郎

善玉三人そろばん苦手な顔ばかり
お芽出度いどさくさ爺ちゃん放っとかれ
五十年連れ添いカビがまだはえず
照れかくす目から本音が洩れこぼれ
手ぶらだがお国訛りが佳い土産

本田恵二朗

だんだんに赤が薄れる赤い国
シルバーシートやっと座れてナンマイダ
過ぎし日の名刺が少しまだ残り
宗教の勧めに御免御免御免
育児書で育ててダメにしてしまい

工藤甲吉

ふる里の母を迎える皿の数
過去帖へ叱られに来た花手桶
良心のかけらにこわい目のやり場
補聴器を外して言葉の棘を抜く
肩車　昔ばなしになる絆

岩本雀踊子

シャンデリア鬼を騙した仏たち
戦うのは兵士たたかわせるのは誰か
面白くない男だと影が言う
姉の死を今か今かと待っている
釈顯昭　葉月八月父の忌ぞ

高杉鬼遊

生きているうちは明かせぬ吾亦紅
ひょっとこの面脱いだとてひょっとこさ
待った人待たせた人にお辞儀する
ラッセラッセラ空を飛べねぶた
ご先祖の魂　竿灯がしなう

橘　高　薫　風

病床に窓一杯の四季を持つ
一瞬のミスと命を取替える
衝動買いカード持つ手が耐えている
先輩の口程動いていない足
放たれた二の矢執念深くなる

西　田　柳　宏　子

脈のない陳情グリーン車で訪ね
ワープロをこなし仲間の役に立つ
結局は雑費で処理した収支表
スケジュール詰って式を中座する
診察を待たすクーラー冷えすぎる

辻　白　渓　子

自画自賛を妻が鋭い批評する
二番煎じの駄洒落と妻は笑うだけ
物忘れを互いに笑う老夫婦
相性もまあまあできた五十年
動物園の虎にも暑い怠け癖

阿　萬　萬　的

美濃から越前へ

長良川キラキラキラとして真昼
一と月を踊り明かして郡上の盆
夏枯れを見せぬ彩なり九頭竜湖
難所難所バスの後尾は崖の外（鳩ヶ湯）
若き僧の素足も涼し永平寺

黒　川　紫　香

花火どんどんまなうらに蜃気楼
かたい枕で暑い夜を熟睡す
夏祭　村は四、五日狂います
盆三日　街はすいすいすいすいすい

河　内　天　笑

生々庵句碑除幕式

9月22日（土）

前号で予告した中島生々庵句碑の除幕式と記念句会を**9月22日**（土）に実施します。

参加希望者は同日午後0時半、近鉄「室生口大野」駅にご集合ください。上六からは10時14分発の青山町行急行が便利です。

現地では除幕式後、記念句会を開きます。

兼題「**スズラン**」「**男**」と席題1題（各2句）で会費は1000円です。

川　柳　塔　社

川柳太平記（148）

川柳の群像

垂井葵水

東野大八

「葵水さんとは川柳で出会い、川柳で頭が一杯のとき訣れた。（中略）葵水さんは偉大な川柳作家であったと同時に、社会的にも立派な業績を残し、非常な密度の高い生き方をしてきた人である。先祖代々培われた俳句のジャンルから入っただけに、季語が詠みこまれていて、この季感によって独自の詩情豊かな美しい句が多い。（中略）彼の敷いたレールの上を『川柳わかやま吟社』は、葵水から太茂津に引き継がれ、鈍行ながらも各駅から柳友が乗り込んできた。これは葵水さんの遺徳のたまものである」（『垂井葵水遺句集』1975川柳塔社刊・野村太茂津序文）

「垂井家は代々、曽祖父は如水、祖父は逸水、父は甫水、叔父は胆水と号し、俳句、俳画を趣味とし、市駅前の南海倉庫、百貨店の前の朝日新聞和歌山販売店と、本町の質店及び住居を、一晩の戦火に焼かれるまでは、門に橘吟社の表札をかけ、毎月先生を招いて、句会を開き、同人誌を出していました。

このような家系のもとで、彼も大学時代から京都で俳句をやりはじめ、右城暮石先生に師事していました。川柳は昭和42年、清水白柳先生に師事しましてから、約七年の短い柳歴でしたが、入選句が五千句もあり、この句集の選句に先生方もさぞ苦労であった事と思います。彼は大学卒業と同時に中支派遣軍として出征し、終戦の翌年復員しました。

大学時代から多趣味でドラムを叩き、松竹座で高峰三枝子の歌の伴奏をしたとか、またラジオで彼のシナリオがドラマとして放送された事もあって、シナリオライターになりたかったそうですが、時節柄もあり、長男として忙しい家業に従事することになりました。

（中略）亡くなった時は、南海倉庫株式会社社長、不動産業の垂井合名会社代表社員のかたわら、立命館大学の校友会和歌山支部長、和歌山ロータリークラブ会員、そして川柳わかやま吟社を主宰し、朝日新聞柳壇選者の多忙ななかから、時にはロータリークラブで川柳初心者用の講演をしたり、とくに川柳塔本社句会には、亡くなる前年より一回も休まず、川柳しんぐう吟社の大矢十郎様と合同句会を新宮で開いたり、大阪方面や遠方の記念句会にまで出席していました。家にいる時はあちらこちらに投句の原稿をせっせと書いていました。亡くなる朝も、どこかの投句の封筒を持って出たのを覚えています。きっとあの世でも、川柳や俳句の会を開いていることでしょう」（同上・あとがき垂井千寿子）

本名垂井文夫。大正10年7月22日和歌山市生れ。柳号葵水は徳川家の家紋からの由だが、垂井家代々の俳諧志向の号にはすべて上述のとおり「水」がつけられていたことにもよる。

垂井家一門中でも、白眉の人物は祖父逸水

で明治22年和歌山に市制実施されると同時に初の市会議員（六回当選）となり、明治21年大阪―和歌山の鉄道敷設に尽粋し、私設南海鉄道が誕生し同社重役を20年間勤めた。一方、明治29年和歌山電燈会社を興し社長となる。傍ら和歌山染工所を設け、紀州物産の本命である綿ネルの染力改良を図り、南海紡績株式会社を創立して社長。同時に南海倉庫株式会社も設立。こうしたことから和歌山商議会頭に就任するなど地元政財界に重きをなし、今も和歌山商議には記念の胸像が残っており、「見返れば唯白雲や花の山」の句碑が紀三井寺境内にある。

葵水の川柳趣味は、中筋三幸の川柳教室「七面」句会に、昭和42年初参加したことにはじまる。この時、野村太茂津を識る。

「葵水さんと初めて会った時からフィーリングがあい、七面句会場が料理旅館だったことでもあり、散会後は二人でハシゴをして歩いたものだ。向うは地元の名門で金持、こちらは安サラリーマン。しかし、縄ノレンの酒の席は平等、大いに悪友ぶりを発揮しあった」（野村太茂津書簡）。

筆者が葵水との初対面は、何回目かの大陸川柳同窓会（昭和43年）であった。壮大な鼻と逞しく張った顎に圧倒されたが、酒杯を手にして話し合ってみると、心やさしき好漢と知れた。

「その片腕は兵隊で。自分も見習士官で戦場で大いにシゴかれたものだが、兵隊なんてイヤだね。今話し合ったばかりの仲の良い戦友もあっという間に死んでしまう」

そう述懐するこの人物の、索然として伏せたその顔の面影が今も忘れられない。

あの大きな鼻と顎は福相で、長寿の相だと彼を誘ってきてくれた〝太茂津っあん〟のその友人評であったが、しかし昭和48年11月1日交通事故のため、あっけなく他界してしまった。

「葵水さんの御家庭は非常にご円満で、養子でもないのに妻と母が組み　葵　水

等の句は、平素のご家庭の温かさがしみじみと察せられるものがあります。

また大変親孝行で有名でありましたが、お母さんが歿くなられた時の句に

母終焉しばし地球を止めてくれ　葵　水

世の中のいのちを母に蒐めたし　〃

死の爪となりゆく母の指を組む　〃

これらの句は葵水さんの孝養が、ひしひしと迫って参ります。この句を吐露されて三か月有余にして、お母さんのあとを追われ、今、その遺句集を涙のうちに上梓されることになりましたことは、洵に悲しいなかにも葵水さんが永久にこの世に生きられることになりましたことを、心の慰めと致しております」（『垂井葵水遺句集』序文西尾栞）

「葵水さんとは二人で大阪本社句会から阪和線で和歌山駅に着いて、そのままタクシーで家へ真直ぐ帰ればよいのに、必ず新地の夜の街をさまよい、縄ノレンをくぐったものである。メザシをかじりながらの話。

私『年の順からすれば、俺が先やなあ』

彼『うん、そらそーや。弔吟は太茂津っあんには、特別のんを詠まんならんなあ。さしずめこんなんどうや』

と飲み屋の箸袋に

アリバイのネタ切れ太茂津に先立たれ

飲み屋のオヤジいわく「没！」

アリバイとは彼の浮気？　私は再三引き受けたり、勝手に私の罪にした。そんな純情な男だった。私も御多分にもれず、利用させてもらったものだ」（野村太茂津書簡）

寝て届くところに水のある孤独　葵　水

これが臨終句であった。

▼次回は「**小宮山雅登**」

柳籠裏三篇研究（四丁～五丁）

佐藤要人・八木敬一・七久保博
岩田秀行・紀内恒久・西原亮
大野温干・青木迷朗
鈴木倉之助　故岡田甫

68　**祭文はちよぼくれにちと品ンがよし**

岩田＝「祭文」は祭文語りの略称。祭文語りは説教語りのことで、小さい錫杖を振り、ほら貝を鳴らして調子を取りながら歌祭文を謡い、金銭を乞うた。

「ちよぼくれ」は、ちょんがれに類似した乞食僧の称。この二者は同じようなものだが、祭文の方がちょっと品がよく見える。

西原＝賛。「ちと」品がよいのである。

鈴木＝賛。

岡田＝同。

69　**爰やかしこで叱られて百のそん**

岩田＝百桟敷の句。

百出したのにそけへいけこけへいけ　第一18

百出して居たり立ったりばかりする　傍三45

百桟敷へ来るのは、ねっからの芝居好きだろうから、大声でほめたりして叱られる。それが移るたびに叱られるというのでは、百文まる損だというのであろう。

大野＝百文の安桟敷。遠くて声の届かない「つんぼさじき」のことである。

佐藤＝大体礎稿でよいが、桟敷番に追い立てられるのは、百桟敷の客のくせに、他の上席へ入り込み、知らぬ顔の半兵衛を決め込んでいるからである。

鈴木＝百桟敷。佐藤氏のようなこともあったであろう。

百さじきここやかしこで日を暮し　安元仁5

岡田＝百桟敷はいまの劇場の立見席のごときもの。正面桟敷の上等席の背後にあった。上等桟敷に客の来ないうちは、こっそりそこへすわっているが、客が来ると追い立てられる。

70　**後家を拵へるが藪医上手也**

岩田＝人を殺すばかり巧くてどうも頂けないが、後家を拵えるなんて巧い表現。

藪医者は一人生かすと二人死に　一八20

よい後家が出来ると咄す医者仲間　五8

西原＝賛。藪医竹庵か。

鈴木＝賛。

岡田＝同。

五丁

71　**子ども好キとらまりそふにしては逃**

紀内＝現代でも良く見られる図。私のように

子どもをもったこともなく、また余り子ども好きでない人間から見ると、子供を遊ばせるのは一つの大きな才能としか思えない。

子の頭ちょっと叩いてしらん顔　傍一40

子をあやす内は本気のようでなし　四27

はいつくと四五寸のけるまくわ瓜　一一16

西原＝賛。おにごっこ。

岩田＝賛。子供好きの句。

手を打ってお出〳〵と子煩悩　一一3

せんべいを頭へ上げてめつけさせ　一一38

子をほうる真似をして行く橋の上　一九16

岡田＝賛。

72　**後家をする図には持仏をあいしらい**

紀内＝後家の情事は柳句にも多く取り上げられている。後家の情事の図は、亡夫の位牌をおいた仏壇を描くだけで十分、他に何の説明もいらないということか。

西原＝賛。浮世絵などで後家殿と情交をする図には、後家の部屋らしく持仏を描き込んである、という皮肉。

気違いは絵にかく時は笹を持ち　拾九24

の類。

八木＝西原氏説賛。春画でしょう。

岡田＝賛。

73　**礼服で相談をする大一座**

紀内　浅草に寺が多かったせいか、葬式帰りに大挙して吉原に繰り込むという句が多数ある。この団体を大一座という。

町内の義理さえすむと大一座　天二仁3

無常の風にさそはれて大一座　拾三14

寺で一通りのことがすむと、施主以外はすでに心は吉原へ、裃を着たまま遊びに行く相談とは、いやはや……。

西原＝賛。寺は上野（谷中）、浅草に多く、吉原に近い山谷にもあった。

大一座一人もしゃれた形りはなし　明六鶴3

岡田＝賛。

74　**隣から腹帯をした嫁が来る**

紀内＝腹帯は妊婦が下腹に巻く帯。別名岩田帯。犬はお産が軽いので五か月目ぐらいの戌の日に締めたという。

句は、隣同士親の知らぬ間に深い仲となり、子供まで宿した。腹が目立つようになって娘が親に問いただされて実は……。そこで親は喜んでか、仕方なしにか、改めて隣へ嫁入り。とまあ大体、このような筋書きであろう。

箱入りを隣の息子封を切り　四五6

岩田＝賛。

隣からほしいはわけの有る義也　一二41

岡田＝賛。

小西雄々句集「松露」

発刊記念川柳大会

とき　**9月24日**（休）午前10時開場

ところ　米吾ステーションビル6F

兼題と選者（各題2句）投句拝辞

「吉　報」　西尾　栞選

「　松　」　黒川　紫香選

「多　才」　久家代仕男選

「　宴　」　恒松　叮紅選

「一　つ」　渡辺　独歩選

「ギリギリ」　両川　洋々選

「勝　算」　奥谷　弘朗選

「　夢　」　八木　千代選

「譲　る」　但見石花菜選

「ハンドル」　土橋　螢選

会　費　三五〇〇円（句集・作品集等）

黒川紫香選

兵庫県　酒井靖子

糸切れて孤独を風に遊ばせる
トンネルの向うが見えぬから楽し
作り笑い人の心を見てしまう
晩学の灯にぎこちない答出る
甘く見た分だけ強い風当り

浜田市　中尾まゆみ

週末の返事を風に届けられ
翔びたてぬままの翼よ片想い
瞳の奥へ夢を宿して満ちたりる
さよならを呑み込んだ日の片えくぼ
花言葉つまむ指からこぼれ落ち

佐賀県　寺中三枝子

気ごころも分かりおだてに乗ってやろ
自画自賛空の青にはかなうまい
ひとり芝居の人形になった午後の妻
裏話聞けばそれぞれある悩み
コスモスロード縫うて逢いたいひとがいる

砂川市　大橋政良

鈍行は絵になる窓を持っている
出世した男にもらう花粉症
おとぎ話の流れてこない川になる
いいことのあった日の風丸く吹き
風鈴と思い出話でもしよう

尼崎市　児玉歌子

濡れている傘アリバイが崩れ出す
道連れが出来て座敷が丸くなる
漬物があれば事足る夏の膳
流暢な日本語を聞く港町
困ってるようには見えぬ耳飾り

名古屋市　藤井高子

今日もまたいのちありけり目ざめけり
無位無冠　首はまっすぐ立てておく
人の世の節に迷いのあとばかり

さぎ草のようなお女で汗がない
うわの空なにを食べたかさえ忘れ

富田林市　池森子

空想が好きで入道雲に乗る
寝ころんで夏を回遊する少年
夏を楽しむ昆虫たちの身の軽さ
夏風邪をひいても扇風機をまわす
熱帯夜蚊のささやきを聞いてやる

広島市　流奈美子

かたことの言葉まあるい詩になる
鶴を折る紙へ祈りの刻をもつ
だまされてあげる痛みが分かるから
恥ずかしき事のみ多してのひらよ
夢追いの鈴ころころと銀河ゆく

尼崎市　新井朋子

この海は広すぎるから風まかせ
エスケープ　風の話を聞きにいく
吐き出せぬ言葉が胸で暴れだす
試験前　親の寝顔がうらめしい
凡人のしあわせたっぷり夢をみる

摂津市　木下道子

背もたれのない椅子ですよご用心
母さんのお迎え傘がきっと来る
一日一善よその子を叱っとく
待たせとき念入りに焼くたこ焼屋
ステテコの父に感謝のバラ届く

和歌山市　森茜

わたくしの言葉で言うべきは告げる
ほとぼりがさめると肩が冷えてくる
まわり道して忘れもの置いてくる
大勢で来て下さると言う知らせ
輝いてみたいひそかに姫鏡

八尾市　高杉千歩

上方の女とつきあい大阪弁
星占い女は歳を探り合う
おねだりをカナで大きく一年生
持ち馴れて他人の荷物まで提げる
眠り薬ふたりで分ける熱帯夜

今治市　野村京子

つつましい暮しのぞいた昼の月
刻とめていたい二人のレモンティー
毒いちご熟れて一つの罪をうむ
シャネルの香に酔った男がよく喋る
叩いたら動く時計とくらす老い

島根県　加本義良

修羅超えた無冠の父の背の温み
縄のれん気が合う同じ出雲弁
女房の目が反対と言っている
野仏に昔の詩を聞きにゆく
騙されてやるのも老いの処世術

静岡市　沢田きん

迎え火へ祖先が乗って来る牛馬

悲しみに出合い女は強くなる
好きだから時には拗ねて見たくなる
父さんの汗の匂いが好きになる
耳掃除していい話待っている

熊本県　岩切康子

雨上りネオン優しい宿の窓
水芭蕉　葉のみの沢で確かめる
指定席　煙にむせる手の団扇
思いきり女でいたい時がある
捨て猫に犬が興味をみせつける

熊本県　大川幸子

何となく過ごす月日の早い事
魚偏の字を読みながらすしを待つ
ゆずられた席へ私もそんな歳
いつものところで蜘蛛が糸を張る
お味見ぐらいで味はわからない

熊本市　宇野昭代

Uターン決心させた祭り笛
受身ばかりの母で皆に頼られる
雑草の一つひとつにある風情
原石のままの一生かも知れぬ
迷ってる背中を少し押してやる

尼崎市　森安夢之助

手帖から犯罪の鍵こぼれ落ち
外人の浴衣が踊る炭坑節
残り火に私の魅力みがいてる
姑さんの愚痴を聞いてる妻楊子
似ていると言われて嬉し孫を抱く

尼崎市　的場十四郎

ボーナスがどんと入って妻平和
耳よりな話で弾む缶ビール
梅雨の朝　香典返しが早早と
キャンバスに習い始めの色を溶く
流れ星あれから女に逃げられる

尼崎市　野瀬昌子

意気地なしだから強がりばかり言う
夕焼小焼　遠い昔の夢を見る
舌先で上手に渡るセールスマン
血圧が降り始めて以後無言
うっかりと口すべらせて悔いている

岡山県　江口有一朗

腕くんでみても名案出てこない
童謡一つ歌って豊かさ取り戻す
運命線自分で少しずつ伸ばし
気に入らぬ言葉で一寸試される
何をしているかとふっと思う日も

久留米市　鶴久百万両

二十一世紀の展望　予言者のように
善に還るこころを迎え火に貰う
花博の帰りは湯豆腐で飲もう
主導権　妻に託して茶に生きる
ガラスの城へ男はきっと逢いにゆく

岡山県　福原悦子

手ぶらでは行けぬ負目を思案する
廃校の大銀杏はやさし過ぎ
音痴だが亡父のテープが生きている
どたん場で優しい風の私語を聞く
子の視野に立てば厳しい父の顔

藤井寺市　高田美代子

ひと夜だけ悪女になってやろうかな
少しずつ悪に染まって生きのびる
何不足なくても愚痴の種はある
好きだよと聞いたイヤリングが揺れる

尼崎市　新井泰子

いつからか会釈を交わし名は知らず
私を昔にかえす子守唄
雨あがりてるてるぼうずの眠い朝
もてる子が隣にいます夏休み

堺市　楊井二南

主役だけ残る舞台の名調子
教訓を入れる童話は直ぐに飽き
金婚をカラー写真で撮れる幸
頼られて雄々しい顔を強張らせ

岐阜市　渡辺杏村

秋風の浜で淋しく別れの日
いとおしいいのちをがんが食いつぶす
支柱立て大輪を待つ秋の朝
広告に菊人形が顔を出す

大阪市　上田柳影

新築の家でなかなか落着けず
夏の森ここに私の殻がある
点滴で持たすいのちに旅控え
性格の違い今更手も切れず

徳島市　宮武まつ女

キュッとなる帯が哀しい数珠を繰る
だんまりが得意小さくなった祖母
本当の狙いは奥にある素顔
幸せなポーズへちょっと脱いで見せ

堺市　桜沢あか里

荷崩れの十七文字をもてあまし
思い出の径にこぼれる白い萩
つぎこぼし多い人生五十年
倖せの凡凡をとく古時計

鳥取市　美田旋風

告げ口をしたら告げ口されていた
名刺には新人ですと書いてない
脱皮した蝶は生い立ち話さない
子の投げた球を空振りしてみせる

島根県　松本聖子

眠れぬ夜　窓から月が話しかけ
急く心どうにもならぬのも歳か
ドック入り結果聞くのがおそろしい
酒煙草気ままに飲んで丈夫です

羽曳野市　芦田絢子

対談をしてから先生好きになり
嬉しい話に来た墓に泣かされる
野暮な事言わぬと写真が笑ってる
駈け込める御近所がある有難さ

和歌山市　田中みね

ストレス解消それゆけ西瓜の叩き割り
難しいお方へ言葉選りすぐる
あの方でも頓馬なことをする安堵
鬱の種弾き飛ばして鳳仙花

東予市　小山悠泉

消しゴムで消したい悔いが多すぎる
冷蔵庫部活帰りを待つメロン
哀しい瞳　鎖が太い象の足
廃船のさびた鎖に聞く挽歌

八尾市　片上英一

テント張り四天王寺のたずね人
町内に空地がふえてきた恐怖
千鳥足　月の雫に濡れてくる
化粧品売り場を通り抜けて　夏

大阪市　森崎忠禄

隆吉や蝶子の顔で食うカレー
織田作や寛美の居らぬ虹のまち
宗右衛門町きつねうどんを食う狐
公園のもぎり見ている通天閣

兵庫県　森脇和子

花博を一度は覗く予定表
三人になるともつれる縄梯子
ライバルの奥の手読んで気を許す
手の届く距離で心配しています

尼崎市　山田保蔵

大地のはて天につながる地平線
つかみどり大仏さんの手をかして
イヤリングだいじな耳に穴をあけ
テレビ三ツみんな黄門見ています

尼崎市　木下義嗣

父の日に子供贈ったベレー帽
節約でやっと新居を建てました
丈夫です今夜も里に電話する
平和すぎ年金暮しの楽隠居

鳥取県　西浦小鹿

わらべ唄　父のねむりをゆりおこす
炎を抱いたおんなの胸にふれてみる
父の橋ゆすって風を呼びおこす
過ぎ去った過去を白紙にもどす罪

大阪狭山市　桜井荘次

影のない噂が渦を巻いている
拝む時だけ神妙になる両手
傘買うてからずっと乾燥注意報
斜めから見る目を嫌う反抗期

順風に乗って届いた玉の輿
巣立つ子の瞼の奥に光るもの
土に生き今なお光る鍬の先
だまし絵の中で傾く夫婦舟

岡山市　中嶋千恵子

せんせいの名刺　住所が書いてない
先頭を走り続けている疲れ
大げさな拍手　欲求不満だな
なまじっかメモをするからすぐ忘れ

南国市　窪田和広

何か気に入らぬらしいなふくれ面
千の目に迎えてもらうお嫁さん
横着が気候不順に輪をかける
しらぬ顔した日の事が悔まれる

岡山県　富坂志重

水槽の金魚は遊びを知っている
ふっふっふ　たかが男と女じゃない
趣味の欄コップ酒だと書きました
男優の誰かに似てる人面魚

弘前市　肥後和香子

棲みついた鬼も気弱になりました
年なのに夢も心も翔んでます
老夫婦遊び言葉がうまくなり
婆さんが年を忘れて叱られる

大阪市　亀井円女

許す気の父は黙って早寝する
そよ風がうたたね誘う昼下がり
浴衣がけ優しい風に誘われて
久々の友が疲れをおいていく

静岡市　増田扶美

自慢した話へ嫉妬の矢がささり
お節介親切とみる年のずれ
大資本入った噂の里の山
急病の異境で人の愛を知り

酒田市　永澤裕子

雨宿り雨を忘れて飲んでいる
跡を継ぐ決意をさせた父の影
そっけない返事へ胸の扉が閉る
磨いても継ぐ子のいない床柱

箕面市　中嶋民子

朝星夜星稼ぐ家庭の娘がぐれる
背信の影が不穏な動きする
陸橋をゆっくり降りて策を練る
馬鹿な奴だと九官鳥が名指しする

尼崎市　鈴木良征

まわり道した人生にある自信
会い別れ人生ドラマだと思う
山里は寺の鐘から暮れて行く
世の中を甘く見たツケ今貰う

姫路市　松本一郎

鳥取県　石尾かつ乃

生かされて世界の花に触れる幸
昭和史に触れて男の目が光る
夢だった椅子だが風が強すぎる
夏祭り駆け寄る下駄の軽い音

米子市　新正子

簡単に騙せる母が苦手です
母として祈り足りない海がある
もう無理は聞いてくれない父の墓
幸せで指輪抜けなくなりました

尼崎市　尾宮弘治

草笛を児等とおかめの顔で吹く
子の匂いいまだに抜けぬ洗濯機
千羽鶴飛べよと祈る白い部屋
飲み過ぎた過去を切り取る手術メス

尼崎市　住谷石舟

聞かぬことまで受付がよう喋り
赤い屋根だからわかると地図をくれ
見習いのレジで静かに待ってやり
拡声器　迷子のママが飛んでくる

枚方市　中山おさむ

ドア開ければホームドラマが待っている
後継ぎが少うし理屈多すぎる
妻不在　安請け合いをして帰る
ほとぼりを覚ますビールをついでやり

寝屋川市　宮崎菜月

炎暑にも寡黙をもって涼しくし
なつかしい道なつかしい寺へ出る
魂胆を一喝された稲光
天国も人材不足か友を呼ぶ

今治市　藤本のぶ夫

米櫃の底に野心を溜めている
生生流転またお会いしましたネ
平均の寿命を過ぎている徒食
有為転変　竹は地下から生き返る

熊本市　黒田緑

わが舟は虚構の海に漂うか
片カナでつなぐ言葉にうろたえる
錯覚と夢うつつとの斑色
利き手ではない方の手にたすけられ

今治市　渡邊伊津志

葬儀社の手際の良さの味気なさ
持ち合わす物指しで聞く良い話
三猿の教え守っている平和
退職をしたから分かる世の仕組み

尼崎市　吉永伊三郎

芽の出ないままに終点近くなる
秋近し血圧計が出す合図
妻の手の温みと歩く失語症
難色は才色兼備の高い鼻

点と線つなぎアリバイ崩される　和歌山市　山口三千子

代理には懐刀派遣する
目立つよに置いてる箱に近よらず
子育てが終って妻は強くなり　鳥取県　西原艶子

いざこざへ遠い漁火美しい
命がけですね青虫葉を荒らす
置き手紙それですべてが切れますか
生きているしるし涙が出て困る　鳥取県　大角正道

仏壇にいちばんうまい梨がある
旬という自然な味が膳にある
迷ったら違くの空を眺めよう
眺めのいい部屋で縁談決めました　熊本県　高野宵草

緑陰で憩えば毛虫ブラさがり
安心をして読書する雨が降り
ポロリポロリなんときれいな児の涙
正誤表違ってました正誤表　旭川市　朝倉大柏

天秤に夫を乗せて他人読み
消しゴムで消せる染みなら苦にならず
Uターン夢のかけらはまだ眉に
咳一つみんな真顔を取りもどし　枚方市　森本節子

花博はお預け手近で花菖蒲
百ヶ日無事法要もすみ雨上がる
大小のクレーン残照に影おとし
七夕にはこより作ってくれた人　堺市　山本半銭

クリスタルに氷ことりと居直れる
硬質の匂いをさして新車くる
病室の午後　付き添いも眠ってる　尼崎市　明壁敏之

根回しの下手な男が外される
老妻に言えないきずも抱いている
流れには乗れないままに平でいる　広島県　森川抜智

もう何も言うことないかと電話切る
肩のこらぬ話でだんだん肩がこる
万歩計バンドにつけたまま昼寝　富田林市　浦田トシヱ

眼を閉じてしばし叶わぬ夢を追う
ひばり節聞けば眼がしら熱くなる
眼が見える今朝もすべてに有難う　和歌山市　北山好笑

肌脱いで人魚のごとく髪洗う
先に来てキャンプ張る場所守ってる
風送る香水の人よそよそし

くるくると終日動く母達者　　島根県　高野律子

寝たきりの姑へ朝ごと花を替え
言い逃れやっぱり枕が落ちつかず　　橿原市　西本保夫

青い空見上げ埴輪は語らない
ハイミスがひとり気になる無人駅
妥協せぬ妻の意地にも一理ある　　富田林市　楠美子

パーティは目立つ友いて盛り上り
病む床でやさしい嘘にいやされる
中年の暇が動きをにぶくする　　出雲市　伊藤寿美

亡母に似た人に手を貸す汽車の旅
授乳する嫁の背中にある自信
湯の条が残る乳房の上を這う　　鳥取県　黒田くに子

人間に戻る森林浴の青
古手紙読めば聞える息づかい
夕凪の浜で少年鳥になる　　豊中市　三宅つえ子

明日の夢ワープロで打つ身障者
心配な話が好きで立ち止まる
あばら屋に蔦を這わせて化粧する　　出雲市　原章峰

体温差　蛇にさわったことがある

余白には妻と写経で埋めていく
風鈴の風は恋人かも知れぬ　　守口市　森川春子

渡り切ったあとで汗出る太鼓橋
姫鏡台　祖母も祭りの化粧する
同窓誌　友の訃報を読み返す　　加古川市　吐田純子

影になりひなたになった母の袖
出稼ぎの父が夢みる小さな手
畦道を小石蹴りけり童うた　　十和田市　阿部喜久江

一の矢をわざとはずして様子見る
双方にうるさい奴が居る示談
嫌な過去忘れたいから変身し　　河内長野市　大西文次

合格をして爪の垢飲まずすみ
大家族　外に子持ちの猫がいる
団体の中に他人でない他人　　尼崎市　中澤向西

反省があって平和の鐘鳴らす
ゆっくりと仏法を聞く右の耳
濁流に揉まれて雑魚が逞しい　　和歌山市　谷口信子

白髪になったら着ようピンク色
天の川わたしも逢いたい人がいる
つり皮に個々の思わく揺れている

唐津市　浜本治幸

やっと古希あれこれ計画立ててみる
一坪の菜園　老妻の夢がある
長雨に紫陽花だけが生き生きと

貝塚市　池田寿美子

解った顔をしないところが憎い貌
風呂敷がまた見なおされ平和な世
ひっそりと秋篠寺はそのままに

藤井寺市　菊地繁男

朝の風さわやかに着て初出勤
いい夢は宝石箱へ収めておく
一段を上がれば一段世が見える

島根県　福間博利

今朝もまたバイクが会釈してくれる
竹酔日の竹に繁られ持て余す
空梅雨を降られすぎても持てあまし

鳥取市　近藤秋星

知らぬ顔して熊蜂をやり過ごす
お隣の朝顔はもう咲いている
洗濯物しまわせといて雷は逃げ

尼崎市　佐野六浦

石ころを踏んだと知った足の裏
廃止線過去をのこして草茂る
本塁打　金属音を置いて飛ぶ

今治市　渡辺南奉

絵を抜けてから方向を見失う
本当を言うのに息を整える
保険屋を断わった日の重い箸

宝塚市　末次真

この頃は続きの見たい夢も見ず
なんとなく取られたような鬼の首
タバコ買い今日は何時に帰るやら

寝屋川市　河合時弘

兄弟の絆深める妻の匙
相談に行って無心を聞いてくる
残酷な街で両側への駐車

岡山県　牧野秀香

変る日々ついて行けない老いの足
自由でも裏道知らねば行きづまる
ぬぎすてる独居へ夏は天国で

岡山県　後安江山

金に運薄くて母は倖せで
手拭を深く被った母の影
顔見せに一寸寄ったと娘の笑顔

佐賀市　古川一徳

生きる汗尊いものと知る無職
窓際の無聊　弁当に励まされ
青春の汗が涼しい甲子園

出雲市　岸桂子

飯つぶで貼るくせのある封書来る
高価な土地に大根の種をまく
傘立ての中でもめてる他人傘

クラス会　恩師の墓に会ってから　鳥取県　西川和子

長電話でかい咳払いをくれる
それぞれに触れて可愛い知恵がつき　鳥取県　山本正光

盆踊り老いて踊ってまだ達者
町内会　無駄足多い役目柄
マイカーを磨けばいつも雨となる　鳴門市　八木芳水

金出せばほしい椅子まで売ってくる
世渡りを上手につまむ箸がほし
顔二つ持って女が波を蹴る　岡山県　後安ふさえ

みかん山縫うて遍路の鈴の音
同居する子へ感謝の老い二人
貧乏に耐えて子供の自立心　芦屋市　根来敬

あの人の謎の言葉に責められる
前向きに善処しますがそれっきり
しまいまでお聞きなさいというしごき　兵庫県　奥野テル

一人逝きまた一人逝く菜種梅雨
ライバルの好意が読めぬ日の焦り
お茶づけの味で落ち着く旅帰り　和歌山市　前田美子

名文句つけてやんわり断られ
知っていて母は味方に付いてくれ
水着着た姉妹のような嫁姑　藤井寺市　中島志洋

忙しい先生議会で舟を漕ぐ
忙しい癖に世話好き遊び好き
同じ手にまた騙されるお人好し　大阪市　小糸昭子

しば漬けの歯切れの良さと釣忍
まぶしさや髪と手足の長き娘ら
孫の掌の運命線を睨んでる　鳥取市　中居武士

鳥肌が立つほど嫌な奴が来た
梨箱の文字にあふれる母の顔
親と子が変なところで鉢合わせ　東大阪市　松山隆

サボテンの棘がこんなに痛むとは
仲間はずれの螢火を追ってみる
スケジュール　良薬だから直ぐこなれ　青森県　福士トキ

幸せな一日だったよく眠る
一日を無事故で終えたありがたさ
生きていることは働くことである　東京都　山口新子

母の歳とっくに過ぎて父想う
いるはずのない雑踏に目が移る
白い花の白に残り香追いかける

朝の灯明　今日の幸せ頂こう
薬草より雑草のたくましさ
朝露を踏んで畑と対話する

島根県　今川三津江

彼岸花　命のかぎり咲きつくす
幸せを掬う杓子よ深い目を
うわさでは白い鳥がいるそうな

鳥取県　鈴木芙美

無い袖を母は魔法のように振る
振り出しに戻る勇気を誉め給え
くたびれた背広の方が著名人

出雲市　森山健歩

あれこれと力の限り精を出す
稲妻が走りて夕餉箸おとす
ウインドー女鏡にして通り

鳥取県　木下芙葉

野良猫の誇りにピンと伸びた髭
個性尊重　梅干は皆赤くなる
隠れん坊　鬼は夕陽を眺めている

神戸市　岩田信義

冷房機故障へ西日容赦せず
霧晴れて心和ます月見草
西瓜畑　烏が先に審査する

鳥取市　西村黙光

招かざるアリが畳に上がって来

青森県　波　ただお

ポスターのいい方に旅行決めておく
悠久の滝で心を洗って来

静岡市　大石たき

若い保母知識おくれの子をあやし
義理の中言いたい事も言えなくて
後取りに渡す大事な鍵一つ

静岡市　永倉柳華

暇だから昼間も夜も寝て居ます
バスの旅気にせぬ老いの紙オムツ
無精卵抱き続けてる親鳥よ

和歌山県　三原浮木

愛犬が散歩催促して吠える
年金の暮し豊富に趣味は持ち
正直に自分の気持言えた朝

和歌山県　吉田武治

草刈機　花一輪が可憐すぎ
山百合の香りを賞めて客座る
縄のれん男本音の顔になる

岡山県　杉本伊久栄

子育てを果した母の太い指
行く先をたずねて見たいちぎれ雲
幸福に満ちた夕餉の夫婦箸

箕面市　岩津ようじ

仲良しを内緒にしてるポチと僕
見るだけと知らず店員もみ手する
おお　よしよし　今日も負けたかタイガース

暑さにも耐えて無言の蟻の列　鳥取県　山内芳江
シナリオのままを演じた木偶坊
カラフルな水着　金槌かも知れぬ　鳥取県　石谷美恵子
幸せはカラフルな絵に囲まれる
茶の沸かぬ臍で孤独に堪えている
つまずいた石がシナリオ変えさせる　静岡市　大村正雄
無理しても義理を果した心地よさ
裏表あって動きがとれてくる
神官のおっしゃる通りお辞儀する　大阪市　今西静子
久しぶり話題がつきぬ姉妹
明日のプラン目覚しのネジまいておく
貰うつもり紙バッグ二つ持ってゆく　米子市　小西五十鈴
雨上り秋はそこまで赤トンボ
植木屋も褒める五葉の松を持つ
夏祭り金魚すくいに汗をかき　鳥取市　武田帆雀
出目金がヒラヒラ苛めから追われ
暇人を捜して電話して出掛け
パチンコへうんと冷房代をやる　岡山県　土居ひでの
ペンフレンド心美人にして置こう
転んでも迎えてくれる郷里の風
雨蛙ケロケロ呼んでいるめまい　静岡市　三浦つね
気兼ねなく貧乏神と住んで居る
新物の値札は太い字で書かれ
孫たちに利用されつつ生きている　京都市　小林英子
色褪せて造花やすらぎ満ちてくる
まな板の鯉に似ている手術台
植木市まばらに夏の弘法さん　熊本市　北川一進
洗濯の乾きが早い暑い夏
枕元句帳眠れぬ熱帯夜
何遍も同じ事だけ喋る酒　和歌山市　堀畑靖子
用意することがあるのに来ぬ返事
体力に余裕あるうち引き返す
その他大勢の中で揉まれている息子　西宮市　菊池トミエ
目印のたばこ屋つぶしビルが建つ
目をとじて服むお薬を疑わず
朝顔の伸びゆく蔓に見るいのち　神戸市　木村貴代子
先生も偏食　給食たのしいな
未来から悲鳴聞こえる近代化
贈り合う無駄も楽しいおつき合い

代理とは名ばかり何でもやってます　泉佐野市　真崎　浪速子

展望は先が明るいレントゲン
ホームシックからくり時計が慰める　鳥取県　今本　早苗

ほたる舞う川の流れを聞いている
ふるさとでスイカ冷やして待っている
三分の正座でしびれ足くずれ　大阪市　尾崎　黄紅

自転車の軋み郵便さんがくる
近道の三つ四つはある水溜り
おなじこと二度騙された阿呆らしさ　八尾市　籾山　隆

ボーナスの軽さ知らずやちびた靴
地下鉄は当り外れの冷房車
郵便受け差出し人の順に開け　姫路市　谷　清柳

遊び球投げて真意を打診する
ふと妻が美人と思う傘の内
都市砂漠ポケットベルが今日も鳴る　姫路市　福本　好花

雨漏りも知らずにすごす蝸牛
気が合った足痛同士旅に出る
頑固者いるから丸い家の中　岡山県　大石　あすなろ

定位置に母が座っている安堵

大正ロマン亡母の文箱に詰めてある
友達のように名前を呼ぶ夫婦　富田林市　山原　昭水

母の日を息子はバーで聞いてくる
嫁ぐ娘に百科事典を持たす母
正座して商い習った道修町　相生市　中塚　礎石

けとばした石は黙って飛んでいき
小指だけ伸ばした爪は何の武器
お互いに悪友となる縄のれん　堺市　神原　文

一人旅　木曽懐に母想う
税関は洗いものまでかきまわし
何事もなかったように豆を煮る　鳥取県　乾　隆風

不覚にも女の傘を借りたまま
たそがれの呼吸を揚羽みせている
宿り木で羽根を休めているトンボ　大阪市　武田　昌三

健康法押しつけた人先に逝く
雑草の意地は花博の隅に咲く
七人の敵に手強い妻がいる　羽曳野市　徳山　みつこ

子離れの時がいよいよ梅雨晴間
一呼吸置いて受話器の返事待つ
セールスが憩う真昼の夏木立

駅長が花の世話する過疎の駅　広島市　名和喜一郎

注意する言葉を選ぶ隣の子

泣き上戸このあたりから要注意　吹田市　山本希久子

矢面に立って男の貌になり

子守り唄　母さんだけの節まわし

旅人に抱かれてコアラ無表情　堺市　井上たかし

嘘にしろ立派な話聞いておく

老眼鏡拭いてジョークが通じない

好転のきざし夕立ち心地よし　寝屋川市　豊福路子

ラーメンの味を見直す梅雨ごもり

母の日のゼリーがそごうから届き

自分のように声がでっかい美容師さん　静岡市　片平静代

善人にされてことわり切れぬ羽目

見晴らしはよいが車の行かぬ里

散歩から戻ると犬もうれしがり　田辺市　染道佳明

遺産分け父の手帳が見つからぬ

スイッチを忘れ御飯を買いに行く

飼い犬は暇でくさりをかんでみる　鳥取市　森山豊子

人生の手抜きが老いてから重い

逆境へ真夏の汗が目にしみる

訛りでも私の言葉ちゃんと持つ　寝屋川市　北岡波留吉

机の花とても淋しい定年日

てるてる坊主　地団太踏ます長い雨

赤紙で道草をした青春に泣く　河内長野市　柏本靖子

幼な子の天使のような瞳に出合い

深呼吸してライバルに逢いに行く

あげた腰座り直した話好き　岡山県　伏見すみれ

放牧の牛が寄りそう初夏の風

いい靴と替えて帰った千鳥足

いい案がまとまりそうな煙草の輪　豊中市　滝北博史

急行の停らぬ駅の暑さかな

本買うと言えば金出す父だった

門限を妻と娘が守らない　藤井寺市　楠昭子

威張らせておこう私の掌の中だ

均等法　息子に家事を教えねば　静岡市　小木久子

貝の口開けさせるのは温い愛

イヤリング一寸気取ってみたくなる　島根県　菅田かつ子

ちっぽけな葉っぱが好きな青蛙

立身をしてから嘘がうまくなり　松江市　原　長三

大の字になれば無限の空がある

仏だんに向いあってる余生かな　鳥取市　萩原美雪

年がいもなくアイドルにしびれてる

込み入った話へ窓を閉めに立つ　鳥取県　美浦美代子

親展と書くからみんな読みたがる

ルーズでも世話やく妻と馬が合う　鳥取県　中村幸代

あなたとの距離をはかっている言葉

碧い海見ながら愛をはぐくんだ　河内長野市　岡崎実

車座になると話題がはずんでき

孤独なり話題の中にとけこめず　兵庫県　西脇冨美

青春の落葉丁寧に拾うてる

花びらの裏で仮眠がしたくなる　大阪市　清水絹子

しまい風呂に洗濯もする貧乏性

ブランコにのって縁談きめかねる　鳥取市　岩原喬水

老夫婦子を呼ぶように犬を呼び

一本の虫歯　親子を寝かせない　川西市　田中喜俊

お中元おいしい水も売れてます

万歩計つけてはみたがやっと千　鳥取県　伊吹富恵

七回忌　亡母の梅干まだ壺に

野の花に命見つけた夏の朝　富田林市　大澤三四子

退社です赤ちょうちんが呼んでいる

気の所為かしきりと亡夫呼んでいる　豊中市　田中道胤

鬼が来る隠れて先にやり過ごす

六文の銭にあくせくしてる鬼　鳥取市　谷口侑里

マーケット外人さんが豆腐買う

新築の家を横目で見て通る　静岡市　中西雅

盆飾りほのかなあかり亡夫の顔

遠花火　団扇片手に闇で待つ　東大阪市　大平太一郎

顔見せぬ電波が先生肩のコリ

一円に出会わぬ日なし消費税　唐津市　山口ふさ子

得手勝手して憎めない人がいる

女なら愛想くらいは言ってみな　吹田市　西岡豊

入院を伏せておいてと娘の電話

お花にも風情があって顔がある

健気なる夏のバラにも努力賞　枚方市　山崎彩子

とある墓地　墓あっち向きこっち向き　八尾市　向井しづ子

夜のブザー鳴りっぱなしという公害

快速の瀬戸路にかすむ淡路島　静岡市　宇佐美寿美

風鈴としゃべりたくなり開け放つ

許す気の母は大きな傘をもつ　鳥取県　幸家單車

風向きが変ると味方減って来る

その約束は恋愛中のことだった　米子市　服部朗子

手際よく要点つかむ切れのよさ

義理固い表も裏も無いお方　米子市　中井ゆき

異国旅　川に出合ってホッとする

パンの耳やっぱり食べる世代です　茨木市　藤井正雄

ひとり旅　窓をかすめた流れ星

粗品など貰ってこいと代理出す　兵庫県　倉垣恵美

お気に入り一着だけを手洗いす

今日の日をすねてみたくて昼寝する　新潟県　高野不二

試着室　顔も写って見えたはず

ちょっぴりとほめた祝詞が身にしみる　大阪市　家村高雄

夫婦とも老けて茶の間の置物に

病室の時計の音が耳障り　寝屋川市　井上すみれ

同窓会　人も話も去年今年

迂回した恋が気を揉む大安日　鳥取県　上田俊路

八月の渇いた日から無神論

タラップを降りたが英語通じない　八尾市　橋本信江

身から出た錆と気づかず増える愚痴

喜びは次の喜び連れて来る　大阪市　清水利武

払わされ馴らされている消費税

夏風邪にスタミナ狂う熱帯夜　姫路市　福島姫女

ひょっとこのお面に野心ひそんでる

瀬音聞くこのやすらぎをいつまでも　宇部市　中村三良

腹立ちに厚く馬鈴薯むく夕餉

米びつの唄が陽気で妻達者　鳥取県　中西智恵子

甲子園泣いて笑って夏終る

夕映えがとてもきれいなテント村

静岡市　浅子まつゑ
厭なこと厭とはっきり言う勇気
毎日が掃除で終る老いの日々

和歌山県　森三枝子
誰よりも付合い上手なカスミ草
年頃が二人いるので頭痛薬

羽曳野市　麻野幽玄
冷房車　羽織れる物を持って乗り
一人ぽっちなのにはかどらない読書

熊本県　増田一乗
昇進の嬉しさ胸に里帰り
ねずみ取りゆっくり走れとサイン来る

広島市　中村要
七転び八起きも一度転びそう
一円の重さを知っている明治

藤井寺市　武部敦子
ふんぎりのつかぬ別れに雨季になる
運不運　宝くじには夢がある

静岡市　柳沢たま
粗食でも神の恵みかよく太り
孫叱り嫁に横目でにらまれる

唐津市　野崎ハル
テレビ前うなずきながら茶を喫す
淋しい日　橋の釣人話しかく

八尾市　橋本龍典
その昔地玉子という中元あり
米屋では四股名のような米そろえ

八戸市　島田昭治
献身のナースの心輝いて
踊りたい女もやっぱり踊れずに

藤井寺市　田中孝子
朝のジョギング帽子のリボンなびかせて
夏祭り藍の浴衣の匂い立つ

鳥取県　浜田民子
四面楚歌　女が一人身構える
カラフルな帽子が目立つ夏の浜

唐津市　山下剛司
棟上げに庭のいさごでしめくくり
もう少しゆっくり寝たい月曜日

大阪市　山北三三三
ブラブラと出てはブラブラ帰る齢
女とは夜と朝とで違う顔

寝屋川市　坂上高栄
バランスのよい食卓にある笑顔
泥の中　足が見付ける蓮根掘り

鳥取市　前田一枝
矢印を信じ行く先間違える
花博に花は見ないで人に酔い

唐津市　野田旭恒
アルバイト男結びに悩む妻

糟糠の妻でありよく喧嘩する　鳥取市　加藤二代

女手で子育て終えた足伸ばす
あなたへの愛だれよりも積ってる　鳥取県　中藤俊子

染め分けの和紙に包んだおしゃれ菓子
かくれんぼ母の背中も隠れ場所　泉南市　坂根流水

あるがまま生きて気楽な日々おくり
逆なでをしてもてごたえない顔で　島根県　渡部好栄

気が付くと孫に遊んで貰ってる
一人ですペットはそっと膝へくる　鳥取県　野口重富

返答に困り煙草で時かせぐ
夏山へ雲の上まで歩いたぞ　大阪市　川原章久

だんじりの稽古囃子を濡らす雨
朝シャンの香り振り撒く長い髪　唐津市　福島紀一

誰のため妻が折ってる千羽鶴
月見草　夢二は花に生きている　高知市　山崎一求

タクシーのメーター上がる下車地点
ひと月が早い家賃の支払い日　鳥取市　松本伊都子

賽銭を多目に神へ頼み込む
人生の風雨に耐えた傘を干す　広島県　岸田武

逝く母が稲の作柄知りたがる
痛快な啖呵を切った夢を見た　大阪市　乾哲静

大物も小物も株に味を占め
本当に好きな彼奴が先に逝き　広島市　森田文

反省も決意もできたジャンプ台
抜歯して頑固な顔がゆるんでる　唐津市　入江喜久亭

淋しさを酒に縋れば愚痴となり
老いの坂杖をたよりに独りぼち　泉佐野市　大工静子

蒔く種の一粒ずつに話しかけ
義理に負け八十に高価な化粧品　奈良市　井上大

雨止んだ所が傘の忘れ場所
ランドセルに慣れて宿題重くなり　鳥取県　橋谷静江

良い種をまいて後世に花さかす
おしゃれして今日のデートは遅刻かな

松江市　佐野木　み　え

雑草がまた延び私と根くらべ
あの頃は良かった母も子らも居て

今治市　和田　宏

図書館で軌道修正する受験
時間外手当でつなぐミルク代

米子市　小塩　智加恵

フルムーン歳は越したにまだ乗らぬ
張ってるよ対向車からくる合図

静岡市　大神　静枝

出番に弾む古風鈴夏やせし
定退に思いもよらぬ友が出来

岡山県　平田　たけよ

折にふれ大事なことをいい遺す
追憶の亡母よみがえる里の道

静岡市　青柳　金吾

拗ねてみて愛の深さをたしかめる
金持は価値観違う絵の値段

島根県　岩田　三和

ゆっくりと回っておりますそよ風に
千年は残そう石に愛きざむ

鳥取市　中澤　正恵

独り旅テレカでしゃばる人恋うて
玄関の靴は賑わう夫と居て

大阪市　平井　露芳

豪華船たっぷり円を取るつもり
花博の花が枯れてたのもニュース

大阪市　喜多　佐津乃

不自由を残したカルテ綴じて置く
余生縫う針箱　還暦に贈られる

池田市　岡本　吉太郎

人の道知らぬ政治に民しらけ
私利私欲国益の名にだまされる

唐津市　池田　遊女

夫捨て家捨て子捨て未練捨て
いつになく優しい夫胸さわぐ

八尾市　松本　芙美子

長男は今だに車が恋人で
約束の指切りねだった娘も二十

池田市　林　すて

耳検査　異状はないと医者は言う
愛想ない店では買わぬ事にする

羽曳野市　福田　悦子

船渡御天神祭りで終る夏
飲みなはれ酔えば本音で話せます

◆ジュニアの部

尼崎市　新井　晶子（中一）

山頂で風と雲との大合奏
休日もこわい部活が待ってます

平成2年度

路郎賞 川柳塔賞 候補作品中間発表

自 平成2年5月号
至 平成2年8月号

路郎賞候補作品

黒川紫香

ことごとに夫を貶す愛しよう　林　はつ絵
評判は藪だがながいお付き合い　佐藤　奏月
年金があって仕事に実が入らず　中西兼治郎
キラキラと島の瓦はよく光る　細川　稚代
例外な事を申してほめられる　奥山美智子
何かといえば法被着たがる唐津っ子　浜本　義美
酒やめた訳を恐くて尋ねない　本間満津子
画用紙にチューリップ咲く新学期　斉藤　劦
生きてきて勲章もよし男たり　門谷たず子
ミシリミシリと家の割れる音がする　政岡日枝子
赤ちゃんの笑いへ笑うほかは無い　信本　博子
苦労しに行く栄転と腹くくる　河井　庸佑
文珠さん授けた知恵はみな同じ　岸本豊平次
逆立をすると乳房が若くなる　松川　芳子
いい時季に逢いたい手紙書いている　吉岡きみえ

西田柳宏子

今日生きて今日吹く風の言葉聞く　嘉数兆代賀
火を抱いたままで崩れる曼珠沙華　林　荒介
今日を生きる今を大切に生きる　松本　元江
消えかかる火を消すまいとする絆　石垣　花子
鶴を折りだまし舟折り人を恋う　西山　幸
ああ夫婦おんなじ時に胃が痛む　奥田みつ子
生まじめな父の樹だけが風に揺れ　安本　晃授
だんだんと家具の一部になる夫婦　西出　楓楽
火消壺あしたは炎える夢をもち　片岡智恵子
時々は礫が飛んでくる電話　西山　幸
一人言上手になって丸く生き　松川　芳子
言い勝った空しさみかんむいている　奥山美智子
花をおく只それだけで春の部屋　原　さよ子
シャボン玉私の息が空を飛ぶ　菅井とも子
絵日記の雲はいつでも母と子で　平松かすみ

野村太茂津

顔を塗りつぶしピエロに成りすます　若宮　武雄
一遍は怒鳴って妻の言う通り　内海　幸生
仲間とは時に偽善であることも　淡路ゆり子
怖がっているとチャンスが寄り付かぬ　春城武庫坊
ひらがなのような男が多すぎる　吉岡　美房
針の山越えた人なら任せよう　片上　明水
罪少し残して生きる糧にする　牛尾　緑良
花咲けば咲いたで偲び散れば又　石垣　花子
しあわせを誇示する愚痴を聞いてあげ　西口いわゑ
見えた日を追う愚かさと知りながら　堀江　正朗

順調だから神様が信じられ　寺田　裕美
二の腕を女もまくることがある　佐藤　奏月
眼を閉じて貴女の海が見たくなる　松原　寿子
他生の縁とても大事にして生きる　堀端　三男
正面に強情っ張りの席を置く　小野　克枝

正本水客

残り少ない味方とおもう箸二本　西山　幸
春の気をいっぱい吸うて上る月　都倉　求芽
無人駅ほんとに列車来るのかな　小玉　満江
いい顔は別れの顔と気がつかず　石垣　花子
キャベツ真二つ種も仕掛けもありません　永田　俊子
女なら女の顔でいてほしい　松村迷観子
欺されて一人笑いをしています　嘉数兆代賀
生きていてやろうじゃないかと励まされ　谷　真風
仁王さんすこし雑談しませんか　小池しげお
ブランコが帰り一気に夕暮れる　松下たつみ
残して逝った薬を捨てられるでしょうか　栗谷　春子
言い訳もないので少し笑っとく　崎山　美子
お日さま笑うてはります酔うてます　宮西　弥生
雑踏の中で別れが言いやすし　西口いわゑ
夫婦になる前の手紙が笑わせる　小野　克枝

橘高薫風

雲に来てひばりはやっと巣を想う　栗谷　春子
自画像の手入れに余念ない傘寿　若宮　武雄
小説の女と恋に落ちてゆく　土橋　螢
新市長も酒屋の倅　酒どころ　藤解　静風
見えた日を点滅させるのは軍歌　堀江　正朗
猫も座し猫の破った障子貼る　辻川　慶子
コーヒーは冷えて一人は汽車に乗る　秋元　てる
魔女が杖振ったか春の野の緑　吉田あずき
町内会風呂敷ぐるみ引きつがれ　高橋千万子
逢うて別れてこの世は夢をみるところ　松本　文子
祈ることばかりで老母の背が曲る　嘉数兆代賀
ペンギンの歩く姿に似てきたぞ　小砂　白汀
妻逝けど陽は昇り　直原七面山
いのちふわふわ五七五になりませぬ　山内　静水
だんだんに家具の一部になる夫婦　西出　楓楽

川柳塔賞候補作品

板尾岳人

底冷えの街で情けが欲しくなる　小山　悠泉
周到な演技に面をつけ忘れ　流　奈美子
タマゴ割る指はたくらみなど知らぬ　寺中三枝子
花が咲き花が散っても来ぬ返事　内田　結実
愛という文字を正しく書けますか　西浦　小鹿
よく切れる刀は側に置いておく　山口三千子
うそ一つ二つは許す母のくし　宮武まつ女
短編のシナリオ続く夏帽子　野村　京子
反省のいろで埋める母の地図　児玉　歌子
ひとり言聴いて下さい置時計　中尾まゆみ
一言の詫びが言えずに波の音　高野　律子
待つことを知らぬ多感な夏帽子　高杉　千歩
裏口に話のわかる鬼がいる　桜沢あか里
どうしても聞き捨て出来ぬイヤリング　大川　幸子
マンネリの貨車一輌を曳いて父　大橋　政良

高杉鬼遊

念入りの化粧挑戦的になる　児玉　歌子
本当のほんとなんです癌じゃない　山本希久子
面会謝絶只今私昼寝中　田中　みね
向き合って座ればいかがお雛さま　木下　道子
痛そうな音ばかりする歯科の器具　中藤　俊子
マラソンをテレビで見ててくたびれる　新　正子
職安へ行くのに靴を揃えられ　窪田　和宏

浄土とはどの辺ですか会えますか　柳沢　たま
大阪で買物するとくたびれる　内田　結実
ブラジャーの売場で妻を見失う　武田　帆雀
お返しは妻がしてますホワイトデー　太田　藍子
年金を上げて下さい戎さん　小熊　江美
よく切れる刀は側に置いておく　山口三千子
冬の浜　影ひくものは何もなし　岸　桂子
消えるまで待てずローソク消して立ち　中居　武士

小出智子

花鳥風月寂しがってる暇はない　宇野　昭代
頂上に登れば消えてしまう虹　岩田　信義
あの世には地獄は無いときめており　福島　紀一
これで最後これで最後と老父の旅　中井　彗梢
神さまにときどき嘘をついてます　岸　桂子
塾などは無かったころの茜雲　森山　健歩
目印にされたポストは凜と立ち　藤井　正雄
安心をさせたい嘘が増えていく　宮本かりん
蘭の花咲かせて吾も老いしかな　上田　柳影
バンザイで出稼ぎ送ってはならぬ　野村　京子
同じ水飲んで個性を競いあい　新井　泰子
膝の猫暮しをじっと見つめてる　中島　民子
地平線夢を預けてばかりいる　児玉　歌子
丹念に繕う足袋の温かし　伏見すみれ
桐簞笥のしみはおんなの夢のあと　清水　絹子

谷垣史好

命日に気がついたのは花の下　内田　結実
休日は猫になろうと決めていた　新井　朋子
一日のまばたきをするカレンダー　大橋　政良
冬の浜　影ひくものは何もなし　岸　桂子
病室の窓固からず緩からず　楊井　二南
家出したポチのお皿に雨が降る　中村　幸代
おはようと言えばわだかまりが消える　渡辺　南奉
じいちゃんになってもばあちゃんまだこわい　三原　浮木
浄土とはどの辺ですか会えますか　柳沢　たま
梅雨晴れ間工事は五時に引き上げる　宇野　昭代
玉ねぎを干す弥次喜多の荷のように　木子　道子
風鈴が浴衣着ませんかと誘う　高田美代子
思い出し笑いをしてる小引出し　桜沢あか里
ワープロは変な漢字を知っている　高野　不二
仕舞風呂激しいものが消えてゆく　中嶋　民子

宮口笛生

舌の先こぼれた嘘が拾えない　岸　恵子
大皿に盛るとパーティーしたくなる　菅田かつ子
春の風にふつふつ命あふれくる　池　森子
淋しくてコーヒー甘くしてしまう　野村　京子
シグナルの青にうっかり気を許す　寺中三枝子
まなうらにかけ橋があり逢いにゆく　中尾まゆみ
馬鹿正直に歩んだ母がよく似合う　福原　悦子
神の声聞くといねむりしたくなる　流　奈美子
底冷えの街で情けが欲しくなる　小山　悠泉
騙されぬ熟れた女の返し針　酒井　靖子
おふくろの財布にいつも金がある　渡辺　杏村
金ですむ話が金でこじれ出す　大西　文次
奥の手があればとっくに出している　堀畑　靖子
消しゴムで消えるラッキーならいらぬ　住谷　石舟
握手した日を記念日にしておこう　戸田　絢子

—同人吟

秀句鑑賞

—前月号から

吐田公一

また嘘をついているなとのど仏

柳楽鶴丸

我々凡人は嘘とわかっていて、嘘をつくことは本当にむずかしい。自分が嘘をつく場合でも、のどもとにつかえた感じがするもの。嘘がのどにつかえないですらすら言えるようでは天才的な詐欺師。

時々は礫が飛んでくる電話

西山幸

居るかぎりジーンと鳴れば取らざるを得ないのが電話。相手が判らないだけに、出たとたんボロクソに言われると腹の立つことおびただしい。どなたも本社へ電話されるときは言葉づかいに気をつけて……。

片目のときはとても謙虚でいたダルマ

西出楓楽

通るまでは一票大事と謙虚に頭を下げていた人が、ダルマが両眼となったとたんふんぞり返る。まさにいやなタイプ。こんなのに限って実力がない。

何考えてきたのかトイレから笑顔

中川滋雀

トイレは孤独の場。沈思黙考よし、はたまた無念無想もよし。されどトイレから出て来た笑顔には、何か邪念らしきものを感じる。

豊年を誰も望まぬ田を植える

宮口笛生

コメ解禁の要求が厳しい国際情勢。折角植えた苗だから豊作を願うが、果して豊作貧乏になりはしないだろうか。田植までもが国際環境に影響されようとは。

切り札をもって白を黒にする

宮西弥生

切り札はその持ち主にしか判らないだけに恐い。そういう相手は必ずと言っていいほど最後まで沈黙を守るからいやだ。

年輪を重ねて夫婦似てしまう

牛尾緑良

若い時は何をしてもチグハグな二人だったが、齢がいつの間にか似た者夫婦にする

今日何日三度目妻を怒らせる

野呂右近

「おじいちゃん、しっかりして下さいよ」。呆けたわけではないが、毎日が日曜だと、曜日が判らなくなる。他人ごとではない話。

人生のここは素直に雨やどり

林はつ絵

この方の人柄が偲ばれるような句。〝雨やどり〟がいい。

絹こしの言葉をきいている疲れ

吉川寿美

何様でもないのに妙に気取られると、こっちは肩が凝ってくる。

惜しい人ほど早く死ぬわと言われたり

福元みのる

これは手厳しい。言った相手は奥さんだろう。新聞を見ながらのひとり言かも知れないが、聞いた方にはグサリとくるひと言。

冷蔵庫一日のメニュー妻の旅

北川竹萌

妻たる者一日家を明けるだけにも、一日の献立から用意して出かけなければならない。まさに女に休日はない。

許す気でいるのに遮断機おりたまま

川島諷云児

親子の間か、夫婦の間かは知らないが、一度コジれると互いの意思は通じ合わないものだ。いくら当方が許す気でいても、相手にも言い分があるかぎり、こちらの意思は無視されようというもの。

指五本握れば拳という強さ

大原葉香

占の凶を母には隠しとく

冨岡温子

絵日記のお日様いつも笑ってる

沢田千春

銀河系

河内天笑選

髭を剃りおとして銭を借りにゆく　鳥取県　江原　とみお
起爆剤抱いたおんなが傍にくる
花を見ながら計算をしておった　弘前市　波多野　五楽庵
東京の風は無口で人嫌い
軍手から田舎訛の標準語
マドンナと言うには少し太り過ぎ　米子市　政岡　日枝子
コップ磨いて謝る言葉考える
漬物石は女系の嘆き知っている
暑さ全開　父の背中も塩を吹く　和歌山市　堀畑　靖子
人を恋う闇ポキポキと骨が哭く
あなたへの慕情　真昼の飛行雲
欠点を誇示して開き直ろうか　西宮市　奥田　みつ子
咲き誇ることに慣れてるバラの馬鹿
ききょう咲く雄々しい女多すぎる

いつまでも未完の構図抱いたまま　名古屋市　藤井　高子
妻の手綱に軽く揺れてるループタイ
雑魚だとて川へ放てば川を読む
ラインダンスの靴は笑ってばかりいる　大阪市　小出　智子
血を沸かすほどのことなし五目ずし
石段はひとつふたつと登るべし
お祭りにちょっと隣の児を借りる　青森市　工藤　甲吉
宿無しが眠りに入るダンボール
日記帳　天気だけでも書いておく
サスペンス今日殺されたのは一人　堺市　桜沢　あか里
神さまの情けあふれるはずれくじ
せんぶりを陰干しにして梅雨を病む　和歌山市　桜井　千秀
いちゃもんをつけられそうでおどけとく
正直に言うて震えが止まらない　砂川市　大橋　政良
目玉焼きお前孤独な目をしてる
紙コップ何か言いたい眼と出合う　和歌山市　山田　高夫
漕ぐうちは倒れぬペダル踏んでます
お人好し風邪が流行るとすぐに引き　鳥取県　新家　完司
子供等よ虹にふりかえりもせずに
銀河鉄道のように漁火連なって　米子市　林　瑞枝

稜線に灯があり故郷口ずさむ
賑やかなお盆を見つめている埴輪　唐津市　久保　正敏
傷口を自分で舐めて風に向く
でたらめに生きても役者褒められる　鳥取県　土橋　はるお
ちっぽけな三文判に意地がある
パンの耳が夫婦ばなしを聞いている　和歌山市　田中　みね
自らが出した答えに賭けている
にこやかにそしてひそかに持つ野心　堺市　井上　たかし
不倫見た猫もそれから共犯者
人妻とつつく湯豆腐生臭し　堺市　高橋　千万子
記憶力弱し政治屋にむいている
先生が親が世間がなすり合い　豊中市　辻川　慶子
マドンナで賑わう星のビアガーデン
窓越しの雨あじさいは夢色に　和歌山市　内芝　登志代
阪神が負けるとおもろい寝言いう
小犬の死　我が家のリズム狂わせる　岡山県　富坂　志重
順調に行って神様つい忘れ
この人が出ると話がもつれます　貝塚市　行天　千代
クーラーの部屋でテレビと暮してる
手の届くところに薬皆揃い

和歌山市　青枝　鉄治

税金をたっぷり飲んだかくし芸
目立たない隅の意見が的を射る

米子市　小西　雄々

高齢化の歪の中に来た不安
尾骶骨　力の限界知りつくす

京都市　山本　規不風

ともだちと競馬に勝った祝する
月一度行方不明になるわたし

宝塚市　丸山　よし津

雑草の花は媚びない淡い彩
情報があふれ真相ぼけてくる

出雲市　森山　健歩

思いあがりの凧には降りる場所がない
アイシャドー布団たたんだ事がない

西宮市　西口　いわゑ

未来まで大きく見える大ジョッキ
隣の花あかず眺めている二階

堺市　神原　文

後ろから撮られた姿他人めく
肥えたねと言われた時はこたえます

今治市　矢野　佳雲

カタツムリ空の広さを角で撫で
叩いたら叩き返して仲がよい

黒石市　相馬　一花

禿頭深いお辞儀は苦手です
換気扇　今日のおかずをみな喋り

岡山県　伏見　すみれ

粉骨砕心漸く建てたマイホーム
平和だな平安絵巻の御二方

佐賀県　寺中　三枝子

ひんやりと素足に秋が触れてくる
いつにない早寝嬉しい旅カバン

西条市　片上　明水

献立で始まる妻の日記帳
お隣の癖のみ込んで仲が良し

姫路市　丁坪　サワ子

愛されていると思てるお人好し
平均寿命越えて目出度にされる通夜

和歌山市　木本　朱夏

あまい微熱つづく恋愛中毒症
今ごろになって好きだと言われても

和歌山市　福本　英子

悪人になる閃きも湧いてこぬ
医者の言う通り守って旬逃す

唐津市　浜本　ちよ

螢観に行ってウインク攻めに合い
たんぽぽの綿毛誘いの風を待つ

兵庫県　遠山　可住

背を向けた山が男の胸に住む
新緑へすっこんどれぬにぎりめし

豊中市　田中　正坊

敬老の日に役所から召集令
良心も野心も少し持っている

岸和田市　島崎　冨志子

年金をもらう時だけ老となる
老人と国が勝手にきめてくる

鳥取県　土橋　螢

わたくしの写真はいつもぼけている

和歌山市　山川　克子

おもしろいお方ねポンと躱される

米子市　茂理　高代

以心伝心逢いたい人がやってくる

米子市　八木　千代

もう少し泣いたら微笑仏になる

今治市　藤本　のぶ夫

仮面はげてからのあなたが好きになり

岡山県　千原　理瑛

太ってもわたしはダイエットをしない

今治市　月原　宵明

梅雨しとど笑いが少し欲しくなる

尾崎市　春城　年代

人それぞれにそれぞれの刻があり

倉敷市　田辺　灸六

さん付けで呼ばない友が来てくれる

鳥取県　西原　艶子

指切りをしたらぐっすりねむれます

鳥取県　美田　旋風

両方をなだめる嘘をひねり出す

和歌山市　田中　輝子

風に誘われ素直になっていく時間

仙台市　川村　映輝

農民の言い分何時も湿っぽい

米子市　沢田　千春

鼻先をかすめ飛んだは車だな

鳥取県　林　露杖

相槌を打って手の内探る腹

和歌山市　後藤正子
たじろいだ弱気を笑う掌を洗う

兵庫県　酒井靖子
この好意いつかはきっと返したい

茨木市　堀良江
悪女にはなれずやっぱり逃げました

鳴門市　八木芳水
吊り皮で揺られ思想もくたびれる

奈良市　井上大
夏服を出して落ち込む腰まわり

宇部市　中村三良
溜息を何度ついてもゼロはゼロ

羽曳野市　吉川寿美
働き盛り坂がだんだんきつうなる

姫路市　福本好花
親切のひと言過ぎて嫌がられ

橋本市　岸本木魚
ふるさとは帰るたんびに変る地図

高知市　北川竹萌
錆ついた喉をこすって祖父怒鳴る

羽曳野市　芦田絢子
消去法わたし一人の旅になる

大阪市　板東倫子
ボス猿はブラックユーモアしか言わぬ

出雲市　小玉満江
目の上の瘤消えてからよく喋り

鳥取県　西浦小鹿
夢をたべているわたしを起こさねば

河内長野市　植村喜代
角とれてみんな優しいとしになる

今治市　越智一水
海峡は歌の通りに霧が降る

大阪市　山北三三三
離婚してもとの他人になりました

大阪市　桝本露児
片思い頭蓋骨まで赫くなる

松原市　小池しげお
めおと枕ひとりの男より知らず

和歌山市　森茜
お見舞に行って初物もろて来る

倉吉市　奥谷弘朗
招かれて座りごこちの悪い席

島根県　栂みどり
様々な梅つけておく母の城

岡山県　土居ひでの
ぶらり来てホットな話置いて去に

和歌山市　西山幸
ウクレレに藍より青い海がある

尼崎市　春城武庫坊
男攻める武器に香水赤い爪

姫路市　中塚遊峰
後継ぎが無いまま老いて明日の米

豊中市　安藤寿美子
転んだらただではすまぬ年である

田辺市　染道佳明
肩書がとれゲートボールに誘われる

和歌山市　山口三千子
こそこそとするから人はこっち向く

静岡市　渥美弧秀
蟬しぐれも孫のピアノもいそがしい

和歌山市　松原寿子
かろやかな噂を抱いて風が抜け

和歌山市　堀端三男
人間のエゴもいつかは裁かれる

和歌山県　三原浮木
平凡なことを続けるむつかしさ

唐津市　山口高明
夢を買う列に並んで日射病

唐津市　福島紀一
姿よき鮎をわざわざ曲げて焼き

七尾市　松高秀峰
折れて出るコツも上手になった嫁

和歌山県　寺田裕美
笹舟にひとりのまつり過去流す

鳥取県　田村紀美子
美しい話拾いに寺参り

和歌山市　古久保和子
哀しい日いつも口つく歌がある

鳥取県　上田俊路
趣味聞けばみなカタカナに凝っている

寝屋川市　宮崎菜月
温暖化ひと汗ごとに病む地球

広島市　中村要
もう少しゆっくり回れ地球星

兵庫県　倉垣恵美
平和すぎる国に溺れていいだろか

箕面市　椎江清芳

消費税要らぬ空気と陽の温み　松江市　谷　真風

父権地に落ちて雷大暴れ　今治市　渡　辺　南　奉

戦場へのハードルに先ず満員車　八尾市　片　上　英　一

譲られた航空券のサスペンス　岡山県　矢　内　寿恵子

梅雨晴れ間無駄な話はしておれぬ　大阪市　町　田　達　子

花博でお国恋しくなった花　熊本市　有　働　芳　仙

宇宙服脱いで地球のうまい風　岡山県　小　林　妻　子

親も子も野球ばっかり見てる夏　広島県　田　村　新　造

見学で出来たてを飲む生ビール　岸和田市　古　野　ひ　で

過去みんな風化しました旅に発つ　八尾市　叛　山　隆

秋篠でナマズ饅頭売り出すか　広島県　森　川　抜　智

生きとれば何とか税金払わされ　大阪市　松　尾　柳右子

夏の夜をファンタジックに花博で　今治市　渡　邊　伊津志

カラクリの中で組織が息をする　十和田市　阿　部　進

充電をのんびりしてる粗大ゴミ　東大阪市　大　平　太一郎

一円に馴れて忘れぬ消費税　唐津市　浜　本　義　美

消費税　小銭ばかりがよく貯まる　海南市　三　宅　保　州

植木まで高さ競っている社宅　唐津市　浜　本　治　幸

未来図は平均寿命を越えている　静岡市　大　神　静　枝

定退の気儘な靴が風を切り　広島市　名　和　喜一郎

嘱託でよろしければという情け　藤井寺市　武　部　敦　子

グルメ好き露天風呂好きオバタリアン　米子市　石　垣　花　子

気安めに撫でられている石仏　宝塚市　末　次　真

老い二人　一冬越したガラス拭く　岡山県　江　口　有一朗

嘘のような静けさ窓をあけてみる　静岡市　青　柳　金　吾

当り前この幸せに気付く歳　岡山県　岩　道　博　友

健康茶　素直に嘘も飲んでみる　大阪市　中　西　兼治郎

貧乏に慣れて貧乏苦にならぬ　吹田市　栗　谷　春　子

雨宿りの人には吠えぬ躾よさ　藤井寺市　中　島　志　洋

ＬＬにさよならしたいダイエット　寝屋川市　平　松　かすみ

町内にひとりやふたり泡立屋　大阪府　深　日　白光子

敵を作らぬ男であまり役立たず　米子市　小　村　てい子

ストレスの解消友と無駄ばなし　岸和田市　芳　地　狸　村

パチンコを覚えた主婦の昼下り　鳥取県　さえき　や　え

出向止めたまんじゅう売って子らと居る　有田市　松　井　かなめ

法話聞く間も目先の事が気にかかる　大阪市　亀　井　円　女

嘘の無い愛犬の目に救われる　大阪市　塩　田　新一郎

この野郎と思えど歯医者有難し　河内長野市　岡　崎　実

わがままですねてる妻の愛くるし　岸和田市　清　野　こ　う

嬉しいねお久しぶりねお月様　和歌山市　坂　部　紀久子

来ればうるさし来ないと淋しああ孫よ　大阪市　今　西　静　子

平凡な気さくな女医で親しまれ　京都市　松　川　杜　的

一句作れと鉄線の紫が

投句は、川柳塔用箋に3句を連記し、毎月15日までに川柳塔社事務所へお送り下さい。

女性コーナー

黄香の世

八木千代選

とぎれずに手紙を書いて生きのびる

大阪市　田中　弘子

私もやっとこの歳になってから、まわりの景色も見えはじめて、つぎには自分の内側も覗けて、それにつれて毎日の営みも深い感懐のなかですすめられるようになりましたが、この作者は早くもこの心境なのかと頼もしく思います。とぎれずに書くということの大切さをしっかりと抑えた調子で述べられていて、張りつめた心を柔らかい言葉で包んであります。つまるところは自分がどう納得するかということで、まるごと生きる気持になれるというものでしょう。

花火天に嫌な話を聞いている

西宮市　西口いわ子

そのまま素直に取ると「天には大花火が…それなのに俗っぽい嫌な話を私は聞かされている」とおもうのですが、私の癖で深読みしたくなります。天にだって神にだって、折々の事情はありましょう。人間は弱くて我儘で、わたくしごとの些事でさえ、天に投げかけて答えをねだるのがふつうです。ところが、この花火は天のやりきれぬ悩みを逆に聞いてあげている、そのために天に上がったのだとしたらどうでしょう。作者の日頃の明るさ優しさからしても、私は後の方が真意ではないかとおもうのです。

引くとあるドアならちょっと押してみる　大阪市　西出　楓楽

遠景に少うし水をのみ残す　米子市　白根　ふみ

置き去りの昨日がまといつくてのひら　和歌山市　後藤　正子

荷揚げされた雑魚に覚えの顔がある　西宮市　門谷たず子

水音のきこえる部屋で目覚めたい　米子市　寺沢みどり

雨の日のポストは頼りがいがある　松原市　佐藤　奏月

百葉箱は静かに狂うものを抱く　米子市　林　瑞枝

姉に似ることを拒んでいる化粧　西宮市　奥田みつ子

タブーでもないのに父を語らない　和歌山市　森　茜

別れことば　また字余りになりたがる　島根県　松本　文子

遅れようとするホスピスの時計です　富山市　舟渡　杏花

行進曲ひとつの山を越えてから　堺市　板野　美子

稜線を越えて一度も文は来ぬ　米子市　石垣　花子

落ちこぼれのわたし集めている旅路　富田林市　池　森子

プライドがあろう　てるてる坊主にも　和歌山市　西山　幸

単純な道で迷子になる特技　尼崎市　新井　朋子

父母が心に植えた鐘がある　米子市　新　正子

もやしの根をとっている大切な時間　和歌山市　田中　輝子

未来図の大半を占めだしたもの　和歌山市　堀畑　靖子

ちっぽけなわたしを刺して蚊は生きる　八尾市　宮西　弥生

手術台　素のわたしが置かれている　和歌山市　木本　朱夏

少々の汚れは持っている白紙　米子市　政岡日枝子

真ん中の椅子で蹴られてばかりいる　佐賀県　寺中三枝子

かたくなに隅の席とる自意識過剰　尼崎市　春城　年代

溢れても鬱まで流すお湯がない　姫路市　中塚　遊峰

坪庭の四季がわたしを裏切らぬ　羽曳野市　吉川　寿美

生き恥は晒し慣れてるからつよい　和歌山市　桜井　千秀

生まれた姿を保てぬ雲よ流れてゆく　米子市　川上より子

ちょっとキザなお世辞をピーコックから貰う　名古屋市　藤井　高子

ワサビ程度の鬼を演じてみようかな　和歌山市　松原　寿子

袋の画信じて芥子の種を蒔く　堺市　神原　文
花の語が解けないままに花枯らす　姫路市　丁坪サワ子
親思いの夫を淋しく見てしまう　大阪市　島村美津子
風の盆までに一枚浴衣縫う　和歌山市　福本　英子
紫水晶ことばが少し多すぎて　出雲市　石倉芙佐子
朝日より夕陽が好きな私の湖　松江市　竹内すみこ
明日からの私が不安この出合い　茨木市　堀　良江
私に仕えることのむずかしさ　米子市　野坂　なみ
自己嫌悪の犬でやたらに吠えたがる　藤井寺市　高田美代子
出る杭は打たれるものと限らない　和歌山市　山川　克子
てのひらを北風容赦なく抜ける　岡山県　千原　理瑛
ブランコをこいで仲人役おりる　寝屋川市　平松かすみ
待つ程にやってきたのは老いた犬　米子市　青戸　田鶴
長月に女同士の幸福論　八尾市　高杉　千歩
合格点もろうて手抜きできません　和泉市　中川　楓
サタン来る深夜の眠り妨げに　竹原市　信本　博子
輝きがすこうし残る朝の月　岡山県　松本　元江
穏やかな会話が弾む帯の丈　米子市　小村てい子
日めくりをはいでは母が掌を合わす　鳥取県　さえきやえ
ツッパッたつもりはないが雨に合う　京都市　本荘　福子
傘のまま思案まとまるまで歩く　鳥取市　松本伊都子
勿忘草に小さな恩を先ず返す　米子市　木村富美子
私の口を閉ざした紅いゆり　青森県　福士　トキ
気がつけばまた二の足を踏んでいる　大阪市　堀　いくの
デメリットばかり探して翔ばぬ女　大阪市　坂東　倫子

夫のキャッシュのカード番号知っている　有田市　松井かなめ
思い出をたくさん食べて終わる旅　大阪市　津守　柳伸
短冊に心の叫び書いてみる　米子市　茂理　高代
咄嗟には出来ぬ返事を迫られる　寝屋川市　岸野あやめ
だれて来たとさか洗って雷雨去り　八尾市　向井しづ子
倉を出る古い掟と皿小鉢　岡山県　矢内寿恵子
この風の香になつかしい想い抱く　寝屋川市　宮崎　菜月
まな板の不調和音は何かある　寝屋川市　井上すみれ
なれすぎた平和をだれかねらってる　岡山県　富坂　志重
あめ玉をすぐ噛む人と気が合うて　吹田市　栗谷　春子
さよならを言ってしまった流れ星　鳥取市　小谷美っ千
身のうちの不思議な音に目を開く　米子市　沢田　千春
ラベンダーの匂い袋が梅雨を消す　貝塚市　池田寿美子
眠れずに羊と長い話する　米子市　足立由美子
道くさをしながら歩き暮れかかる　大阪市　本間満津子
お隣と話す眼鏡は曇らせる　米子市　小塩智加恵
綾取りの糸がもつれる血の濃いさ　岡山県　土居ひでの
陰陽で片づけられぬ稲光り　守口市　結城　君子
無条件　汲めば出てくる親の井戸　米子市　服部　朗子
神さまにいけずされてる寂しい日　豊中市　辻川　慶子
茴香の花の香りに背伸びする　出雲市　園山多賀子
だんだんとドライフラワーに近づく　鳥取県　西原　艶子
一匹の金魚と無事に夏を超す　和歌山市　細川　稚代
白い皿引き立て役に甘んじる　大阪市　神夏磯典子

投句先　〒683　米子市花園町14―8　八木千代

曲

丁坪サワ子選

婉曲に言うても急所はずさない　忠三
曲り角まで見送ると老母聞かず　好花
年頃を曲ることなく伸びて欲し　姫女
信念を曲げると悔いが深くなる　清柳
作曲の糸へ師匠のタンゴ調　遊峰
五線紙の曲には乗らぬ父の歌　よし津
遠回りしても曲げない意志を持つ　典子
心うつ曲は優しい母の鈴　みどり
ラブコール曲は激しい蟬しぐれ　元江
静もりを更に静めるレクイエム　美智子
愛燦々と歌えば胸が痛くなる　理瑛
セクハラに曲線美とは罪ですね　彩子
葬送の曲へ濃淡の血の乱舞　玉恵
ナツメロの曲と生きてる人生で　笑風
生き通し生きる火の曲水の曲　寿恵子
曲折の四代に耐えた丸い背な　宵明
君が代を聞けばキオツケする明治　高明
曲線が嫌いな父のちびた靴　鉄治
先見ても振り返っても曲り道　良江
大胆な曲線見せて白い浜　博子
教育熱　曲学阿世の子が育つ　倫子
親譲り田畑を曲げて大家さん　朴竜
道しるべ曲って好運からはずれ　和子
曲折も楽しかったと言える歳　みつ子
曲ったへそをもとにもどしてくれる妻　度
曲玉に見入る太古を夢想して　高子
紆余曲折あって夫婦の共白髪　寿美
曲りなりに歩いて楢山口に着き　枯梢
婉曲にさぐりを入れる初対面　高夫
墨入れに使いならした曲尺　狸村
宴会に謡曲が出て座がしらけ　佳雲
農政の不信に胡瓜まで曲がる　はるお
曲りくねった路地に名代の京料理　規不風
宿命と思う私の曲り道　妻子
プレーバック蛍の光窓の雪　蛍
背を少し曲げればやさしい風に逢う　たつみ
名曲が流れるような川に逢う　シマ子
佳
曲者は曲者だけが知っている　蕗児
故郷はくねくね曲る峠越す　愛論
臍曲げる子へきびしい愛の鞭　柳五郎
西海のもくずと消えた琵琶の曲　どんたく
曲線美妻妻なりに自負を持つ　雄々
人
み仏に縋りつきたい曲り角　諷云児
地
信念は曲げない父のモンブラン　正坊
天
直伝の秘曲へ咽ぶ鶴の声　杜的
軸
名曲はいらぬ母子の子守唄

防ぐ

桝本蕗児選

侵入を防ぐ大きな爪を研ぐ　典子
竹槍で敵機防いだことがある　美代子
防ぐ手がない善意の押売り　つえ子
無防備の背中は信じきってます　重人
予算分だけは守れる防衛庁　史風
災害を防ぐ予算を人が喰い　哲静
とりあえず金で防いだ世間体　喜一郎
仮想敵うすれてもまだ防衛費　柳五郎
灯が消える過疎化を防ぐつむじ風　雄々
みどり児を抱き祈った防空壕　遊峰
雪防ぐ知恵に追われる北に住み　明水
防犯のカメラ冷たい眼でにらむ　白峰
ぬれぎぬを防ぐ庖丁研いでいる　しげお
防人の唄を知ってる岬の灯　清芳
正面を防ぐとうしろから斬られ　笑風
防犯ベルをこれ見よがしにつけて置く　敬
防衛論酒の肴に世は平和　義美
サングラスかけても防げない噂　保州
防風林のような夫に頼り切る　寿美
シャネル5で心がわりが防げるか　文子
防虫剤に負けぬ新種の虫が出来　芳仙
内堀を残して寡婦の城守る　寿恵子

夏ばてを防ぐ料理を習ってる　狸　村
恋人ができたと予防線をはる　螢
防ぐから余計覗いてみたくなる　三千子
男名前の表札で防ぐ風　規不風
防波堤の役も勤める父の胸　有一郎
玄関に男靴置く寡婦の城　杏　村
酸性雨　蛇の目の傘で防げない　多賀子
核戦争防ぐ祈りの原爆忌　倫　子
防人の土塁へ並ぶ太公望　高　明
攻防のめまぐるしさのサミットよ　あやめ
父が書く童話が防ぐすきま風　四　郎
雷を防ぐに探す古い蚊帳　一　花
夫婦げんかボケの予防にやってます　彩　子
かたくなになってる女の高い塀　雀踊子
防護帽欲しかろ辻の地蔵様　杜　的

佳

防空壕おびえた夜を語り継ぐ　裕　美
悪友を防ぐ箒が立ててある　妻　子
手の早い男に一線引いておく　諷云児
トラブルを防ぐ労使のから回り　愛　論
防災の備えはよいかにぎりめし　正　坊

人

野良犬は生れた時から防ぐ癖　サワ子

地

ぼけ防止ぼけ防止とて使われる　あずき

天

痴漢ベルあなたは不要ねとも言えず　正　敏

軸

防人の詩が土塁にしみている　よし津

世　界

工藤甲吉選

飢餓があり飽食もある世界地図　義　美
軽々に世界は一つと言うけれど　次　男
世界中であんただけやと言うたのに　忠　雄
汚染など考えられぬ銀世界　典　子
世界地図赤がピンクに染まりかけ　芳　仙
織姫は別の世界に住んでいる　狸　村
どの世界にもボスがいる金が要る　規不風
世界の海だから椰子の実流れつき　達　子
パロディーの世界に似合うのは政治　蕗　児
化野に万灯ともる別世界　道　胤
名月が虫の世界をセットする　宵　明

度

薪能タイムマシンに乗る世界　木　魚
世界から金の日本とおだてられ　弘　朗
世界から共産党が消えかかり　玉　恵
自己満足の世界で溺れて流されて　喜一郎
ままごとの世界新婚しています　どんたく
世界でも金持ち国ってこれかいな　重　人
世界地図ビックリ箱が多過ぎる　忠　三
人形の世界に国境などはない　三　和
財界さん世界環境どうなさる　たかし
単身赴任そんないじめもある世界　みつ子
老いてなお未知の世界に憧れる　遊　女
少年は世界へ続く窓を持つ　正　坊
我が亭主うんとおまけで世界一　玩具箱
異次元の世界にしばし美術展　テル
子供には子供の世界　兼治郎
芸一途世界を股に生きている　高　子
幻想の世界で君と蝶になる　白光子
黙々と蟻の世界の睦まじさ　ただし
綻びも所々にある世界　喬　水
恍惚の世界金などいりません　笑　風
虹色は私ひとりの世界です　ふさ子
寝ていても耳は世界を駆け巡る　敦　子
極楽の世界の花にあこがれる　恵　美
均等法男の世界狭くなる　妻　子
空想の世界で少女になっていた　杜　的

佳

世界地図何処をついても血が出そう
地下足袋で歩く世界が性に合う　裕　美
スーパーも飲み屋も無いよ月世界　一　花
子には子の世界があって鍵をかけ　大　柏
マジシャンの世界で暮らす白い鳩　清　芳
切り札を出すとき世界われひとり　のぶ夫

人

現実の世界へ戻る銭の音　清　柳

地

核のない世界を鳩と待っている　しげお

天

仏さんの世界に四畳半もらう　喜与志

軸

世界地図で見る日本は唐辛子

初歩教室

題 ― 緊張

辻 白渓子

今月の題「緊張」は、着想が広くて楽しく拝見しましたが、中には緊張をすると小用を催すと言った下品な句が見受けられたのは残念でした。色紙や短冊に書けないような句は、作句を見合す方がよいと思います。

スタートの緊張トイレが近くなる　小鹿
スタートに立つとオシッコしたくなる　隆
（緊張をするとトイレが近くなる）
緊張をせぬまじないを聞いてくる　静子
緊張感ほぐすまじないないかいな　高雄
（緊張をしないまじない聞きたがる）
緊張の顔が並んだ入学式　悦子
（子も親も緊張入学式の顔）
ライバルも緊張解けて縄のれん　静江
（ライバルがいて緊張の縄のれん）
緊張しお茶こぼしたる慌てん坊　ふさ子
（緊張の手元狂うた茶をこぼし）
かずら橋一歩先だけ見て渡る　彩子
（怖かった緊張かずら橋渡る）
泳げないけれども海がとても好き　隆雄
（泳げない緊張離さぬ浮袋）
温い湯へ緊張感が溶けて出る　和子
（緊張をほぐしてくれる熱いお湯）
緊張は初診待つまに鼻毛抜き　春風
（初診待つ緊張鼻毛気にしてる）
胃カメラの緊張解けてありがとう　武治
（胃カメラの結果が緊張解いてくれ）
緊張がなければたのしジャンボ機よ　しづ子
（ジャンボ機を降りて緊張やっと解け）
緊張をほぐす手だてに風に会う　一枝
（緊張をほぐす波止場の風に佇つ）
のど自慢緊張のうち鐘一つ　呼風
（のど自慢緊張をさせ鐘一つ）
レントゲン胃袋だけがしんどそう　露芳
（胃袋が緊張してるレントゲン）
緊張でねっとり濡れたまま握手　友子
（握手する手に緊張の汗たまる）
お見合の緊張味がわからない　侑里
（緊張がほぐれ見合いの親喋る）
二次会で緊張ほぐす平社員　はる子
（二次会へ緊張ほぐれた顔で行く）
パトカーが点滅してるバックミラー　忠禄
（パトカーに追いかけられたバックミラー）
緊張にお守りにぎる甲子園　洋
（お守りを肌に緊張した代打）
緊張で張り弓の如新入生　高栄
（張りつめた緊張新入生並ぶ）
初対面緊張ほぐすお茶の味　一乗
（緊張をほぐしてくれたお茶の味）
緊張の掌の汗歯科の治療室　ようじ
（治療待つ歯科緊張の汗を拭く）
定年のその日は緊張した主役　保夫
（定年を迎え緊張した主役）
緊張の糸もぷっつりホームラン　清柳
（ホーマーが出て緊張の糸が切れ）
肩書きと握手のばす手ふるえつつ　芳水
（緊張をして肩書と手をにぎる）
そばに居てもらえば緊張ほぐれます　志重
（緊張のほぐれる人が側にいる）
口下手が緊張しては猶言えぬ　章久
（口下手の緊張発言せず終る）
緊張を解く息を吐く吸って吐く　和枝
（深呼吸して緊張をととのえる）
試験場で何度もトイレ行きました　美代子
（緊張をトイレでほぐして来た試験）
緊張のしすぎでお茶をこぼしてる　好花
（お茶入れる手が緊張をして狂い）
先輩へ緊張も添えお中元　太一郎
（緊張を添えて中元無理をする）
背伸びして緊張をするへまをする　金吾

（緊張をしすぎてドジな事もする）
緊張の糸が切れればただの人　吉太郎
（緊張をすると人柄まで変り）
追い抜いてからは緊張解けぬ日々　時弘
（追い抜いてから緊張の日が続き）
初舞台足はふるえる声は出ぬ　秀香
（緊張の足がふるえる初舞台）
検査する患者と医師が緊張す　ひさ子
（レントゲン医師の緊張怖く見る）
おこし入れ緊張のひび秋篠妃　ますみ
（緊張をされて紀子妃の宮家入り）
緊張をほぐすに司会者ギャグも言い　繁男
（緊張を司会のギャグがほぐらせる）
改まって今更何を言いなさる　敬
（緊張をしても取返しはつかぬ）
緊張が和み紀子妃微笑もどる　幸枝
（緊張をほぐして紀子妃微笑され）
此の年で緊張するとは未だ初心な　茂章
（年甲斐もなく緊張をくり返す）
身に覚えあるのか犬も緊張し　絢子
（身構えて犬も緊張して吠える）
表彰を受ける緊張胸は薔薇　姫女
（緊張をする表彰の胸に薔薇）
先生にビールつぐ手が震え勝ち　隆
（ビール酌ぐ手に緊張が要る相手）
緊張を踊る扇の振えがち　ひでの
（緊張の手元ふるえている扇）
緊張の中で花嫁幸に酔い　豊子
（緊張の花嫁幸せおし包む）
息を止め緊張してる歯の治療　義
（歯の治療待つ緊張へ息を呑む）
緊張の一瞬シャッター降りている　昭子
（笑わせて緊張ほぐし押すシャッター）
緊張に左右されてる血圧計　君江
（緊張をすると血圧すぐ騰る）
決断に迷う話で緊張す　民子
（緊張をして決断をまだ迷い）
緊張へ長い乾杯目のゆがみ　芙美子
（乾杯をして緊張がときほぐれ）
ヨーイドン胸の動悸で聞こえない　みつこ
（スタートの緊張足がそろわない）
緊張してことばの出ない壇の上　美恵子
（緊張をすると二の句が出てこない）
緊張をほぐす社長の冗句聞く　志華子
（緊張が社長のジョークでほぐれかけ）
緊張右手右足同時出る　昭治
（緊張をすると手足が共に出る）
大ジョッキに緊張流す女子社員　ちず子
（大ジョッキOL緊張しておらず）
試験場緊張する子を笑わせる　春子
（緊張の子を笑わしている試験）
緊張感は老化防止にいい薬　円女
（緊張が老化防止の役に立ち）
見舞客帰りは声が弾んでる　幸枝
（見舞客帰って緊張感が抜け）
緊張をほぐすトップのいいジョーク　時弘
（緊張をほぐすジョークが受けている）
緊張もなくて怠惰に住む独り　絢子
（平凡に暮し緊張などしない）
お互いの緊張ほぐすお仲人　静子
（仲人の機転緊張ほぐらせる）
子離れをして緊張が抜けて老い　静江
（子離れが出来緊張に用がない）
検査結果緊張解ける医者の声　武治
（心配はないと緊張させぬ医者）
バンド締め百万ドル夜景もうわの空　明吉
（バンド締め直し夜景へ緊張す）
着想と表現が巧みな句
緊張をしているらしい眼の動き　時弘
緊張の一日紀子さま宮家入り　秀香
緊張をほぐす場末の縄のれん　清柳
私の句
緊張をほぐらす煙草刑事くれ　白渓子
ぬぎ捨てて緊張ほぐらせる我が家　白渓子

◇

題「**来賓**」　**9月15日締切**（11月号発表）

宛先　〒569　高槻市桜ケ丘北町3—19　辻　白渓子

—水煙抄

秀句鑑賞

—前月号から

河内月子

本当のことを話して叱られた　美田旋風

あなたは正直で勇気のあるやさしい方ですね。でもスナックでもてた話は奥様に内緒。

職安へ行くのに靴を揃えられ　窪田和広

テイシュ元気で留守がいい。こんなコマーシャルがありましたね。おふたりのために、早くお仕事みつかりますように。

外科内科眼科も診ます島の医者　山田保蔵

瀬戸大橋ができて一年と少しになりますね。鷲羽山から見える島を買いに来た観光会社に島民全部引っ越せる島があれば売ってもいいと言ったそうな。この句の島もみな仲良くやっておられるのでしょうね。先生は大忙し。

空青し俺の心も澄んで来る　波ただお

病気の原因の一つにストレスがある。社会も人間関係も複雑で、自分自身をいじめることばかり。どうぞ青森の美味しいりんごを食べて美しい空をごゆっくり。

土つきの大根さげて叔父がくる　桜沢あか里

農薬づけの野菜、添加物だらけの食品などなど、家族の健康のため、きれいな物は余り買わないように。野菜類は虫の喰ったものの方が安心、姪のために貴重な土産をさげてきてくれました。叔父さんいらっしゃい。

遅ればせ嫌いな牛乳のんでいる　森本節子

すこしは好きになりましたか。毎日飲んでいると美味しいでしょう。牛乳はカルシウム量が小魚類より多いそうですから、よく噛んで飲んでください。骨が強くなりますよ。

蓑虫のぶらり人生それもよし　小糸昭子

土地付きの家もマンションも億を越す。家賃の安いとこでいいじゃない。外見より心の豊かさが大事、ゴーイング・マイウェーで充実した人生を。蓑虫もそう言ってますよ。

満たされて夢は段々小さくなり　徳山みつこ

指輪もドレスも十分持ってるし、旅行もちょいちょいしてるしという奥さんが増えましたね。仲良くお茶漬け食べまひょ。

朝市の老姿の素顔美しい　井上すみれ

なつかしいふるさと、山、小川、老母、旅の朝市で母によく似たおばあちゃんに声をかけられてつい買ってしまった。

わたくしのメニューで生きてゆく余生　江口有一朗

先日、テレビでスエーデンの快適な老後のくらしをやっていました。有一朗さんも色々プランをお持ちでしょう。どうぞ健康でのんびりとメニューの中に川柳を忘れないでね。

年金はあてにしないで踏むペダル　渡辺杏村

還暦なのよと言われてもウッソーと思う人が増えました。体も元気、頭もますます冴えて、やっぱり何かしている方が楽しいですね。どうぞ安全運転でがんばって。

土笛を造って今日は古代人　新井晶子

可愛い中学生ね。貴女に一度、お会いしたい。そして一緒に土笛を吹いてタイムスリップをしてみたいです。

試験終了毎回おんなじこと思う　新井朋子

お疲れさまでした。次のテストはがんばってね。貴女は反省も忘れない立派な高校生。

ジュースより谷間の水がノドに合う　渡辺杏村

山で仕事をしてる人は、水をよく知っておられる。山歩きしてても、缶がゴロゴロ。若者に水の旨さを教えよう。命の水を大切に。

川柳と用字用語

川柳こぼれ話

田中正坊

かつてこの問題は、「校正雑感」「校正再考」でもふれたが、前回の「表記法」同様、複雑な日本語の性格を反映して〝一刀両断〟というわけにはいかない難しさを持っている。用字用語については、内閣告示「常用漢字表」「送り仮名の付け方」があり、公文書はすべてこれに準拠することとなっている。川柳もこれに右へ倣えするのであれば、とりたてて論議するまでもないが、告示そのものに「科学・技術・芸術その他の各種専門分野や個々人の表記にまで及ぼそうとするものではない」と逃げ道を設けているから困る。

したがって文学の世界では、これらをいっさい無視して旧字・歴史的仮名づかいで通している作家もいるし、詩・短歌・俳句でも新傾向の作家は別として、あまりこだわってはいないようである。特に俳句の場合、新聞の俳壇でさえ、歴史的仮名づかいを固守し、文語体が主流を占めている。その点、川柳はレトリックとして文語を使う以外は、古くから口語をたてまえとし、戦後は歴史的仮名づかいの作品は皆無と言っていい。

そこで各柳誌では、この問題をどのように取り扱っているかということだが、『川柳展望』(第60号)の〝言語通信〟(天根夢草)では、「本誌の送り仮名の付け方は、内閣告示による本則・例外・許容に統一していない。短詩文芸においては、作者の視覚(字面)も重要だと思うからである」としている。特にふれてはいないが、常用漢字表についても同様と思われる。他の柳誌については、私の知る範囲では方針めいたものを明らかにはしていないようである。

さて、いよいよ本論に入らねばならないが、作句にあたってはいかなる漢字・送り仮名を使うのも、全く自由であるということを大前提としたい。これは文芸として、当然すぎるほど当然である。しかし、それを作品として仕上げ、句報・柳誌に発表するについては、やはり何らかの規準が必要ではないだろうかというのが私の問題提起である。

まず第一は、〝編集後記〟でもふれたことだが、旧字体は個有名詞以外は絶対に使わない、俗字体も避けたいということ。旧字とは、獨(独)、俗字は斗(闘)のたぐいである。第二は、送り仮名は可能なかぎり、内閣告示「送り仮名の付け方」に準拠したいということで、ここでは本則のほかに例外・許容まで設けているので、かなり裁量の幅があり、これによって表現の自由が妨げられることはほとんどないと思う。歴史的仮名づかいを排することは、改めて言うまでもない。

そして第三は、やはり漢字の問題であり、何をおいても漢字を正しく使うことを心がけたい。実は案外、このことがなおざりにされている。第四は、接続詞(又・尚・併し)はできるだけ平仮名で書くこと。おわりに第五は、原則として常用漢字を使うようにしたいということで、『川柳春秋』(第18号)〝なんでも相談〟(加藤翠谷)も、このことを強調している。

しかし、この第五が最も問題となるところで、最近、意識的に多彩な漢字を使う傾向が強まっており、「貌」(かお)、「炎える」(もえる)、「翔ぶ」(とぶ)などが多用されている。視覚(字面)もおろそかにはできないが、句の意味を伝えるのに、どうしてもその漢字を使わなくてはならないかどうか、吟味してみることも大事だろう。どうやら肝心なところで、紙数がつきたようである。

郡上八幡・鳩ヶ湯の旅

翠柳吟社創立15周年記念川柳大会参加

7月21日～23日

■第1日—7月21日

金華山から郡上八幡へ

丸山　よし津

少し迷って、集合場所の新大阪駅一階団体待合所を見つけると、川柳塔の紫の旗があたたかく迎えてくれました。昨年の旅行で仲良しになった遠隔地の友と再会を喜び、南海観光バスに乗り込みました。

水と踊りと心のふるさと、郡上八幡の翠柳吟社創立15周年記念川柳大会に参加、そして観光の全行程バスツアー、一行四十八名を乗せて定刻午前九時に走り出しました。

車中で紫香団長からの挨拶、スケジュールを立てる段階から終始、お世話してくださる諷云児さんから、旅行についての細かい説明があり、一路、岐阜市へ。渋滞のため、予定より少し遅れ、午後一時十分、やっと昼食場所の岐阜グランドホテルに到着しました。

岐阜城を遠くから眺め、金華山へとバスは走りました。蒸し風呂のようなロープウエーに揺られて山頂に着き、七曲りの石段を上って展望台から岐阜市内を眺望しました。

そして、今日の終着地である郡上八幡町へと向かいました。ガイド嬢の美声に耳を傾けたり、夜の郡上踊りに備えて諷云児さんが用意してくださったテープで郡上節のリハーサルをしているうちに、川柳大会の会場でもあり、宿舎でもある郡上八幡観光センター積翠園に着きました。

金華山展望台付近で

入浴後、一番エエ服を着て、前夜祭に出席しました。翠柳吟社会長青木惜春さんの歓迎の言葉にはじまり、町長代理の挨拶や祝辞、八幡太鼓などのアトラクションと盛り上ってまいりましたが、心はテーブルに並べられた数々のお料理と運ばれてくる日本酒・ビール・水割りへ奪われておりました。

パーティー終了後、日本三大民踊の一つである郡上踊りをぜひ覚えて帰りたいと、町役場前広場の踊りの輪に加わりました。そして翠柳吟社の持つパワーに驚嘆し、行き届いたお心遣いに心から感謝しながら、快い眠りに就きました。

■第2日—7月22日

翠柳吟社記念川柳大会

宮園　射月芳

第二日も快晴。肌寒くて目覚めたが、クーラーのせいだったらしい。外は風もなく今日も暑そうだ。まずは入浴、朝食。昨夜の前夜祭に続く郡上踊りの興奮と今日の大会を待つ高ぶりからか、皆さん冗談を言い合ってはいるが、目の奥は笑っていないような気がする。非才のわれら諦めて早々と出句し、郡上八幡城に登る。行き交う人と〝お早う〟の挨拶が爽やかだ。海抜三五三米、遠藤盛数築城という天守から眺めると、吉田川を挟んで小京都と言われる八幡町は、昨夜の音頭も嘘のように暑さの中にねむっているようだ。

いよいよ翠柳吟社創立15周年記念川柳大会が郡上八幡観光センター（積翠園）で午前十時開場、出句締切は正午、参加者一六〇名。同人十五名という小吟社としては、準備その他たいへんだったろうと察する。東野大八先生のお話は「一揆と連歌」。一揆の成功例は少ないが、民衆の飢餓線上の生きるための戦いであり、マフィアの発生も同根であること、連歌師の飯尾宗祇のことなどであったが、しめくくりとして「二十一世紀には、川柳は亡びるのではないかという予感がする」という話は、その先を聞きたいようで、釈然としなかった。さて披講、同行の皆さん好成績で、その中での特選句は次のようであった。

「漁」　漁に出るやさしい海の深さまで　池　森子

「文」　文無しにならんとファイト湧いてこぬ　河内　月子

八幡城　高杉千歩さんえがく

満ち潮のせいか激しい文になる　八木　千代

「信」　ふれた手を信じてねむるおじぎ草　中川　楓

「充」　米びつを充たすと忘れものをする　林　はつ絵

神のつぶてを充分すぎるほど受ける　田中　亜弥

「集」　葬式に人を集める喜劇だな　舟渡　杏花

「交」　交わればひびきあうもの深くなり　野村太茂津

「名」　八起き目の汗がにじんでいる名刺　川島諷云児

午後三時四十分に閉会するや、別れを惜しむ間もなくバスに乗り、途中、九頭竜ダムで一服、あちこちでカメラパチパチ。川沿いの断崖にひやひやしながら、この日の宿である白山登山口の鳩ヶ湯温泉に到着、鄙びた山の宿は川柳塔一行で満杯となる。

戦いすんで日が暮れて、今宵は心おきなく懇親宴。山の料理にわいわいがやがや、ブレーキを外し、余興もはずんで、お開き後も柳談でほてりを冷やし、山の狐狸たちが出てくる深更、ようやく呉越同舟、同床異夢、雑魚寝のねむりにつく。

■第3日—7月23日

鳩ヶ湯から永平寺へ

千原理瑛

郡上八幡観光と川柳大会に参加し、いよいよ帰途につく第三日の朝、山中にひなびたただ一軒という「鳩ヶ湯」の宿では、早朝から散策に出る人、温泉につかる人、思い思いのひとときを過ごし、朝食の席につくと翠柳吟社から頂いた地酒をまわされ、正に朝湯、朝酒の旅冥利を満喫した顔、顔、顔！

さすがは山の宿、出発する頃は涼しくさわやかで鳩ヶ湯の宿をあとにして大野市に向かい、名物の朝市に立ち寄りましたが、すぐ目に飛び込んだ「冷たいお茶をどうぞ」と書かれたNTTのサービスコーナーに入り、つい釣られてみんなテレホンカードを買ってしまって大笑い。

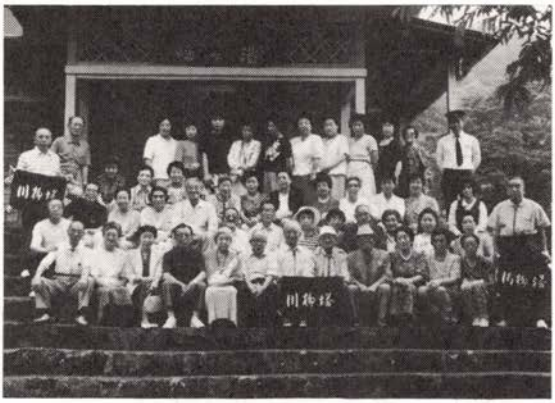
バスの前では、鬼遊さんがタオルをかぶり、朝市から買って来た品を並べ、「朝市でっせ、茄子はどうだ、ニンニクもありまっせ、辛いからい唐辛子。美味しおまっせ」とみんなを笑わせる一こまもありました。

そしてバスは北陸路へと向かい、車中でも鬼遊さんとガイドさんのやりとりが面白くて笑うことばかり。このあたりの清流には、イトヨ、天然記念物のアラレガコなどが生息しているとのことで、珍しい魚の名も覚えました。

途中、曹洞宗大本山の永平寺に参詣しました。はじめに黒衣の若い雲水からこのお寺の由来と禅僧の修行についての話を聞き、長い廊下を歩いて仏殿・法堂・承陽殿などを巡拝しましたが、さすがに参禅の道場だけに山内全域が厳粛なふんい気に満ちていました。

さらに車中では課題吟「バスガイド」(田中好啓選)に挑戦、昼食後の入選句発表にまたまた車内が沸きました。そうこうしているうちにバスは敦賀の海産物店に着き、そこでそれぞれ土産の買い納めをして最後の休憩。大津のインターに着く頃は気温もピーク、引きつけられるようにかき氷二杯に喉をうるおし、一息入れて一路大阪へ。

楽しかった旅の名残りを惜しみながら、新大阪に到着したのは予定時刻より一時間早く、安心して帰途に着くことができました。こまやかなお心づかいとお世話をしてくださいました諸先生方、ほんとうにありがとうございました。柳友なればこその楽しい旅をさせて頂き、心から厚くお礼を申し上げます。



鳩ヶ湯玄関での一行

旅日記　一人一句

鵜飼舟　昼の長良は人泳ぐ　黒川　紫香

寝姿も郡上踊りの足捌き　野村太茂津

郡上踊りを観たと亡母にも知らせたし　田中　好啓

宗祇水　踊り離れた手で掬い　辻　白渓子

名君の心をしのぶ郡上節　春城武庫坊

宗祇水と再び会った甘露かんろ　春城　年代

碧い眼の娘も踊る郡上節　田中　正坊
鳩ヶ湯の夜は太古の闇となり　高杉　鬼遊
八幡城　十年ぶりの筆の先　高杉　千歩
上手下手問わず楽しい踊りの輪　川島諷云児
断崖をバスの悲鳴と鳩ヶ湯へ　山本規不風
幽玄の鳩ヶ湯の朝スケッチに　山海　友熙
アノ人コノ人そんな昔へフト帰る　神谷凡九郎
趣味の旅　善男善女美男美女　宮園射月芳
郡上節すこし覚えて汗しぼる　小池しげお
清流の魚影見つける旅の朝　藤村　〆女
九頭龍の湖底を想うねむの花　林　はつ絵
名水で洗えば老斑消えるかも　舟渡　杏花
窓の無い部屋　円空ののみの跡　丸山よし津
修業僧の声凜として永平寺　門谷たず子
旅心　郡上おどりの輪にとける　川見　絹子
城下町　祭りと人と名水と　浅野　房子
深山をながめ秘郷の湯につかる　小熊　江美
酒もよし郡上踊りの輪に染まる　児玉　歌子
岐阜城の暑さ籠城の兵偲ぶ　久保　和友
山紫水明　飛山濃水　秋津島　片上　英一
宿ゆかた踊れば太鼓弾みだす　内田　結実
その中にひとり際立つ踊りぶり　北山　好笑
唄につれ郡上につれて夜を踊る　千原　理瑛
朴葉みそ買うて郡上の旅を終え　赤川　菊野
鳩ヶ湯で薬に食べた熊の肉　宮崎シマ子
くつろいで秘境の宿に宴果てず　堀江　光子
郡上踊りへ参加してきた小巾帯　柴田英壬子
川面から春駒下駄を鳴らさねば　八木　千代
坂下りて名水に逢う旅の町　澤田　千春
外人も郡上踊りにのっている　田中　亜弥
鳩ヶ湯に旅の終りの馬鹿さわぎ　吉岡きみえ
永平寺　仏の貌にも三度逢う　園山多賀子
鳩ヶ湯の秘境にネムの花優し　松本　文子
手まね足まね郡上踊の一夜漬け　野中　御前
空気よし水よし人よし踊りの輪　板尾　岳人
郡上鳩ヶ湯わたしを心地よく洗う　池　森子

ごあいさつ

黒川紫香

このたびのバスツアーに多数ご参加いただき、いろいろと不行届きもございましたが、各地の皆さまと楽しい三日間を過ごすことができました。ご協力厚くお礼申し上げます。

夜市川柳募集

第4回「許す」　題　**新家完司**　選者　**9月末**　締切
第5回「叫ぶ」　田頭良子　10月末
第6回「拾う」　高杉鬼遊　11月末
第7回「女」　住田英比古　12月末
投句先　〒593　堀市堀上緑町2—9—2
河内天笑方　堺川柳会

川柳塔鹿野みか月結成満十周年記念川柳大会

とき　**11月11日**（日）午前9時開場
ところ　鹿野町営国民宿舎「山紫苑」
（JR浜村駅からバス15分）
兼題と選者（各題2句・11時締切）
「逞しい」　西尾　栞選
「野心」　橘高　薫風選
「姉妹」　森中恵美子選
「辻」　浜野　奇童選
「旅」　天根　夢草選
「訛る」　柳楽　鶴丸選
「劇」　八木　千代選
「さむらい」　土橋　螢選
会費　2000円（軽食・発表誌呈）
投句　1000円（**10月31日**締切）
投句先　〒689—04
鳥取県気高郡鹿野町鹿野1279
中原諷人方
川柳塔鹿野みか月事務局

漂う優しい男の感触

『波多野五楽庵句集』

東野大八

風うけぬ吾子よりんごに似て白し　（前編）

吾れに泣く妻と子がある日の自責

この句集は、前編・後編から成り立っている。面白いわけ方である。察するにこの両編の間の歳月がブランクで、中止の二十年間がはさまっているように思う。作品としてはやはり後編の方に佳句が多い。

野良犬の寝顔を月も淋しがり　（前編）

柿の葉が散ると女の村になる

デスマスク哀しい紅を引いてやり

手離した土地の雑草抜いてくる

再読していくとこの作者は、なかなかの好人物でロマンチスト。心やさしい男の感触がどことなくユーモラスに漂っている。

職業は歯科医だが、こんなお人柄なら治療台にのっかっても痛くはなさそう。

はじめ「五楽庵」という号を見て、てっきりそば屋さんかな、と思った。とにかくその変わった柳号のいわれをきくとこうだ。

この人の叔父さんは工藤安亭（本名守邦）と申される歯医者さんで「口をアーンとあいて」という商売柄から、趣味の川柳の号を安亭とつけた。満州北満からの引き揚げ者で

一城の主となった旅がらす　安亭

という句が残っている。この柳号から、この愛すべきオイ坊は、口をアーンとあいてごらん―とくる歯医者さん用語のあとをうけた「ごらん」から「五楽庵」が生まれた。同じ抜歯モーターを手にする叔父とオイの、この付け合いに、なんとなく肉縁のぬくみがある。

極楽の前で割り符が見つからぬ（後編）

の句にある、叔父オイの同業の割り符は、みつからぬどころか、ちゃんとうまくけじめがついている。

人生還暦という後段の節目に立つと、どことなく己の来し方を凝視する癖がある。その照る日くもる日の自分史の中に、どうしても出てくるのが酒と女の自己批判。加えて津軽三味線のはげしさに舞う吹雪。この風土性の底で、妻子を抱えた憎めない男の眼に、時には気まぐれな雪女も現れるという寸法である。率直にいえば、そんな姿には、人間の「悪」がない。この句集に欲しいのは、その悪性かもしれない。津軽が生んだ、文学青年のアイドル太宰治だって、そのお仲間の一人なんだが…。最後に次の佳句を添えておく。

不思議にも涙の似合う白い足袋

父逝くや五月七日の雨の日に

冬眠の癖が残っている背中

答は一つ四月初めの汽車に乗る

碁を打ちに行った与作が帰らない

神の書くシナリオだってミエがある

そして今日も老眼鏡をポケットに

（『東奥日報』から転載）

川柳塔わかやま創立20周年記念川柳大会

とき　9月9日（日）午前10時開場

ところ　和歌山県農協会館

兼題と選者（各題2句）

「足　跡」　橘高　薫風選

「いたわる」　大矢　十郎選

「　腕　」　中田たつお選

「選　ぶ」　小出　智子選

「　帯　」　森中恵美子選

「書　く」　田中　好啓選

「希　望」　黒川　紫香選

句会費　1500円

月の砂漠を妻と歌ったことがない

――波多野五楽庵句集鑑賞――

橘　高　薫　風

波多野五楽庵の師系は麻生路郎である。叔父に工藤安亭、先輩に工藤甲吉、中断していた川柳作句を仲間の後藤柳悦の情熱にほだされて再開、現在川柳塔「あおもり」を主宰する。

句集の第一頁には次の五句が並んでいる。

はっと気をとり直す雪の冷めたさ
うなだれるように追分遠くなり
風うけぬ吾子よりりんごに似て白し
吾れに泣く妻と子がある日の自責
天邪鬼酔えば子供の顔になり

風土をうたい、家族を詠み、自らを省る。課題作にも作者の生活体験の裏付けがある。路郎の言う「いのちある句を創れ」の忠実な実行者ということができる。

雪女かつては妻の座にも耐え

津軽では、昔、レプラに罹った妻女は白い着物を着せ、金銭を持たせて家から放逐した。女は以後、温かい家庭の灯は見つめるだけで近付くことはできなかった。この句には、そのような悲しい因習が背景にあるように思える。恐ろしい雪女の実体は、悲劇のヒロインであるらしいのだ。

紙こよりこれが貴女の手紙です

奈良法華寺には、滝口入道が横笛に送った手紙を集め、にかわで固めてつくった入道の座像がある。この句は、女からの熱い恋文を一本の細いこよりにして、恋の実体、恋のはかなさを揶揄、凝視観照している。

輪廻転生もしや今朝鳴く鶯に

わが家の小さな庭の梅の木に鶯が来た。この梅を育て愛した父の、あるいは愛する肉親の生まれかわりではないかと、はっと胸を突かれるものがあったのだ。

りんご紅玉母の位牌に香が移り

作者は、大型の果顆ののさばる昨今でも、りんごは紅玉・国光にしかずと言っておられるようだ。あの紅い玉を仏壇に供えたら、馥郁とした香が位牌に移りそうになる。母者も喜ばれそうな。

泣けと読み泣くなとも読む母の筆

上五―中七、意味合い曖昧だが、その心底つかみどころの覚束ない故に、母の温かみが底知れず深まる。詩は理を越えたところに在ることを教えられる。

鳩時計妻はいくつになりたるや

結婚の日から時を告げ続けてくれた鳩時計は、子供を育て、親を見送った歳月を刻んで、古びたものの尊さ、なつかしさを伝える。さて、妻は何歳になったのか。幾つ違いの夫婦だからとわが歳から妻の内助を確認する夫である。

月の砂漠を妻と歌ったことがない

あどけない童謡ながら、砂漠を星をたよりに夜を日についで行くようなロマンチックな旋律、この歌こそわが妻とともに歌うにふさわしい歌と思える。しかし、事実は歌ったことはないのだ。愛妻愛唱の二句である。

満足を銚子にすれば二本ほど
飲めばすぐ止まる時計を持ち歩く

作者の酒は、ムードを好む紳士の酒で、席を同じゅうする人をたのしくさせる。前の句は、晩酌というものをこれほど率直にまろやかに表現した句は他にないであろう。後の句は、ムードが良いと、すぐ我を忘れる天の邪鬼的傾向への自戒だ。

独乙語で笑う猥談かも知れぬ

作者は歯科医だから、ドイツ語は堪能である。仲間が何か喋って他愛なく笑っている。ひょっとして猥談かなと推量する。一読頬の弛む、洒脱円満のうらやましい境地と言える。

本社　八月句会

八月七日(火)午後五時半
メンズファッションセンター

連日、三十六度を超すうだるような酷暑が続き、さすがにやや出足が鈍かったが、開会の頃にはどうにか空席が埋まった。この日のおはなしは初登場の春城武庫坊氏。女性の出産率低下の話から始まって、人口減少を防止する対策としてテレビにも〝休刊〟日を設けること、句会の未来像として茶の間に座りながら開ける映像とFAX通信によるテレビ句会など、〝川柳亭武庫坊〟さながらの漫談に爆笑がわいた。

「倉庫」選者の神谷凡九郎氏欠席のため、小池しげお氏が代選、初出席は山海友熙さん(京都市)重政より子さん(大阪市)の二名。なお、七月句会の初出席に岡本利子さん(和歌山市)がもれていたので追加。月間賞は新たに川柳文学社の主幹となった波部白洋氏が獲得した。(正)

(司会—岳人)(受付—年代・奏月)
(記録—射月芳・月子)

出席者—笛生・諷云児・〆女・千秀・朱夏武庫坊・年代・白渓子・奏月・結実・天笑・悟郎・利武・雅文・柳影・狸村・杜的・小林英子・太茂津・しげお・光代・福本英子・二南・三男・章久・紫香・恵空・はつ絵・いわる・満津子・典子・達子・小糸昭子・喜風・鬼遊・眉水・吐来・敏・勝晴・トメ子・みつ子・比呂志・美代子・悦郎・透太・ただし・倫子・白兎・ダン吉・シマ子・八斗酥・正坊月子・東雲・白洋・英一・洋敏・柳宏子・度冬葉・遊美・重人・頂留子・英壬子・理瑛・弥生・栞・より子・文秋・智子・けんたろう楓楽・恭昌・寿美・保州・雄次郎・歌子・美幸・規不風・友熙・小路・庸佑・元紀・章・射月芳・半蔵門・寿子・岳人・吸江・萬的

席題「ぶつぶつ」　波部白洋選

絶滅をすることはないいぼ蛙　度
ぶつぶつと破片拾っている涙　悦郎
ぶつぶつと言うてけっこう飲んでいる　武庫坊
言うだけは言うてぶつぶつ飲んでいる　規不風
中とろをぶつぶつ切ってくれてます　天笑
母の日に父はぶつぶつ何を言う　栞
ぶつぶつとぼやきながらも愛してる　いわる
ぶつぶつは壁に向かって言いなはれ　結実
ぶつぶつとぼやき男を下げている　楓楽
王さまの気分でぶつぶつ言わずいる　弥生
泡溜めた蟹の不平を聞いてやる　笛生
ぶつぶつと言うな明日が暗くなる　奏月
シルバーシートの前でぶつぶつ汗を拭く　太茂津
ぶつぶつがちょっと気になる志い性　より子
儲かっていますぶつぶつ言いません　結実
ぶつぶつと一円玉の一人言　恭昌
ぶつぶつと言うが達者な方が良い　二南
影武者が何かぶつぶつ言っている　正坊
ぶつぶつ言うな堂々と議論しろ　八斗酥
汚染の川蟹がぶつぶつ言うてます　ダン吉
ふんふんと妻のぶつぶつやりすごす　敏
ぶつぶつを根よく聞いて石地蔵　射月芳
ぶつぶつと言うてる割によう儲け　吸江
ぶつぶつと言いつつ長いのに巻かれ　庸佑
サファイアの小言に午後の風がある　元紀
ぶつぶつと私の意志を表示する　敏
ぶつぶつ言うさかいにぼちぼち行こか　白兎
九条をぶつぶつ言わしてはならぬ　保州
多数決ぶつぶつ言うてもはじまらぬ　度
ぶつぶつと売れないうたを書く詩人　奏月
わたくしのぶつぶつを聞く阿弥陀様　恵空
蟻の列見てぶつぶつを引っ込める　月子
ぶつぶつの中で殺意が動き出す　寿子
ぶつぶつ言っている間にお蕎麦のびている　満津子
ぶつぶつ言うてもすることしてる母　雅文
仏壇へ祖母ぶつぶつと河内弁　元紀
カリフォルニア向いてぶつぶつ米が言う　朱夏
ぶつぶつと行きつ戻りつハムレット　楓楽
ぶつぶつと私の影がついてくる　鬼遊
脳味噌がぶつぶつ沸いた炎天下　軸

日本沈没泡がぶつぶつ言うていた　白洋

兼題「情け」　西口いわゑ選

二代目は情無用の人事する　信義
人情切るナイフ一本持っている　(松)文子
亡母の歳越えると解ってくる情け　瑞枝
ひたすらに座禅の中に置く情け　雅文
百度石にすがる情けを笑えるか　三男
情なやパンツつまみにされた箸　恭昌
八月の情けが鰯雲にある　元紀
おばあちゃんの情けを知ったローカル線　半蔵門
ありふれた情けを嫌う赤トンボ　月子
うっかりと情けを掛けて欺される　利武
美女からの情けは素直に受けておく　狸村
情に負けそうだからコンピューターに聞く　満津子
背水の陣で情けは捨てている　太茂津
風媒花風の情けを絶ち切れぬ　透太
薄情けビールの泡の苦さほど　結実
飽食の皿で情けが痩せてゆく　寿美
本当の情けは此処で手を出さぬ　光代
明かされて鬼の情けを知る迂濶　狸村
人情も恋もあります法善寺　吐来
札束へ情けを知らぬわけでない　寿子
修羅いくつ真の情けに汗ひかる　弥生
毒舌も情けの一つとして受ける　章
爆心の地に来て旅情引き締まる　悟郎
洗礼を受けて情けの手を拡げ　はつ絵
ナイル河旅の情けへ日が沈む　しげお
実印を捺さぬ友情だってある　結実
かりそめの情けに濡れてゆく尾灯　度
仁王門くぐると情け深くなる　寿美
多情仏心あく迄赤い椿の朱　八斗酵
産卵へ川の情けを疑わず　雄次郎
大氷原に触れて地球の情け知る　元紀
ローカル線の情けに海の幸がある　重人
棒グラフ伸びて情けに飢えてます　白洋
情けもつ髪は無限の森である　ただし
しがらみが情けの色に染まり出す　みつ子
傷心に情けをくれるねむの花　人
竹トンボ情けの風に逢うてくる　しげお
灯籠を流し情けの風に会う　地
情けある言葉が甘いはずがない　天　武庫坊
影法師熱い情けに飢えている　軸　楓楽

兼題「逆」　福本英子選

逆光の頬がぬれてるシルエット　どんたく
うっぷんを一気に晴らす逆上り　瑞枝
逆縁の友の塔婆に酒を酌ぐ　荒介
逆転のカードは妻のふところに　狸村
逆立ちをしても消えない悔いばかり　みつ子
友情を逆手にとった秋の風　冬葉
窓際の判コ逆さに押してある　しげお
逆賊にもされた古代の皇子もいる　萬的
逆光を浴びて秘密もポロリ出る　吸江
セクハラを男がされるビヤホール　ただし
逆立ちをすれば絶対美男美女　柳伸
逆うらみされた女と坂で会い　(小)英子
逆襲にそなえて井戸を深く掘る　奏月
逆上はしません血圧高いから　英一
裏目また裏目どうやら今日は三リンボ　柳宏子
砂時計逆さにされて生きている　岳人
逆さまに切手あの人らしいとこ　笛生
逆わぬことも不気味な子の寝顔　年代
逆説も併記しておく答申書　ただし
逆ろうて本音ばかりを押し通す　太茂津
逆立ちをするわと妻も負けてない　透太
古時計逆にまわってみたくなる　結実
校則に振り回されていた教師　八斗酵
逆立ちをして天分を知りました　典子
逆さまに振っても出ない知恵袋　柳影
O型の血がどこまでも逆に出る　栞
ピカソの絵逆さに吊ってみたくなる　武庫坊
未来図がいつか逆立ちしてしまい　達子
真底は好きで悪口ばかり言う　はつ絵
長生きはしたし逆さま見たくない　三男
逆らって熱いうどんを食べている　智子
流れには逆らいません青りんご　結実
給料日前の妻には逆らえぬ　保州
逆転を狙う盃干している　歌子
八月の時計は逆に回り出す　元紀
逆立ちをして腹の虫おさえとく　月子
逆むけが気になるあなたはまだ来ない　半蔵門
人

図星らし吸口に火をつけている　度
地
逆襲がはじまっている酸性雨　失名
天
均等法男遠くで吠えている　恭昌
軸
天と地と逆に映った熱帯夜　(福)英子

兼題「倉庫」　小池しげお選

昔々松前船も来た倉庫　雀踊子
倉庫には誰も入れないのが臭い　妻子
きれぎれの言葉を倉庫から拾う　荒介
由緒ある倉庫に眠っている歴史　元江
月明り倉庫無気味なものにする　庸佑
経験の倉から作家小出しする　どんたく
倉庫には米と油が積んである　螢
倉庫番まだ働ける父にする　白洋
倉庫番と密談してる白ねずみ　頂留子
値上がりを倉庫の中で待っている　敏
胸の倉庫一つの鍵がかからない　みつ子
立退きの話に揺れている倉庫　利武
倉庫の中に神棚がある港町　(福)英子
霧笛きいて倉庫も旅を考える　ダン吉
倉庫から倉庫へ長い蟻の列　千秀
倉庫番社内きっての生字引　柳宏子
社の景気いちばん知っている倉庫　保州
蟻は倉庫で秋の値上げを待っている　元紀
未だ何かありそう冷泉家の倉庫　杜的
古々米に飽いてねずみが倉を出る　鬼遊
港町海へ並んだ貸倉庫　紫香
マドロスがひょいと出そうな倉庫街　章久
絵心を誘う倉庫がある港　諷云児
初めてのベーゼ倉庫の陰だった　いわる
何もかも倉庫へ入れる癖がある　恵空
突堤の倉庫大きな船が着き　笛生
一匹のねずみも許さない倉庫　けんたろう
ゆっくりと倉庫に酒の眠る町　いわる
絶対の信頼があり倉庫番　八斗酿
キツネ目の男を知っている倉庫　保州
善人の倉庫はいつも空っぽだ　朱夏
倉庫番孤独を愛す二度の職　正坊
倉庫の隅を猫の母子に貸してます　結実
あの倉庫円高差益詰めてある　透太
歳月を倉庫で暮らすウイスキー　紫香
かくれんぼの記憶が残っている倉庫　諷云児
王さまが隠し倉庫を一つ持つ　はつ絵
びっしりと倉庫が詰る悲劇だな　はつ絵
佳
野良犬が倉庫の裏をはなれない　栞
掛算が狂って倉庫空になり　美代子
黒い噂すっぽり抱いている倉庫　吐来
軸
倉庫番どっちも言いっこ無しにする　しげお

兼題「旨い」　河内天笑選

大根の旨さを分ち合う夫婦　道胤
公約だなんで旨うま騙される　螢
旨いものに慣らしておこう妻の舌　緑良
旨かった西瓜の礼も書いておく　しげお
旨いとは言わぬ夫で平和です　杜的
ご馳走はなくても旨い母の味　諷云児
銘水の旨さを旅の手で掬う　白渓子
薬から離れた朝の茶が旨い　雅文
故郷に旨い空気と煮ころがし　章
旨い寿司食べにゆこうかおい太郎　岳人
飲めや食え只より旨いものはない　鬼遊
時差呆けの舌にとろける冷し麺　章
年金をさらって行った旨い口　倫子
旨いはなし摑みそこねる太い指　楓楽
無料旅行旨い話に罠がある　規不風
夏バテを知らぬなんでも旨い舌　八斗酿
旨い酒もって親父に会いにゆく　より子
騙されてサギ師は旨いもんだなあ　規不風
旨いのか旨くないのか男の子　美代子
旨い話にはんぶん足を入れてみる　年代
ハーモニカ旨いあなたを信じよう　奏月
三食と酒が旨くてくたばれぬ　武庫坊
旨い話にすぐ乗りたがるホタル火よ　シマ子
旨い汁避けてかぼちゃの馬車にのる　寿子
カギッ子が旨いラーメン食べさせる　トメ子
塀の中に旨い話が落ちていた　雄次郎
その上にお土産つきという誘い　度
旨いこと嵐に巡り合う絆　歌子
あの人と時どき旨い汁を吸う　透太
追い詰められて言うたにしては旨い嘘　文秋
眉唾で旨い話を裏返す　柳伸
佳

旨い話が飛込んで来た不運　比呂志
おふくろの味が旨いとプロが言う　文秋
旨い話といくさは背中合せだな　智子
旨い話の続きを聞いている木陰　智子
炎天下旨いはなしにひっかかり　月子
コオロギの鳴く頃酒が旨くなる　いわゑ

人

政治家が旨い話に寄ってくる　敏
地

グルメとや蛇に蛙にかたつむり　栞
天

旨い汁吸うてころっと逝きはった　小路
軸

大阪に着いたら旨いのが食える　天笑

兼題「弾む」　西尾栞選

ひとの財布頼りに弾まないように　楓楽
人妻とちょっと弾んでみたい街　透太
頂上の風に弾んだにぎりめし　重人
さあそれが物の弾みもいいとこで　敬
弾まない毬末っ子に持たす母　雀踊子
心の弾む仕合せがあるサクランボ　萬的
よく弾む女意外と敵を持ち　螢
誘惑に負けても弾む白い靴　奏月
起承転結転の辺りで弾みだす　年代
夕焼け小焼けあしたに弾むものがある　三男
弾むもの秘めた素顔が美しい　結実
偽りのころし文句へ弾む鞠　透太
カルチャーで弾みのついた夫婦独楽　英王子
心音に何度も弾む毛糸玉　歌子
家中を弾ませている御赤飯　岳人
山寺の和尚が弾むてまり唄　智子
ショルダーバッグも少し弾んでかるい罪　しげお
快調な弾み駝鳥は飛びたがり　(小)昭子
まりのように弾む心をもてあまし　保州
よく弾むまりは私を越えたがる　鬼遊
年金が下りると弾むおじいさん　眉水
弾むもの無之少々ボケ申し候　保州
名を思い出せずに話だけ弾む　洋敏
良く弾むマリで謀反を考える　〃女
弾んでる毬がころんで罠におち　(小)英子
抑留船弾む漁港に帰りつく　笛生
パスポートその日へ妻が弾み出す　雄次郎
ラケットに汗も弾んだ軽井沢　紫香
弾んでから夫があると知らされる　歌子
弾んでる祖父にベレーがよく似合う　悟郎
ひまわりが弾んでばかり夏の天　悦郎
佳

弾み過ぎ標的にされている男　萬的
弾まない愛情となる一行詩　度
テンテン手毬紀州はぬけるような空　ダン吉
ライバルのお通夜で弾まないように　比呂志
転んだはずみみたいなことを言わんとき　弥生
人

弾む毬境界線を心得ず
地

傷口をもった同士でよく弾む
天

造反へリーダーだけが弾む足　白洋
軸

すぐ弾む心欲求不満かも知れぬ　栞
(清記―楓楽)

川柳塔社常任理事会（8月1日）

▽上田翠光氏所有地に建立された中島生々庵句碑除幕式を9月22日に行うことを決定。
▽高野山の「川柳塔」碑の敷地を囲む玉垣を建立基金で設けることを決定。
▽紫香氏から郡上八幡吟行について報告。
▽岡本清水（きよみず・竹原市）清水利武（大阪市）両氏の同人推薦を承認。
▽川柳塔社規約（川柳塔社同人規約改定）案を最終審議し、同人総会への提案を決定。
▽来年度の本社会計事務について検討。
▽本社10月句会の開会時刻を会場の都合により例月どおりの午後5時半に変更を決定。

花地抄壇

1人1句、1か月分、30句以内厳守。
毎月23日締切。　担当・玉置重人

川柳たけはら　森井　菁居報

すずらんはほんとにすずの音がする　小三千　枝
クラブ活動いよいよ明日始まるぞ　小五昌　之
先輩になり忙しくしています　中二由　博
自分史の整理は早い五十坂　菁　居
いのち点滅救急車が走る　静　水
石に句を書いて金魚に見てもらう　蘭　幸
以心伝心嫁は情けの寿司を盛る　喜美子
母の味まだまだ遠い落しぶた　静　佳
土の香が好きで親父の鍬を振る　勲
点滴の泡の数だけ湧く元気　ヤスエ
遊びでもルールはちゃんとあるものね　愛　子
幸せの鐘はやさしい余韻もつ　栄　恵
薄化粧してみようかな病み上がり　麻　代
お互いに笑い持ち寄り日向ぼこ　浪　子
八十の谷間で見栄がまだ燃える　喜久恵
自惚れがあって絵筆が離せない　一　枝
喜怒哀楽ここ迄来てもまだ続き　清　水
お茶禱を終えて始まる独りの灯　ふさ枝
注射針今日もナースを困らせる　房　子
観音像雨にも優し眼で迎え　博　子
りんごむく子よハラハラとさせないで　比呂子
家族旅行倖せ彩の阿蘇の山　淑　子
ドレミファの声を乗せたい風が吹く　一　路
運勢欄今日はサイフを置いて出る　笑　子
大らかな時間の過ぎる花時計　伸　子
群青色の空をだまって見ていよう　静　風
ホームグランド人工芝の癖も知る　新　造
昼ドラマうたた寝の姑起こすまい　千代美
旬よりもハウスの方を買いたがり　光　子
一日が言えない草のたくましさ　笹　舟

川柳大阪　中原比呂志報

海峡の渦にストレス吸い込まそう　金　太
六月の雨設計図白の儘　洛　酔
個人的このみで私の地図を画き　与呂志
追う者がいると知ってる回り椅子　重　人
眼で笑うマスク美人の注射針　亮　太
まっすぐに追うからひとりかわされる　笑　風
先頭にいつでも出れる距離で追う　本蔭棒
追いつめるようで逃げ道つくる親　一　歩
波紋追う風のうわさに耳を立て　美津留
砂風呂へ苦労を埋めてフルムーン　柳　弘
ケーソンに明石のタコがびびってる　司
火を噴いた頃がなつかし遠い空　しげお
ただ生かすだけの医学が恨めしい　雅　万
真心を抜いてレンジで五分間　希久志
食文化五臓六腑もいそがしい　鉄　心
嫁姑聞けばどちらも耐えている　雅　巣
お互いに譲れぬ海峡漁業権　三　吉
待てませんたかが五目の迷勝負　権　八
協力を拒んで地価の上がり待ち　鈍　泉
協力のパートで持てたマイホーム　天　舟
子育てへ海峡幾つ越すのやら　比呂志

川柳クラブわたの花　片上　英一報

難点は妻ヒステリーという持病　シマ子
レンタサイクル古都巡礼の点と線　章
猟銃の点検熊が出て慌て　美津留
夏銀河輝く点に姑がいる　幸　枝
久々に点数かせぎ親孝行　友　甫
満点の答案だけを親に見せ　トシエ
七十点ほめてやろうかけなそうか　能　子
あと一点なんで大目に見てくれぬ　芙美子
一点で天下分け目の免許証　みき子
子供会一点で負け孫の顔　道　子
零点を取ってた友の嫁美人　一　雄
欠点をいい合いながらもたれ合う　ますみ
弱点をつかれて話題換えたけど　弘　直
炊飯器点火不得手のおばあちゃん　千鶴子
交差点思わず手を貸す白い杖　初　子
点滴でのびた命は儲けもの　市　子
点滴の窓へみどりが話しかけ　一　風
海戦の藻屑とならず人面魚　暁　子
掬われて友と離れるおとり鮎　隆
空梅雨に頭かかえる雨蛙　君　江
さなぶりの青なますよし梅雨に入る　春　子
梅雨晴れ間噴水ショーに虹を見る　その
梅雨にいりてるてるぼうず困ってる　朝　子
雨に咲く傘の行進街花火　信　江
愉しからずや六月の雨に唄えば　英　一
紫陽花の今朝は何色梅雨つづき　泰　成
はなみずき今年も無事な日を迎え　鬼　遊

川柳化粧櫓　植村客遊子報

いい話時計の針が気にならず　岳詩
甘くない世間と知った親離れ　サワ子
お向かいの犬が私を待って居る　遊峰
脇役の気楽さに馴れ今日も暮れ　輝月
黙ってても楽しい人とコーヒー飲む　大鷹
カラオケ位で晴れる憂さなら知れている　葉香
懐に反旗しのばせグーを出し　礎石
マドンナと言われ着こなすニュールック　三青
偏西風に乗れて風船安堵する　秋信
破れると知ってはずんだ紙風船　悲子
Gパンの娘ゆかた祭はミス浴衣　悟虹
柱傷孫がだんだん越して行き　朱玉
予定表折角作って見忘れる　美代
人心解れば付き合い楽になり　茂章
飯事のパパも単身赴任とか　嘉
楽しみに描く絵度が過ぎ目まいする　姫女
一人だけ乗せて過疎地にバスは着き　好花
一粒の泪男を惑わせる　はる子
有難い法事のお経犬が吠え　永楽
それからと肝心な事言いそびれ　客遊子

川柳後楽　従野　健一報

ゆきつくとこは結局海になる　草風
鈍行の余生に停車が短すぎ　たけ志
回り道になっても真直ぐに生き　浄美
合鍵へエプロンしのばす紙袋　美智子
結局は折れて一家は丸くなる　健一
横浪三里テトラポットの中をゆく　義親
時々はパントマイムの夫婦です　拓治
時の流れを静かに見守る羅漢像　哲郎
言い訳が嫌い途中下車をする　正秀
よその子も叱られる強い母の愛　金吾
単純な性格暗示にすぐかかり　佐加恵
苦しみを自己採点でまだ動く　博友
公平である筈雑魚の群れに入り　文平
矢印はもう探すまい余生の身　柳五郎
仕切り直し男にまったのない勝負　桃風
更生の涙真珠より美しい　青銅
人生の極意を読んで気が変わり　吟平
父ちゃんの音頭で一家右を向く　玉水
飼犬の自由鎖がついたまま　鮫虎狼
貧乏神わが家へ自由に入り込み　秋月
晩酌がうまい仕事のある限り　照路

川柳東大阪　森下愛論報

心ではもう許してるめがね拭く　孤舟
許された日は雨だった花菖蒲　作二郎
灯を上げて今日一日の許し乞う　頂留子
男ですときに許せぬこともある　慶三
銀行がピンチを見抜く決算書　二南
初めてのピンチ実家へ泣きに来る　美子
危機好機背中合わせを肌で知る　庸佑
ピンチ切り抜けて男の顔になる　雀踊子
公園の隅っこキューピットが眠る　恒明
公園にまで浮浪者は拒否される　文秋
年寄りの愚痴公園の隅に捨て　喜風
公園を斜めに越えて医者通い　勝美
悪女にはなれぬ猫好きの女　真柳
出る度に咬まれて帰るうちの猫　柳宏子
鈴のない猫が集まる塀の上　雅士
やわらかい寝息へ猫も添寝する　愛論
こだわりをみんな許すと山笑う　隆
大屋根に今年は双子の鯉を上げ　章久
貧しさを語りつづける低い屋根　湖風

岸和田川柳会　植山　武助報

姉ちゃんが花嫁さんになる仕度　浪速子
花嫁の仕度へ父の浮かぬ顔　小紋
仕度してルンルン気分で待つデート　こう
人波に見え隠れする父の背な　恵空
後姿が母に似ていた人違い　武助
うしろ姿見送る貸した悔い少し　初太郎
姿見にかくした年がうつってる　冨志子
知らん間に体形変える肉がつき　みよ子

佳句地十選（前月号から）　片上英一選

路地裏に曲ってからは酔うている　鮫虎狼
列島に地響き立てて友が死ぬ　完司
だまし舟　母は笑顔で乗って来る　湖風
体面を捨ててておかぬにお辞儀する　慶三
占いに溺れて寒い耳である　寿美
漢方が効いてオナラの音を出し　しげお
脇役がかいてる汗はほんものだ　保州
トンボ羽化かすかに露の玉揺れる　萬的
薄味に慣れて無口なあばら骨　千歩
ベテランに会えば無口な人である　〆女

母さんとうしろ姿ですぐわかり　一弥
期待したほどには痩せず街は秋　文
満場の中でもわが子すぐわかり　すみえ
少々の無理好調の波にのせ　天笑
好調が続きすこし過信する　月子
好調なおんな離婚を考える　萬的
名簿にはない山村に独り住み　希久志
お年頃名簿でみつけ電話鳴る　けい子
名簿では想い出せない顔があり　白光子
振仮名をつけて名簿の順が出来　二南
名簿から消えた男に貸しがある　甘平
古ぼけた名簿私の玉手箱　ひで
同窓会名簿でコネをつけにくる　柳宏子
寄付金の額が名簿の順になる　狸村
流出の名簿で揺れているBANK　通彦
名簿には味方ばかりでない選挙　さよ子

倉吉川柳会　渡辺菩句報

目立たないうちにあわてて式挙げる　和枝
汗だくで地図にない道探してる　久子
遊ぶのも勉強と言ってにらまれる　康志
父の流した汗は一生計れない　喜美子
炎天の蟻に叱られ腰上げる　柳風
富める国貧乏神も来て遊ぶ　独歩
遊びではないよ溺れているのです　とみお
あわててもどうにもならぬ癌告知　満春
たましいを揺らす遊びが癖になる　千代
山陰に住み生涯の雨宿り　ひろし
汗の似合う顔でいようと思います　京子
遊ぶのが好きなともだちばかり来る　完司
いくたびも慌てたことのある財布　荒介
遊びなら笑って許す人殺し　次男
歯が生えた一人遊びもできました　御前
あわてないつもりでガス栓忘れてた　秋女
蟻もにんげんも空飛ぶ夢を追う　瑞枝
背信の心を癒す小糠雨　ゆり子
雷雨にも瞑想止めぬ石地蔵　雄々
あわてるとゲートが玉を通さない　秋人
夫の汗宝物です真珠です　幸苑
遊び事立派に教える親もある　千代子
熱帯日六日つづいてやっと雨　菩句

川柳高知　川竹松風報

思春期がこうも違うかひと昔　春童
これしきの酒によろめくのも齢か　佳風
今は幸せためらい傷が一つある　和広
城山へ揺れるリフトにあるスリル　竹萌
湯加減を問う人もなし電化風呂　功
自由化を嘆くミカンと米の出来　朱坊
どの道を行けば明りが点る道　千恵子
嫁予約手付け納める結納日　一求
半分は亡夫に聞かす独り言　菊野
日銭よむ隣で利息弾く音　高重
ゴンドラへ幸せ信じ乗る二人　有佳
合格をしてから神と縁が切れ　清子
野辺に咲く花に気のつく定退後　野風
宝石のゼロを冷たい目で数え　松風

おっぱこ川柳会　松村迷観子報

家の顔母の笑顔が生きてくる　マサエ
すきなこと言うて家柄かさにきる　スミエ
マイホームあやかりたいなカタツムリ　放任
先祖からかあちゃん強い家系です　ひかり
思い出を秘めた生家に他人住み　迷香
外食もよいが我が家の温い飯　白柳子
ライバルの家よりちょっと高くする　明人
嫁に来て家と一緒に年をとり　よしみ
頼りない二人で建てたマイホーム　かおり
稲妻が家の中まで入り込む　いさむ
地価上り自分の家は夢となり　迷貫
先代の家が過疎地でねむりこけ　吟笑
涼しさに模様替えする家の中　チカエ
おふくろの味血圧症の家系継ぎ　迷観子

久世川柳クラブ　二宗吟平報

母の日に亡母に供えるカーネーション　伊久栄
しきたりを巧く裁いて来た茶の間　山人
煙草の輪ながめじっくり策をねる　ふさえ
はめられた口輪で腹をのぞかれる　吟平
趣味の輪の優しさに生き今日の幸　江山
捨てられた小猫囲んで輪が解けず　恒心
流行歌とり残される歳佗し　半仙
洗い物鼻歌の出るいい日和　美恵子
音痴程拍手大きいバスの旅　志重
赤トンボ背負うた孫と歌いつつ　秀香
御機嫌の軍歌は父の青春譜　甫正
八十路とは思えぬ声の安来節　保恒
麦と兵隊歌って征った日を想う　邦人
短寸の家系疑う子の背丈　賛平

三幸川柳教室　桜井千秀報

仲間には医者と坊さん揃ってる　正雄
花博へ仲間ひとりを置き忘れ　道子

三の矢を放つ仲間がいてくれる　三千子
荒磯の波は男の音で打つ　結実
調子よく相槌打てぬまま別れ　千枝子
終止符を打った日記のひとり言　当代
頬打った手に哀しみがへばりつき　孝子
愛の鐘打って明日を契りあう　精子
釘を打つ愛がぐらつかないように　靖子
真っ直ぐに打ってゆるがぬ父の釘　(中)幸子
句読点打って話せばわかること　和子
打ちごろの球を返してくれる父　保州
妥協心欠けた男に顔がない　親蹐
妥協した時から五月晴れになる　(松)幸子
天秤にかけると妥協すぐ出来る　千秀
焦点をずらして妥協する余生　敬子
手と足を組んで妥協のない構え　朱夏
妥協した私を責めているわたし　公子
点と線結んで妥協する手立て　芙美子
どう見ても妥協できないピカソの絵　又好
妥協せぬ夫が見せた底力　由梨
嫁姑いずれ妥協の傘をさす　桂香
妥協癖ついた歯車かみ合わず　美子
サバンナに自然淘汰という妥協　茜
妥協せぬレールを貨車はひた走る　高夫
疲れたとパパは十八番でごろ寝する　玉枝
旅疲れかくして嫁にありがとう　美代子
虚栄心強い財布にある疲れ　みね
疲労した顔をレンズは見逃さず　鉄治

南大阪川柳会　中川　滋雀報

母は心に何でも入る箱を持つ　楓楽
くじ運の悪い女が覗く箱　冬葉
亡父の声聞きたくて出す硯箱　恭太
重箱の隅に姑が住んでいる　勝美
叩いてもびくともしない亡父の箱　憲太郎
募金箱人の心の奥を知る　岩信
まっさらの心で街に来たんです　恒明
活気ある街であくびの出る仕事　度
ゴミのない街に拡がるボランティア　柳伸
通勤もローンも長い街外れ　凡子
夜の街自由がほしくなる小ゼニ　雀踊子
磨崖仏までの青葉が闇になる　作二郎
馬鹿騒ぎ心の闇を深くする　柳宏子
闇の夜もあるぜとおどしかけておく　文秋
手さぐりへ益々深い森の闇　寿美
忍耐を試す暗闇かも知れぬ　シメ子
闇の中に居るから闇も分からない　千梢
楽させてもらって足がなえてくる　奏月
平行線のかたちで楽を追いかける　智子
楽な日はなかった母の束ね髪　滋雀
母さんに楽をさせると言うてくれ　庸佑
気が楽になると手足がそむき出す　頂留子
楽隠居なんにもさせてくれません　覚然坊
淋しさを言わねば気楽一人住む　トミ子
生活が楽になったか美しい　久子
ひび割れを修理しながらまだ夫婦　外吉
口下手な割に世話焼き止められず　萬的
割り算の端っこに居る遺産分け　章
割り算で済む様な話もおますんか　凡九郎
割り切った目で見つめてる処世観　しんじ

佐川川柳会　赤川　菊野報

地平線太陽燃える瀬戸の海　妙子
おふくろの大きな傘の中にいる　恒子
空模様持ってゆけよと傘が言う　春童
飲みにゆく傘を勢いよく開ける　佳風
くるくると傘を回して通せんぼ　千恵子
鍵っ子に迎への傘がうらやまし　健二
注文をつけて無い袖振ってみせ　功
何も彼も注文通りになるこわさ　菊野

川柳泉尾　吉川　寿美報

人情がまたひとつ消え寛美逝く　(寺)文子
うれしくて紐がほどけた顔になる　途子
スコールを女の傘で凌いでる　マリ子
心まで見すかす今日の三面鏡　シマ子
蝶ゆらり錯覚だった花畑　美子
この先は言わぬが花を聞きたがり　シメ子
酔い覚めて男の闇がまだ消えず　弘子
梅雨あけを待っているのは広い海　洋子
酒の上と言わせませんよこの大事　淑子
女房より酒と心中するつもり　トミ子
詫びるのに酒の力を一寸借り　伴子
説法のあとに美酒なる般若湯　一枝
日韓の乾杯にある血の嵐　美南子
妻パート大きな顔して酒を呑み　和子
おいしかった空のお皿が言う答　悦子
空っぽも捨てるに惜しい洋酒びん　みつ子
空っぽの銚子を振ってかくし芸　敦子
空っぽのポッケに夢を一つ入れ　靖子
空っぽの壺を磨いている余生　美代子
六根清浄どこまでなれる空っぽに　はつ子
素踊りが大きく見える芸の幅　葉子
応援をこおどりさせたロングパス　可愛

昭和一桁テンポ外れるジャズダンス　美津子
踊り疲れて一人芝居の幕は閉じ　あさ子
月満ちて踊りはじめた竹人形　ヒロ子
黒人の勝利の踊り火のように　恵美
差押えされて空っぽから八起き　白水
空っぽの財布邪険に扱われ　(中)文子
サラダ大盛おんな独りの贅とする　寿美

川柳塔わかやま　牛尾　緑良報

ボスは一匹いつも命を張っている　緑良
振り向けばヒントをくれる影法師　保州
一歩退く勇気おとこの視野がある　忠雄
一匹が走るつられてみな走る　柳宏子
黒船屋の猫いっぴきに憧れる　桂香
男一匹今日はひとりの酒を酌む　萬的
一匹の狼を飼う山の神　(横)忠愿
また一匹にしてしもた金魚鉢　紀久子
一回り大きい金魚だけ残り　千寿子
誕生石ほしくてヒントで当てさせる　紀美女
街角の風はヒントを連れてくる　正博
異常気象神が与えたヒントかも　鉄治
古代解くヒントを抱いた欠け茶碗　武雄
追伸のヒント解かぬば負けになる　克子
生きて行くヒントを探す旅に出る　寿子
返す言葉へぬくいヒントが添えてある　英子
パズル解く鍵はいつでも妻の手に　三千代
戴いたヒント呑みこむお茶を飲む　照子
雑談の中に潜んでいたヒント　裕美
日傘くるくる火種が風に逢いに行く　輝子
生かされる火種は神の掌の中に　アサ
引き際を知らず丸い絵が描けぬ　高夫
影を引く影はぬけ殻かも知れぬ　三男
退き時を知っているから慌てない　静代
その引く手さす手も無形文化財　登志代
一回は引いて打診をして見よう　公子
汗引いてそれから人間らしくなり　結実
火の車引いてた頃を笑い合い　栄美子
引金を意識弱者の椅子に居る　瑞穂
引越へ神様哀れ縛られる

西宮北口川柳会　林　はつ絵報

女文字開くとバーの請求書　正坊
大津絵の雷さんは男前　武庫坊
胡桃ころころ老いの掌を逃げたがる　冨久恵
捨て場所に困る秘密が一つある　諷云児
寝転んで見ればモナリザ泣いている　いわゑ
冗談が言えぬ明治の父の靴　光代
三歳児答に困る事を聞く　園歩
雄々しくも反論を吐く青リンゴ　〆女
平凡に暮して困る事が無い　白渓子
気の多い魚座の性で上滑り　圭坊
解体修理仁王が床に転ばされ　萬的
円高で困り円安で又困り　杜的
負けて勝つ雄々しき根性芯を持ち　春蘭
外は雨耳鼻科で診察待っている　保蔵
困らせて愛の深さを確かめる　てる
川下り雄々しい櫂に惚れてくる　香子
よく降るなと後は黙って二人きり　みつ子
生粋の味受け継いだ京料理　きよ子
雑踏の中に孤独を捨てに行く　トミエ
雷も孤独だと知る雨宿り　森子
転ぶたび優しさを増す姫だるま　よし津
花博の疲れやっぱり家がよい　正一
遠雷を予知するだけの犬がおり　富喜子
父親の雷に慣れ反抗期　江美
弾ませる旅でひろうたいい出会い　美智子
気まぐれで強気な毬はよく転ぶ　静子
転んでも父は手を貸す時を待ち　宣子
転落のドラマ完了しておこう　年代
雄々しさに惚れてそれ以後ずっと妻　石舟
均等法雄々しく見せる肩パット　英子
雷神も戸惑うている酸性雨　芳子
正論を持つ雷が恐ろしい　嘉矩
十指みな意見が違うので困る　佳秋
紅一点の女にリードされている　紫香

高槻川柳サークル卯の花　辻白渓子報

字も文もお粗末これも親譲り　杜的
居心地がよいのか犬までよく寝てる　萬的
居心地は心の通う嫁姑　(松)芳子
雨の輪にはしゃぎ過ぎに水溜り　英子
最高の居心地と知る旅がえり　静江
お粗末な答弁突いて審議拒否　波留吉
税務署が粗末にしてる消費税　鬼遊
居心地の悪い夫になりました　礫
嘘ほんとほどよく混ぜた五目飯　諷云児
点滴へ面会五分だけにする　石舟
青田青風くらしの粗末考える　作二郎
北向きの書斎が好きな父のペン　正坊
そっと髪撫でて面会待つベッド　(河)芳子
当分は粗末にしない婿養子　紫香
泥の川海に流れてよく眠る　恵美子
ワープロの果し状とは卑怯者　佳秋

転勤のたびにカルテを置いてくる　正　恋
天下り居心地のよい老後です　武庫坊
寝たようにない忙しい夢ばかり　年　代
梅雨明けは祇園祭の笛袋　圭　坊
気まぐれに妻を誘った菖蒲園　とおる
ドラマにもならない娘ひとりいる　真　笑
夫婦旅骨の軋みもいつか取れ　百合子
三越にしては粗末なお中元　しげお
花博に運動不足を責められる　スミ子
気に染まぬ心で字まで乱れ出し　花代子
面会に呼ばない人がくる不安　美智子
他人の眼でソンナに判る僕ですか　凡九郎
クッションの深さが居心地悪くする　京　童
酒ぐせをしっているから誘えない　白渓子

尼崎いくしま川柳会　春城年代報

戦争の語りべになろう今　平和　栄
シャボン玉平和は脆い世界地図　石　舟
古色蒼然平和をまもった鬼瓦　萬　的
平和です三度のごはんいやと言う　保　蔵
のように見える平和なんて嫌　凡九郎
赤い星壁を崩して呼ぶ平和　英　子
日記帳白いままでよし平和　杜　的
神風を信じた悔いをもつ平和　正　一
ありました往復ビンタというしおき　敬
往復ハガキヘストレス溜めている返事　園　歩
往復は深い雪です郵便夫　伊三郎
往復も同じ運ちゃん山のバス　紫　香
ぴったりと似合うお世辞の京都弁　文　夫
風呂敷からポロリこぼれた世辞ひとつ　梨　枝
路地裏のお世辞を言わぬ店が好き　佳　秋
ピンボケの写真上手に賞めておく　芳　子
見えみえのお世辞笑って聞き流す　正　子
度が過ぎたお世辞に腰がだるくなる　武庫坊
うまいもんだと妻のお世辞を聞いている　年　代
花柄でソプラノ猫をほめにくる　作二郎
雨しとど悪い噂を聞いている　静　夢
梅雨空の合間を縫ってふとん干し　堯
子が肝臓くれと言うたらどないしょう　みち子
刃こぼれの鋸がさびてる道具箱　定　人
約束を亡母と自分にしかとする　〆　女
カルガモに道を譲っている平和　歌　子

尼崎尾浜川柳会　春城武庫坊報

握手したマドンナの掌が柔らかい　夢之助
手袋を脱いだ握手は貴方だけ　佳　秋
握手から座の緊張が解けてゆき　昌　子
激闘を前に握手で西東　敏　之
握手した肩が泣いてる嫁ぐ朝　澄　子
腹の底隠し互いに握手する　紫　香
難聴の耳を笑顔でカバーする　弘　治
条件をみんな呑んでる父の耳　歌　子
ささやきを何時も聞いてる猫の耳　義　嗣
時どきは補聴器外して聞く世間　十四郎
眼鏡もう耳にいらないコンタクト　六　浦
耳たぶに熱い思いが吹きたまる　美智子
イヤリングだいじな耳に穴をあけ　保　蔵
雨コート顔に映えてる蛇の目傘　いわお
また一つ傘買わされる雨にあう　す　み
癌告知せず美しい嘘とおす　石　舟
子をあてにしてない墓の赤い文字　定　人
肩書をはずすと似合うループタイ　武庫坊

川柳塔鹿野みか月　土橋蛍報

花茨蓙に老いの身かるい夏の宵　明　美
ピンチを越えた男にナマズ髭がある　喜与志
夫婦のピンチ子供一役買って出る　二　代
対角線にいつもピンチの顔がある　美ッ千
虫が死ぬこれは地球のピンチです　孔美子
蝶々が触れて西瓜が受胎する　富　恵
新築はとにもかくにも褒めちぎる　覚
ひと夏の恋で終った蛍狩り　美佐子
大ピンチきょうの宿題やってない　小六尚　子
ピンチにはご先祖さまに掌を合わせ　敦　子
ミニを着て母さん夏の裾まくり　保　子
善人に触れていた雨虹になる　八重子
苦しみを山積み人に触れもせず　菊　乃
独禁法触れるCM客をなめ　小　生
成績に触れると嫁が口きかぬ　静　生
女に触れて飯が食えなくなりました　はるお
愛だけで生きてゆけぬと知るピンチ　正　道
わだつみの声が聞こえる真夏の喪　幸　代
持ちまえのねばり強さでピンチ抜け　早　苗
農政のピンチへ案山子きっと泣く　洋　々
昭和史に触れるときのこ雲に合う　忠　良
爽やかな選に触れてる酔っている　芙　美
あの方に触れた手だから洗わない　和　子
太陽に触れる野花は美しい　百合子
宿題に追われた夏がやってくる　公　弘
月見草咲いてひこ星姫を待つ　野　草
蟬時雨僕には僕の夏がある　小　鹿
病木はこの夏越せぬかも知れぬ　隆　風
ピンチからのがれ仏に掌を合わせ　房　子

さりげない素振りでピンチ気付かせる　三千代
愛ピンチ苦いコーヒー飲んでいる　くに子
新築の畳に虫が居ついている　夕　峰
新築もすんで表札りんと掛け　きみ子
新築を祝う花道蝶も舞う　智恵子
赤外線に白凜凜と立ち向かう　汲　香
こけて立つ勇気をお前からもらう　しげる
目疲れや背抜き狂女の夏舞台　諷　人
脱ぎ捨ててそれから夏がおもしろい　螢

岩美川柳会　羽津川公乃報

ふる里の水車も四季の唄うたう　單　車
御詠歌を唄うと孫がよく眠る　美代子
持ち唄に貝殻節を一つもつ　公　乃
熱心に聞いたズボンの深い皺　照　女
熱心に木魚叩くと救われる　大　漁
熱心なあまりの手出し徒となる　芳　江
するめ売る女も参加じげおこし　民　子
切り札の一つ冷凍庫に詰める　忠　良
冷戦で夫婦の会話子に頼む　さなへ
油染む帽子は亡夫の勲章だ　美恵子
麦藁帽かぶって駅で待っている　螢
貧乏に追われやさしさに欠ける　由多香
蛍飛ぶきっとやさしい闇だろう　幸　代

城北川柳会　神夏磯典子報

早起きの今日のしあわせ鎌を研ぐ　春　雄
幻のように月日が移り行く　輝　子
軒先に恋が芽生えたにわか雨　敏　子
雨空へ願い届かぬテル坊主　きみ子
水たまり面影映す雨上り　寿美礼

生きている今日を大事に積み重ね　登美子
新築の床に皿絵が美しい　久留美
長寿法知らず長生きしています　静　子
老いの身に予定ぎっしり日々多忙　午　郎
言い訳は片袖濡れて通らない　八重子
人歩む命を刻む日と知らず　文　子
流行を追って私も花粉症　ふ　み
灰皿が溢れて議論まだ続く　白　峰
ヘルメット持って花博見にゆこう　ただし
迷わずに決めた私の強い運　温　子
疲れ過ぎ眠れぬ夜に百合開く　昭　子
老いらくの夢は語らず地味に生き　きくゑ
汚れゆく水も空気も人間も　勝　美
浮気刑これは時効が無いらしい　新一郎
笑わせて泣かせて寛美の五十年　静　歩
叩き大工の釘を曲げてる節の意地　公　一
父の日に娘が呉れた鯛のえさ　秀　夫
好評で日延べしました蔵ざらえ　史　風
あじさいの浮気ごころをたたく雨　テルミ
皿洗う音に心を覗かれる　典　子
焼芋が孫との距離を近くする　倫　子
旬のもの添えて一と皿生きてくる　満津子
雨降って固まってゆく夫婦道　純　子
貸農園の汗が実った旬の味　達　子
自閉児がやっと笑って保母が泣き　右　近

川柳岩出　小倉アサ報

修羅の門くぐれば女強くなる　精　子
子をさとす親の姿に嘘はない　昌　子
職人で芝居の出来ぬ父が好き　忠　雄
暮し振りあなたの姿変えていく　和　子

水門の扉開きで初夏を知る　義　美
天安門本音建て前闇の中　永　年
我が姿中身だけでも若く見せ　正　直
根来寺の遺跡を守る仁王門　英　子
二度びっくり後ろ姿は天下一　喜　市
姿見は心を撮すものですよ　千代子
横車押すなと父の声がする　春　子
門前に美事な牡丹咲かす人　愛　子
父の日も父は残業おそくまで　瑞　穂
良い姿勢若さの鍵は離さない　綾　子
思い出はうしろ姿の怒り肩　与呂志

川柳塔まつえ　恒松町紅報

先生が二の足を踏むPTA　満　江
片肘を張る子も先生傘に入れ　雄　々
先生が何人もいて菊作り　清　志
先生の字引きと違う僕の辞書　荒　介
マンガ家を先生と呼び時の人　登志子
先生と呼ばれるバカで有頂天　与根一
自分の出番作る男の正義感　雀踊子
外面がよくて出番は父の役　きみえ
いざ出番構えるだけの消防車　友　子
代役の出番生唾のどで鳴る　代仕男
名物は出番を待たず売り切れる　蘭　水
風鈴を去年の釘が待っていた　草　丘
風鈴に涼しい処聞いてみる　しず江
風鈴も坪百万の音で鳴り　鶴　丸
風鈴の下で言い訳聞いている　寿美子
間延びした対話風鈴埋めてくれ　多賀子
生き方を変える風鈴買ってみる　小　鹿
風鈴の音の数ほど風があり　たつみ

風鈴は寝相の話なぞしない　妻子
冷房に縁の風鈴忘れられ　幾子
みちのくの音をきかせている風鈴　秀子
札束を枕に昼寝してみたい　文子
昼寝中とドアに貼紙しようかな　みえ
昼寝の度に一里一里と近くなる　日枝子
花莫蓙へ自然の風で昼寝する　静恵
無口だが強い男のビール腹　房子
禁酒禁煙ビールは別ときめている　長三
夕焼けを見るとビールが欲しくなる　太泡
ビールは一本位と医者に言ってある　章峰
断われぬ性をビールに見抜かれる　叮紅

川柳塔とっとり　岩原　喬水報

エアコンの涼しさ愛がかけている　粗粒
涼しさがせめてとりえの田舎です　一歩
新人に悪い酒癖教えとき　喬水
森が枯れ環境悪化教えてる　呼風
教えてもまた繰り返し汚職する　砂山花
欠点を教えて逆に怒られる　圭一郎
耐えしのぶことを教えて母は老い　艶子
ライバルに困ったふりし裏をかく　友夫
仕送りに困った素振り子に見せぬ　旋風
困る事シャツにチャックが絡み合い　林太郎
困りごと話せば心軽くなり　一枝
困っても愚痴は言えない母である　秀和
肺癌が怖くタバコと縁を切る　侑里
名刀を持ち試し切りしたくなり　新風
切れ者で心を許す友が無い　俊路
捨て切れぬ野心で鬼と手を結ぶ　山人
悪の芽を切り傷口をあたためる　由多香

川柳塔唐津支部　久保　正敏報

背伸びばかりして足元を掬われる　ちよ
土のない真直ぐな道草臥れる　ふさ子
千羽鶴ただそれだけの千羽鶴　紀一
不老樹の青葉を染めし夕茜　喜久亭
返事してとび出してからの健忘症　治幸
居ながらに港まつりの花火観る　義美
裏表はっきり見せて磨り硝子　虹汀
悩み秘め人の笑いに声合わす　ハル
ぴちぴちと眩しく光る脚線美　旭恒
学歴で包帯をする首の皮　四郎
友と飲むときは時計がすぐ止まり　弘
年重ね寄りそう二人過去白紙　遊女
押入れの暗さ知らない子が育つ　高明
攻防に手に汗握る甲子園　剛司
観光の語り部も兼ね史探訪　朴竜
地曳網今日はレジャーの手と手と手　正敏

いさり火川柳会　尾崎三代治報

凍る手に心安らぐ傘ほしい　八重子
傘で顔隠して通るいやなやつ　三代治
アメリカの傘で平和な日本です　武士
天気予報信じた傘が邪魔になり　由多香
恋をして雨も楽しい傘をさす　豊子
いたずらな風が相合傘ゆらす　智恵子
人生の風雨に耐えた傘を干す　伊都子
味気ない男二人が傘の中　孝人

京都塔の会　松川　杜的報

真っ二つに別れ茶の間のTG戦　佳秋
終章へ書く字をじっくり選っている　杜的
Tシャツの胸が眩しい長女次女　欣之
少年はアトムと未知の旅に出る　福子
未知の部分が女の魅力かもし出す　武庫坊
未知数の新人を選るネット裏　正坊
未知数へいどみ少年眼が光る　萬的
未知だから星はいつでも美しい　紫香
未知数のある少年の瞳が素敵　礫
ある秘密語尾の濁りを意識する　求芽
言葉尻濁して心閉じている　葉子
言葉尻濁したままで済む見合い　英子
遺産分けそれから空気濁り出す　芳子
梅雨空は濁る魚がいそうなり　麗水
しまい風呂家族の濁り気にならぬ　栄
余ってる暇カルチャーへ埋めに行く　飛鳥
飼犬に暇の相手をしてもらう　白渓子
女房に暇を出したい時がある　諷云児
キューピット暇が無いのか来てくれぬ　圭坊
空白の多い手帖を持ち歩く　ただし
暇があると内緒話がしたくなる　百合子
その暇が貴重で鍵をかけておく　年代
いくつめの坂であえるか母の虹　〆女
無理な願いは困ると春の仏さま　達子
言訳をせずにいるには胆がいる　はつ絵
老眼鏡むつかしい本置いたまま　しげお
拝観無料蝶は仁王に舞うて見せ　花代子
帰り道から耳飾りが重くなる　幸
紅茶色の温泉に透く足白し　水客

八尾市民川柳会　宮崎シマ子報

福祉とは別にぽっくり寺が混む　恭太

死なぬ程度福祉の金をもろてます　酔虎
一粒の涙福祉にどないです　隼人
手話通訳肩のうずきに堪えながら　春子
恥でない福祉に老いの掌を合わし　喜風
減税と福祉に燃えたスローガン　柳伸
古傷にふれず歓待して帰し　シマ子
歓待の冷酒は良し青葉風　章
見栄少し接待用にナポレオン　雅士
接待にあげまんの妻うでふるう　朝子
持て成しに酒池肉林という極み　隆
接待のサインを決めている上司　三男
接待をうけて遍路の鈴さやか　弘直
接待を受ける重味の床柱　しんじ
接待に出た娘の爪の長いこと　和子
友達と飲み領収書もらっとく　律子
喜んで行った接待落し穴　信博
毒舌を浴びてこころに厚い壁　冬葉
悪口を浴びる忘れられてはいまへんナ　凡九郎
かりそめの愛を流しているシャワー　重人
浴びるほど飲んでも父の空しい日　頂留子
降る星を浴びて別れを噛みしめる　一風
浴びるだけのんで割勘だけはらい　真柳
生え抜きの一人で火の粉浴びつづけ　柳宏子
木洩れ日を浴びて巣箱を翔び立ちぬ　幸枝
ひと風呂を浴びて爽やか釣しのぶ　勝実
わらび餅お前も暑いだろう二時　欣之
日盛りに飛車の逃げ道考える　栞
日盛りの飯場昼寝の位置がある　美幸
向日葵の首日盛りに太くなる　度
古い商家の軒日盛りの刻を耐え　泰
草も木もじっと動かぬ午後三時　晋吾

日盛りをユーカラ織の麦の波　しづ子
嫁ぐ娘へブランドタオル箱で積む　君江
露天風呂ギャルはタオルで隠さない　一志
八起きめを期待タオルはまだ投げぬ　宏子
タオル乾いて夫の出張つづいてる　夕花
日盛りに平和の旗が街を行く　美津留
日盛りは無罪女は黒くなる　悦郎

川柳ささやま社　遠山　可住報

献立を夫に頼み旅に出る　貞子
根性の背中で折れた矢が残る　とみ子
この好意いつかはきっと返したい　靖子
旬の味ピリッと生きる夏大根　ヒサ子
座ぶとんの好意が温い無人駅　和子
献立に嫁の笑顔が添えてある　つや子
二枚目の亭主でいつも袖を引く　百合子
ライバルの好意が読めぬ日の焦り　テル
一城を蟻の根性が食いつぶす　冨美
給料日とてもやさしい顔に化け　美智子
根性を見せて耐え抜く坐りだこ　文平
ど根性やっぱりわしの子と思う　越山
小卒の父に根性仕込まれる　可住

わかあゆ川柳会　松本はるみ報

五月晴れオープンザドア待ってます　恵美子
窓あけてあれは五月の足音か　はるみ
いい話五月の風がもってくる　みどり
のぼせてものぼせてもああ振り向かぬ　歳栄
たんぽぽへのぼせを少し捨てにゆく　民子
のぼせずにかまえてみようもつれ糸　鈴江
シーソーの上で冷たい風に会う　かつ子

シーソーゲーム見ている方は手をたたく　ヒデ子
恋人が出来てケロリと五月病　好栄
ある時はシーソーの上へ置きざりに　聖子
人の世や若葉の中で人が逝き　智重子
若葉の頃もありました皺の数　健歩
青葉して膨れっ面の山となり　北斗
鶏頭が親父の墓と背くらべ　悦良
せいいっぱい生きるつもりの若葉です　世似
シーソーに明け暮れ円もくたびれる　清泉
ニュートンの説をシーソー信じこみ　白汀

川柳塔きゃらぼく　政岡日枝子報

言葉などいらぬ絆で結ばれて　ゆき
死んだふりしても飲み込む一と言葉　花子
太陽に出会うと言葉動きだす　ふみ
言葉尻つかまれそうで身をかわす　千春
お別れと言葉時々考える　田鶴
深呼吸しても鼓動が収まらぬ　瑞枝
息ころして花のささやき聞いている　玲子
落椿まっ赤に散って虫の息　恵子
ため息も出る今日も雨雨雨　八重子
息子よ息のあるうちに帰ってくれ　保子
沈丁花春の息吹きをたしかめる　寿々子
息づかいやさしゅうなって嫁にゆく　やえ
窓あけてみんなと同じ息を吸う　日枝子
人形に息が通ってからの渦　より子
アヒルの娘きれいになって息をのむ　てい子
春の息去年の位置で菊芽ぶく　登栄
二人三脚の息をたしかな物にする　豆弥
街病んで自分の呼吸のきな臭し　荒介
千年の杉しんと吸うしんと吐く　千代

翠洋会　中西兼治報報

嫁よりも一足先に来た荷物　兼治郎
子の荷物にならないための万歩計　絹子
屋根裏に物入れついて車庫がない　宣司
嫁の荷の中でペンツが見栄をはり　石舟
カナうってもろても意味が分らない　千歩
一徹と頑固荷物に明治の子　真
噫地球ヒトが重荷になってくる　英一
平仮名の〃おんな〃となった夜の宿　恭昌
お荷物になって済まぬと塩こんぶ　正雄
年老いてだんだん妻の手荷物に　すすむ
ばあちゃんの名前は仮名でチャーミング　さとみ
お荷物になって行くよりお留守番　春子
がまんした妻に財産皆こない　東雲
堪忍袋繕いながら生きてます　楓楽
顔色を変えぬ我慢の膝がゆれ　為子
よろこんでくれる荷物で重くない　良江
終生の重荷を背負う車事故　佳秋
ハナハトマメマス初めて覗いた字の世界　綾子
宅急便親馬鹿ばかり多すぎる　みつ子
我慢して貯めた黒字を攻められる　光子
お荷物になりませんわとついてくる　正坊
新婚の夫婦荷物の中に寝る　登志実
嫁入りの荷がむちゃくちゃにした家計　いつを
かたつむり重い荷物と思わない　鬼遊

川柳はびきの　塩満敏報

悩みごと多い垂れ目の羅漢さま　隆
あれば邪魔無ければ困る一円貨　昇
還暦はまだまだ若い長寿国　志洋
うだる陽も笑顔さわやか赤ずきん　たけし
大袈裟な心配をする下心　二南
おはようと良いお天気の散歩道　蛙声
カビ臭い水が浪速へ夏運び　みつこ
虹の橋渡る心配たんと持ち　志津江
どの顔も美味そうに飲む生ビール　利武
ロシヤ語が英語と四つに組む会談　かつみ
寝床のなかに飛蝗を入れたのは誰だ　一屯
くすり指世間の風に耐えている　ケイ子
パチンコで無聊なぐさめる粗大ゴミ　忠宏
毒だとか鬼だとかごめんねアザミ　伴子
毛虫出た心配している若葉かな　ぎいち
口だけは心配そうな見舞客　健三
嘘一つ混ぜて記憶を手操る老い　与呂志
消しゴムで消せない様な心配で　敦子
ここでまた会いましょう寺の鳩　繁男
いたずらをして見た後の大やけど　悦子
三途の川にコインを投げて戻ろうか　絢子
いたずらに押すかもしれぬ核ボタン　美津子
行くところ人も車も角を立て　一枝
人生を過去も未来も霧流る　胡村
馬券買う前にコインで運試し　(川)隆
三代を生きて平成まだ生きる　義一
病人のように西瓜が打診され　泰子
雨蛙コメの将来心配し　敏

豊中もくせい川柳会　田中正坊報

シャワー浴びきっぱり話するつもり　(小)英子
今シャワー出たばっかりに要るタオル　凡九郎
雑念をシャワー綺麗に流し去り　悟郎
シャワー浴びビールあるかと亭主言い　唐麥木
シャワーでは好きな浪曲うなれない　石舟
遊園地迷子に持たす風車　〆女
園児の絵ママの指先みな赤い　武庫坊
桜の園本棚の隅に積んだはず　明吉
紫陽花の寺あじさいに迎えられ　杜的
お帰りと女将は如才ない顔で　蕗児
迎えると走って改札抜ける孫　紫香
起死回生迎えた人もまあまあで　吉太郎
大正昭和平成迎え父達者　福一
勝ち力士迎えて肩にふれたがり　白渓子
ストーリー変らず今朝もサラダ盛る　正坊
サラダまでうるさい男の台所　きく子
孫娘つくるサラダに慣らされる　登志実
海老サラダうれしい事を聞いた日に　(玉)英子
サラダ彩る我が菜園のミニトマト　圭坊
雨にきく一絃琴を沙羅の寺　登代子
老の字がだんだん増えてきた新聞　明光
ベルリンへ壁のかけらを買いに行く　博史
筋道を通して壁に突き当たる　諷云児
彩彩の企画夢みる車椅子　つえ子
昼寝していたい時刻に会がある　寿美子
当駅止め他人行儀に戸が閉まる　萬的
長い橋ポツリと本音ころげ落ち　しげお

聴障川柳　稲田豊作報

隠居部屋に苦労話が積んである　豊作
わだかまり誰に話そう川の水　和江
筆記にて聞かしておくれ良い話　健太郎
スカートを子に引かれてる立話　たみ
同窓会　昔の話生きていた　静子
話上手は白を黒に塗りかえる　みつる

金の要る話に人は減っていく　三香
訥弁なあなたの話信じます　柳香
生かされる話で洗う心うち　真女
横向いて話を聞いてる反抗期　八恵子
欲の世は勝った勝ったが良い話　珍妙人
ユーモアが心に残る今日の席　一晄
拾われる空カン捨てぬ善をしよう　文古

川柳ねやがわ　高田博泉報

ランバダの若さ熱風巻き起し　藍子
鰻焼く炭火をあおる渋うちわ　一鬼
親父より先輩の言う事なら聞ける　勝美
先輩のおこぼれを待つ猿の群　高栄
筋書が見抜かれていた猿芝居　権太
懐の深さを見抜く旅の宿　冬葉
女の香すぐに見抜いてしまう妻　菜月
涙もろい私に似合う波止場の灯　波留吉
先生を肴にはずむ同窓会　一笑
もう父は居ない夜の爪を切る　亜成
熱風が天安門を吹き抜ける　三郎
先輩の句集に恋の香も匂い　かすみ
熱いうどん注文をする梅雨の冷え　シマ子
病むベッドとっくに癌と知っている　雅文
ひまわりが熱風受ける原爆忌　礫
先輩にかなしいことを打ちあける　良三
バランスを母がとってる凧の糸　吉之助
人生をちょっとおいしい煙草にす　三千子
熱風に耐える天職だと思う　光子
先輩を越える一つの恩返し　亜也子
見抜かれたらしい急所をついてくる　静江
大安の熱風エアポートが揺れる　勝一
先輩が怒り血圧あげにくる　一芳
見抜かれた作戦あっけなくつぶれ　小路
下戸は下戸なりに詳しい京名菓　あやめ
底辺に棲んで政治の嘘見抜く　度
心身のバランスとれてペン走る　庸佑
手の中を見抜いておくびにも出さず　柳宏子
熱風の中にも野仏笑み給う　紫香
当分は居候しそう姑の姉

サークル樺欅　大澤三四子報

七夕の夜はカササギよ橋になれ　剛也
七夕の願いの的になる財布　澄子
振子時計亡父より永く動いてる　逸枝
久しぶり手を振る友もはしゃぎけり　武子
午前さま尻尾振るのは小犬だけ　千松
セールスの嘘と知りつつ話聞く　恵峰
サイコロを振って人生戻られず　光梅
大胆な嘘っぷりまで父親似　昌子
愛してるあなたの嘘が気にかかる　英楽
母来ても父さんすぐに呼びにくる　千代女
七夕の去年と違う星の位置　泰子
沖の声が呼んでるように精霊船　薫風
黄昏は子を呼ぶ声に母想う　雅子
恋人は願いをそっと七夕に　三四子
呼び声の甘さに油断してしまう　美緒
七夕の笹に重たい願いごと　今日子
二つのマルク一つになって不安呼ぶ　智恵子

打吹川柳会　奥谷弘朗報

はったりの声がときどき高くなる　蛍
はったりを効かせて妻を黙らせる　幸子
はったりがぴったり似合う豆しぼり　静歩
はったりが過ぎて抜き差しならぬ顔　妻子
あれははったりだろうか薔薇の赤　節子
はったりの大風呂敷も彩が褪せ　孝恵
はったりで通る大股で歩く　柳風
正直耳にはったりはとどかない　幸枝
鏡にも俺のはったりかけてみる　邦俊
はったりを言えぬ私の日日確か　佳女
はったりを塗った仮面がはずせない　早苗
はったりを効かせピンチ切り抜ける　節枝
はったりで天下国家は治まらぬ　明治
はったりのために傷つく人もある　みほの
僕のはったりが君には通じない　小鹿
口下手の輪にはったりのねじを巻く　ひさ子
はったりが過ぎて商談まる潰れ　玲子
はったりを効かす睨みがちと足りぬ　温子
はったりの鼻を時どきへし折られ　弘朗

堺川柳会　河内月子報

紀子さんのほほえみ消えることなかれ　薫風
初恋の人と転んだ傷がある　紀美子
好き嫌いなくしてくれた芋のつる　満洲
見え透いた嘘は黙って聞き流し　星子
耳すます眼鏡も少しきつい目に　文
人嫌いすると自分も嫌われる　東雲
クラシック聞くネクタイを選っている　武助
隣から気分を浮かすハワイアン　すず女
女々しさは消える煙草の輪を見てた　萬的
その時の気分次第と気をもたせ　頂留子
潮騒に夏の想い出聞いている　春蘭
一番好きで一番嫌いです自分　小雪

消えかける火種煽いでいる他人　凡子
樹液満ちて自分自身でいやす傷　かりん
人間のささやき貝はふたを閉め　千万子
一杯の気分で言った後始末　都楓
昭和史の傷を暗誦して入試　春香
足の裏土の温みが消えてゆく　あか里
仏壇のぶどうが一粒ずつ消える　彗梢
嫌われるほど金持ちになりたいな　柳宏子
愛想よく受付嬢に断られ　狸村
親切が過ぎて女に嫌われる　森子
二人の鼓動確かに聞いた角砂糖　泰子
朱の中へ朱に染まりつつ消えてゆく　一二三
文明が今日の地球に傷を彫り　月子
傷いえておっちょこちょいをくり返す　天笑
かあちゃんの傷にふれたら嫌われる　元紀
別れが嫌でサクランボを食べる　素灯
脛の傷かくし強気を崩さない　信博
気分次第上司かかえる不発弾　

川柳藤井寺　高田美代子報

背信の糸の長さが気にかかり　与呂志
お土産はもしもしカードにして身軽　伴子
乳母日傘で育って老後独りぼち　政代
生きている鼓動若芽と響き合う　和美
心の窓を開き薫風いれました　雅美
波風の立たぬ世界が来るだろか　ときお
もてるわけないのにもてて目がさめる　風来坊
波の花能登路旅行のカニグルメ　三郎
グルメなんて思いもよらぬ終戦後　寿美子
野良犬もグルメに飽きた繁華街　昭子
ダイエット旬のグルメが邪魔をする　繁男
ワニ料理食べてグルメと気取り顔　キミ子
豪勢なグルメ番組見てカレー　志洋
手枕でグルメの旅を追っている　信子
夏ばてのグルメが好む冷奴　治子
土井勝グルメの舌を狂わせる　修六
何よりのグルメと妻を思いやり　彩
父の日をグルメのパパは台所　つや子
グルメにも分らぬプロのかくし味　悦子
そわそわの理由はピンクの封書だな　一屯
生きるため家族数だけ鍵が要る　おさむ
飲むことも多忙の中に入れてあり　吸江
小銭入れ出し入れ多忙消費税　きよし
忙しく生きて病気が寄りつかず　淑子
蝸牛だって多忙の時がある　宗一
仕事しか知らない街の無表情　美代子
悲しみを多忙の二字が薄くする　婦美枝
三食に昼寝がついていて多忙　たかし
荒れた手の母は多忙を口にせず　森子
幸せは金にならない忙しさ　美房

南海川柳会　飯田　悦郎報

ウインクのわかるペットがついて来る　勝美
ウインクがとても上手な花名刺　重人
武器いらぬ平和な世界を願う母　真砂
使うてはならない武器を買う予算　柳伸
合鍵を渡すと妻は武器にする　悦郎
困難へ挑んで開く負けじ魂　しんじ
成し遂げた自信困難口にせず　度
困難に亡父のピンタ甦る　柳宏子
困難は覚悟赴任の台所　志華子
一般の通り相場で行くパート　信博
一般の眼は逃げられぬモンタージュ　覚然坊
一般の席でストレス我慢する　真柳
一般の席此処にはうるさいものも混じる　眉水
弁解に念を入れれば怪しまれ　東雲
苦しい弁解を笑うて聞いてやる　文秋
弁解はよそういつかはわかる筈　文
弁解をするから疑惑深くなる　庸佑

吹田市制五十周年記念川柳大会

とき　10月28日(日)　11時開場
ところ　吹田市文化会館　メイシアター
（阪急吹田駅前）
宿題　「気まま」　西川　景子選
「とぼける」　神前　朋義選
「軽い」　塩谷　幸子選
「陽気」　高杉　鬼遊選
「舞台」　森中恵美子選
席題　1題　当日発表　竹森　雀舎選
各題2句・13時締切（投句拝辞）
お話　鵜飼　蟻朗氏
会費　1000円
（粗品呈・各題秀句賞）
懇親会　2000円（句会終了後、同所で）
主催　吹田川柳会ほか

■各地句会だより

川柳塔わかやま吟社

若宮武雄

今年の夏も峠を越したとは言え厳しい日も続きますが、各地の皆さん、いかがお過ごしでございましょうか。

当吟社一同もみんな元気で、九月九日の二十周年記念川柳大会で各地の皆さんにお目にかかれるのを楽しみに、暑さも忘れて大会の準備に取り組んでいる最中というところでございます。

各地の皆さん、当日はまだ残暑も厳しいことと思われますが、お揃いでお元気で、ご参加していただけますよう、お祈りいたしております。

来る九日の二十周年記念川柳大会は、当吟社の「成人式」でもあります。この意義深い節目を迎えようとする今、吟社の生い立ちと現状のあらましをご紹介するのも無意味ではないと信じます。

▼昭和四十五年八月
　垂井葵水氏主宰、野村太茂津氏協力により垂井ビルで「川柳わかやま吟社」が発足。出席者十六名、投句者二名。

▼同　四十八年十一月一日
　垂井葵水氏が交通事故で他界される。

▼同　四十八年十一月
　野村太茂津氏が垂井葵水氏の後を継ぎ、主幹に就任。

▼同　五十三年十二月
　百号記念兼合同句集「あおい海」刊行記念川柳大会を開催。

写真・向って左から故香川酔々・垂井葵水・川口弘生の各氏と野村太茂津主幹

▼同　五十五年七月
　十周年記念川柳大会を開催。

▼同　六十年五月
　太茂津主幹古稀祝賀記念川柳大会を開催。

▼同　六十二年四月
　二百号記念兼合同句集「あおい海・第二集」刊行記念川柳大会を開催。

▼平成元年二月
　「川柳塔わかやま吟社」と改称。

現在、同人は太茂津主幹以下四十五名、誌友は約三百十名。月例句会の出席者は四十数名、投句者は同じく四十数名、といったところです。

なお、二十周年記念川柳大会は、西尾栞川柳塔社主幹の祝詞をはじめとして、錚々たる名士ばかりで、地方吟社主催の川柳大会には分を過ぎたお顔ぶれで恐縮の至りです。

当吟社の現状を、二十年前の発足当時に比べてみますと、太茂津主幹のスーパーマン並みの活動の結果、約二十倍という輝かしい成長ぶりです。しかし、急成長には何時しか必ず問題点を抱えた体質になりがちです。大会が無事に終ったなら、主幹以下同人一同の知恵で、成人後の「川柳塔わかやま吟社像」を求めたいと願っております。

柳界展望

集録―敏・武庫坊

★第8回夜市川柳大会は**8月5日**午後1時から堺市総合福祉会館で開かれ、各地から八十人が参加した。当日の天位句は次のとおり。

炎天の蟻の気持になってみる　小林　妻子

隅の一人はきっと仏の影法師　政岡日枝子

もしかして今捨てたのは柿の種　八木　千代

裸足で走る哀しいほどに自由なり　中島　夢成

粘りつづけて土に還った土人形　桜沢あか里

自我没却という泳ぎ方である　西尾　栞

雷にも死角があると知っている　池　森子

結婚をしたら腹いっぱい食べる　小島　蘭幸

口数の少ない父と花火待つ　中島　夢成

★第45回尼崎市文芸祭大会は**9月2日**午後1時から同市立中央公民館大ホールで開く。当日は上方芸能編集長木津川計氏の記念講演があり、川柳・俳句・短歌各部門の入賞を発表、表彰式も行う。

★はびきの市民川柳会は**9月15・16日**に開かれる第7回陵南の森市民のつどいで市民から川柳を募集する。課題「米」1人3句。

★グループ「創」は第2回誌上川柳大会を行う。課題と選者は「英雄」木野由紀子・唐沢春樹、「首」梶田三昌・桑野晶子、「輝く」定金冬二・近藤智子、「山」西条真紀・奥野誠二、「時計」沢村智章・八木千代、各題2句・同一句を2人共選。参加料1000円、総合点10位まで呈賞、締切は**10月20日**、発表は『創』平成3年1月号、投句先は〒457・名古屋市南区笠寺町市場50・小菅裕子方・誌上大会係。

★都大路川柳社は一五〇号記念誌上川柳大会を次の要項で実施する。選者は伊藤好江・卜部晴美・岡崎徹平・大野風柳・高田寄生木・田口麦彦・寺尾俊平・時実新子・八木千代・奥山晴生の10氏で、投句締切は**10月31日**、応募者は便箋1枚に雑詠3句と住所・氏名を明記し、投句料1000円（郵便小為替を同封、〒616京都市右京区太秦垣内町9・井上信子方、誌上川柳大会係に送ること。採点方法は平抜1点・佳句3点・秀句5点とし、20位まで呈賞、発表は平成3年2月号誌上。

★川柳文学社では永田帆船主幹が病気のため退任し、後任に波部白洋氏が就任。

▼同人消息▲

■NHK学園川柳講座実作コースの一九八九年度作品コンクールで、桝本蕗児氏（大阪市・同人）の次の句が第1位に選ばれた。

よく御覧コアラの顔が悲しそう

また、互選集（実作コース）高点句のトップに青枝鉄治氏（和歌山市・同人）の次の句が選ばれた。

左遷地の厚い情けに根を下ろし

■両川洋々氏（鳥取市・本社理事）は、6月30日、JRを退職。11月の市会議員選挙に立候補が予定されている。

▼正誤表▲

■8月号・P1上段1行目「加減」→「**加減**」、P6下段3行目「料白」「**科白**」、P26下段21行目「紀美子」→「紀美**女**」、P29上段23行目「白信」→「**自信**」、P37下段23行目「終って」→「**笑**って」、P46上段21行目「隅然」→「**偶**然」、P48下段5行目「外料」→「**外科**」、P50下段13行目・P74下段12行目「清子」→「**靖子**」、P64下段1行目「正志」→「**正恵**」、P72上段14行目「西人」→「**西山**」、P81下段6行目「蕗路」→「**蕗児**」、23行目「平和は」→「平和**な**」、P88下段10行目「明子」→「**昭子**」、P90下段12行目「憲佑」→「憲**祐**」、P91中段13行目「吻江」→「**吸江**」、P101中段2行目「よし江」→「**良江**」。

新同人紹介

岡本清水（きよみず）

―蘭幸・静水・栞推薦

清水利武

―敏・吐来・寿美・重人推薦

第37回八尾市文化祭

市民川柳大会

と　き　**10月21日**(日)正午・締切13時
ところ　八尾文化会館第１会議室
（近鉄八尾駅下車・西武デパート東隣）
会　費　1000円（作品集・鉢植花呈）
兼　題　（各題２句）
「絵」　河内　月子選
「粒」　中本まさお選
「戦」　杉森　節子選
「明」　大路　美幸選
「師」　田頭　良子選
「雄」　高杉　鬼遊選
「八」　西尾　栞選
懇親宴　3000円（希望者のみ）

主　催
八尾市・八尾市教育委員会
八尾市文化祭実行委員会

第４回

堺市民芸術祭川柳大会

と　き　**9月30日**(日)　13時開場
ところ　堺市立栂文化会館3階第1講座室
（堺市桃山台2丁2番1号・泉北高速鉄道「とが美木多駅」左へ３分）
はなし　「千利休について」
堺市博物館嘱託　尼見清市
宿　題　「利休」　墨作二郎選
「海鳴り」　蔭田　早苗選
「埴輪」　古川　一高選
「線香」　藤井一二三選
「乱れる」　田頭　良子選
「電車」　半井　甘平選
「町並」　西尾　栞選
席　題　なし・各題２句（締切14時）
欠席投句拝辞
参加費　1000円（作品集・参加賞呈）

主　催
堺市文化団体連絡協議会
堺川柳協会

西宮市民文化祭協賛

川柳大会

と　き　**10月28日**(日)
正午開場・13時締切
ところ　西宮市立勤労会館３階会議室
（阪神西宮東口下車、徒歩２分）
会　費　600円（作品集郵送）
兼題と選者（各題２句）
「くどい」　中村　東角選
「美人」　西口いわゑ選
「したたか」　萩原金之助選
「微妙」　赤松　隆男選
「闇」　黒川　紫香選
「塒(ねぐら)」　小松原爽介選
「束の間」　石井　冬魚選
席　題　なし
投句締切　**10月15日**・投句料(62円切手5枚)
宛　先　〒662 西宮市城山町12－８
水無瀬冨久恵宛

主催　西宮川柳同好会　北口川柳会　学文川柳
浜甲川柳同好会　枝川川柳会

岸和田市文化祭参加

第40回市民川柳大会

と　き　**10月21日**(日)　正午開場
午後２時締切
ところ　岸和田市市民会館地下会議室
おはなし　川柳塔社副理事長 西田柳宏子
席　題　当日１題発表　半井　甘平選
兼　題　「予備」　深日白光子選
「相談」　小出　智子選
「得意」　梶川雄次郎選
「頑張る」　阿萬　萬的選
「ベテラン」　野村太茂津選
「名人」　橘高　薫風選
兼・席題とも各２句
（出句は出席者に限る）
会　費　500円（大会誌・参加賞呈）

主　催　岸和田川柳会

9月各地句会案内

	日／時および題	会場と投句先
堺川柳会	2日(日)午後1時から 崩す・屑・靴・薬	堺市総合福祉会館　南海高野線堺東駅市役所西入ル 〒593 堺市堀上緑町2−9−2　河内天笑
尼崎 いくしま	7日(金)午後1時から 回想・学ぶ・自由吟	サンシビック尼崎　阪神尼崎南西徒歩3分 〒661 尼崎市南清水11番1号　田淵定人 句会費 300円　投句料 62円切手3枚
川柳塔 まつえ	8日(土)午後1時半から 自由・屋根・自由吟	松江市雑賀町雑賀公民館 〒690 松江市雑賀町1686　恒松叮紅
八尾市民 川柳会	10日(月)午後6時から 秋・欲・直角・涼しい	八尾市立労働会館(山本) 近鉄山本駅すぐ 〒581 八尾市上之島北1−15　宮崎シマ子
西宮北口 川柳会	10日(月)午後1時から 辻・しみじみ・戻る・自由吟	西宮市中央公民館　阪急西宮北口駅南出口歩5分 〒663 西宮市高木東町9−4　西口いわゑ 句会費 300円　投句料 62円切手4枚
川柳 ねやがわ	16日(日)　正午から 衝突・出席・舞台・自由吟	寝屋川市立総合センター　寝屋川市駅からバス総合センター前 〒572 寝屋川市春日町6−9　高田博泉 句会費 500円　投句料 62円切手3枚
もくせい 川柳会	17日(月)午後1時から 薬・動物・白い・自由吟	豊中市立中央公民館　阪急曽根東南歩5分 〒561 豊中市島江町1丁目3番5−801　田中正坊
南大阪 川柳会	19日(水)午後6時から 憂い・愚・睡眠・常	寺田町高松会館　JR環状線寺田町駅南100米 〒544 大阪市生野区生野西1−5−2　金井文秋 句会費 500円　投句料 62円切手3枚
高槻川柳 サークル 卯の花	19日(水)　正午から 立派・芸・一泊・自由吟	高槻市民会館306号室　阪急高槻徒歩5分 〒569 高槻市富田町1−7−7−905　福盛京童 句会費 500円　投句料 62円切手3枚　**各題2句**
富柳会	20日(木)午後1時から 養子・余暇・嫁	富田林市中央公民館 〒584 富田林市南大伴353　池森子
南海 川柳会	21日(金)午後6時から 労働・展開・横手・弁当	玉造老人憩いの家　JR環状線玉造西徒歩3分 〒543 大阪市天王寺区空堀町15−18　寺井東雲
川柳 東大阪	22日(土)午後6時から 恵む・登る・もめる・影	東大阪市立社会教育センター　近鉄布施北へ長堂小学校隣 〒577 東大阪市菱屋西5−6−23　桑原喜風 句会費 500円　投句料 62円切手3枚
岸和田 川柳会	27日(木)午後6時から 別途・短気・便利	岸和田市立福祉総合センター　南海線岸和田駅東徒歩5分 〒596 岸和田市上町7−36　植山武助

※川柳塔わかやまは9日(日)創立20周年記念川柳大会（80頁参照）

★特に記載がない場合　句会費 500円、投句料 310円（62円切手5枚）、各題3句以内

原稿送り先（締切・毎月20日　予め決定している場合は何か月分でも結構です）

〒597 貝塚市地蔵堂53番地の5-1-401号　宮園射月芳

編集後記

☆この頃では川柳教室は普通になってきたが、そもそもは、麻生路郎先生が昭和十一年七月、専門家のない芸術は発展しないと川柳職業人を宣言し、日本橋三丁目にあった松坂屋の各種教室の中に川柳を取り入れて指導に当ったのが始まりである。その頃の生徒は秀れた人が多く、前主幹の中島生々庵先生をはじめ松江梅里、戸田古方、石井白面人、戸倉普天、川村好郎、上田翠光さんらがいた。

☆その後、十八年の十二月号を『川柳雑誌』の終刊号として〝雑誌奉還〟し、路郎先生は翠光さんの所へ疎開された。そこでの句「名も知らぬ山の起伏をうれしがり」が二十五年六月、路郎第二句碑として奈良県宇陀郡室生村の翠光宅の裏に建ったのであった。あれからちょうど今年が四十年目になり、また過日、生々庵先生の句碑が翠光さんの牧場内に建ったので、私たちも除幕のお祝いにお伺いしたいと思っている。

☆「倶会一処」の川柳塔に昨年建立以後一年間の物故者が十月六日、法要とともに合祀される。趣味の友が死後も語り合える所があるのだと思うと、私たちは何と幸福なんだろうと胸に熱いものを感じる。（萬）

▼週刊朝日で連載の司馬遼太郎氏の「街道をゆく」の挿絵を担当していた須田剋太氏が、去る七月十四日に八十四歳で逝去された。氏は洋画であるが、抽象も具象も分けることなく自由に描いている。一方、豪放な書もかく。それも紙に墨書するのでなく、絵画用のカンバスに油絵具で山気も修辞もない、それは子供の熱中した姿そのままの筆勢である。好んで「無一物　無盡蔵」の文字を書くが、「上下左右前後表裏直前直後一二三前後截断差異断絶矛盾結合貧弱愚徹」の珍しい書に出合った。三年前の約十五号の作品である。ただ文字の羅列といえばそれだけのことだが、川柳作句の初歩的一考察として活用できるのではないか。

▼絵にも書にも人それぞれに好みがあって一概には言えないが、上手下手を超越した奈辺に大切なものを見ることがある。剋太氏作品の魅力は、誰にでもかけるつたない面が身近さ親しさを感じさせるものの誰にもかけないところだと思う。

「こどもで　げんきで　ものになりきる　下手でかみさまで　いますぐやってのける」何年か前の画帳の扉に書いてあった。板画の棟方志功氏に通じるところがあっておもしろい。

▼森本哲郎氏の本に〝私のいる文章〟がある。新聞記事には私がいては困るが、表現作品には「私」が存在しなければならない。（き）

★翠柳吟社創立十五周年記念川柳大会への参加をかねた二泊三日のバスツアー。くわしくは吟行記でご覧いただきたいが、大会や観光もさることながら各地から集まった五十人もの同人・誌友が行動を共にして親睦を深めたのは、何ものにも代えがたい収穫であった。

★いつか書こうと思っていたことだが、本誌の製作工程についてである。川柳塔・水煙抄などへの投句は、毎月十五日に締め切り、それから選が行われて原稿が月末ごろに編集者のもとに届く。そしてその他の原稿は、翌月七日ごろに開かれる本社句会の清記原稿以外のすべてのものが、月初めに出そろわなくてはならない。

★それから原稿校正・編集整理の作業が集中的に行われて上旬に印刷所へ出稿、中旬に校正、二十日ごろに校了し、製版・印刷・製本という工程を経て二十七日ごろに納品され、ただちに発送して月末までには読者に届くことになっている。

★雑誌は定期刊行が生命であり、この一連の工程がどこかで狂うと、それが維持できなくなるし、時間が切迫するとさまざまなトラブルも発生しやすい。そしてそのスタートは原稿提出にあるので、決められた枚数と期日を厳守していただきたいというのが、編集部の切なる願いである。（正）

作品募集

11月号発表（9月15日締切）

川柳塔（10句）西尾栞選
水煙抄（10句）黒川紫香選
銀河系（3句）河内天笑選
茴香の花（3句）八木千代選
「天」水粉千翁選
「文化」山田高夫選
「親しい」柴田英壬子選

課題吟（3句）
初歩教室「来賓」（3句）辻白渓子担当

★川柳塔欄は同人、水煙抄欄は誌友、茴香の花欄は女性、その他はどなたでも投句できます。

12月号課題吟「ラスト」「特別」「助ける」

同人費・誌代などのご送金は、川柳塔社会計室（高杉鬼遊方）へお願いします。

〒581 八尾市中田2—302
振替口座 大阪 8—33368
誌代 半年分 3,800円（送料共）
1年分 7,500円（送料共）

定価 六百円（送料51円）
平成二年八月二十五日印刷
平成二年九月一日発行
編集兼発行人 西尾巌
印刷所 藤原童心社
〒545 大阪市阿倍野区三明町二—一〇—一六 ウエムラ第2ビル202号室
発行所 川柳塔社
電話（06）六六一六九一四番
振替口座大阪8—三三三六八番

本社9月句会

日時 9月7日（金）午後5時半
会場 メンズファッションセンター3階
中央区内本町1—1 電06・941・1918
地下鉄谷町4丁目下車（2番出口）交差点西南角

おはなし 塩満敏
兼題「息」奥田みつ子選
「天狗」宮園射月芳選
「困る」辻白渓子選
「つらい」松川杜的選
「乗る」西尾栞選

席題 1題 当日発表 各題2句以内厳守
会費 500円
投句 柳箋（4cm×19cm）1葉に1句を書き、投句料310円（62円切手5枚）同封のこと

本社10月句会 7日（日）

兼題 「仮り」「余生」「当分」「一緒」「いのち」

NHK川柳作品募集

課題「笑う」 橘高薫風選
ハガキに3句 9月10日締切

投句先 大阪市中央区馬場町3—43
NHK大阪放送局
「ラジオセンター」川柳係
発表 9月30日（日）ラジオ第1放送
午前11時5分から

西日本文字放送作品募集

課題「留守」 橘高薫風選
ハガキに3句 9月15日締切

投句先
〒540 大阪市中央区谷町2丁目2—20
大手前ウサミビル3階
西日本文字放送 川柳係

昭和四十一年一月九日　第三種郵便物認可
平成二年八月二十五日　印刷
平成二年九月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年　通巻七六〇号　川柳塔　九月号
定価　六百円（送料　五十一円）

川柳カレンダー・予約受付中

【題　字】
坂本　一胡（国語審議会会長・元NHK会長）

【カレンダー掲載色紙揮毫】
佐藤正敏・渡邊蓮夫・西尾栞・尾藤三柳・野村圭佑・礒野いさむ・去来川巨城・山田良行・大野風柳・吉岡龍城・斎藤大雄・坂本一胡の各先生（順不同）

＊右先生の「色紙」別刷り十二枚はり込み

◎全国川柳大会入選作発表
＊入選句と作家氏名（一、八〇〇人）掲載
＊大きさ・タテ長和向き二七〇×五八〇㎜

◎次回の全国川柳大会「投句用紙」同封

【価格】＊実費一部九五〇円（送料は使用郵便切手分を『カレンダー』到着後に送金していただきます）

【申込方法】＊ハガキでお早めにお願いします
〒194－01　東京都町田市金井町四二四
日本伝統美保存会文化部
「川柳カレンダー」全国川柳大会事務局

おわび
平成二年の「川柳カレンダー」は、発行と同時に完売となり、そのため、ご迷惑をおかけしました。深くおわびいたします。

泣いて笑って……
夜を通り過ぎたら
また陽がのぼっていた
男のロマン

オーエスケーの
紳　士　服

株式会社 大エスケー
〒540　大阪市中央区南新町１－４－７
（06）９４１－８０１８

雑誌　05703－9